



月刊 もぐら通信

Mole Communication Monthly Magazine

2020年11月1日 第98号 初版

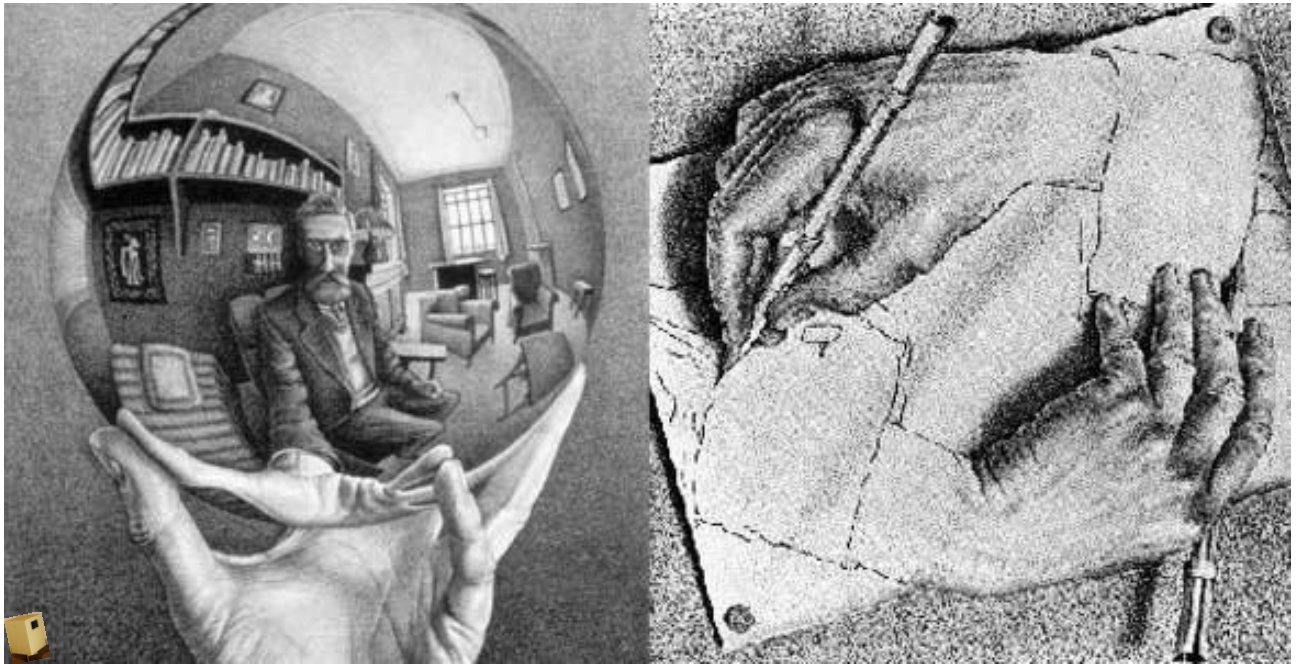
www.abekobosplace.blogspot.jp

あなたへ：
迷う事のない迷路を通って
あなただけの番地に届きます

魂になったぼくは、すこしはなれて、ぼくの死体をみた。この半日で、ぼくの体は、木彫りの仙人のようにひからびてシワだらけになってしまっていた。そのせいか、眼の下の、射ぬかれた傷跡からは、ほんのすこししか血が流れていなかった。それで、眼の下に、もう一つべつの眼ができたように見えた。

(『変形の記録』全集第4巻、263ページ上段)

エッシャーの絵



「おゝ、僕は、
大きなゆがんだレンズです。
救ひに両手を差しのべる、
大きなゆがんだレンズです。」
(『秋でした』 [1943.10.6] 全集第1巻、6
7ページ)

「手は正確にペンを支えていたが、よくみると
ぺんばかりでなくその中に或る大きな影を、限りなく暗い空間を支えている。指はその上で昆虫の触覚のように慄えている。」
(『名もなき夜のために』 [1948.5.14-10.7]
全集第1巻、511ページ下段)



目次

- 0 目次…page 2
 - 1 記録&ニュース&掲示板…page 3
 - 2 荒巻義雄詩集『骸骨半島』を読む（16）：神の三角函数：岩田英哉…page 6
 - 3 『周辺飛行』論（11）：ある芸術家の肖像—周辺飛行8：岩田英哉…page 12
 - 4 『飢餓同盟』論～「飢餓同盟」の結成によつて安部公房はマルクス主義と超越論を一つにした～：岩田英哉…page 23
 - 5 リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む（41）：第2部 XVI：“何度も何度も、私たちによつて、引き裂かれるように引き開けられても”：岩田英哉…page 73
 - 6 編集後記…page 82
 - 7 次号予告…page 82
-
- ・連載物・単発物次回以降予定一覧…page 79
 - ・本誌の主な献呈送付先…page 83
 - ・本誌の収蔵機関…page 83
 - ・編集方針…page 83

PDFの検索フィールドにページ数を入力して検索すると、恰もスバル運動具店で買ったジャンプ・シューズを履いたかのように、あなたは『密会』の主人公となって、そのページにジャンプします。そこであなたが迷い込んで見るのはカーニヴァルの前夜祭。

ニュース&記録&掲示板

The best tweets 10 of the month



該当なし



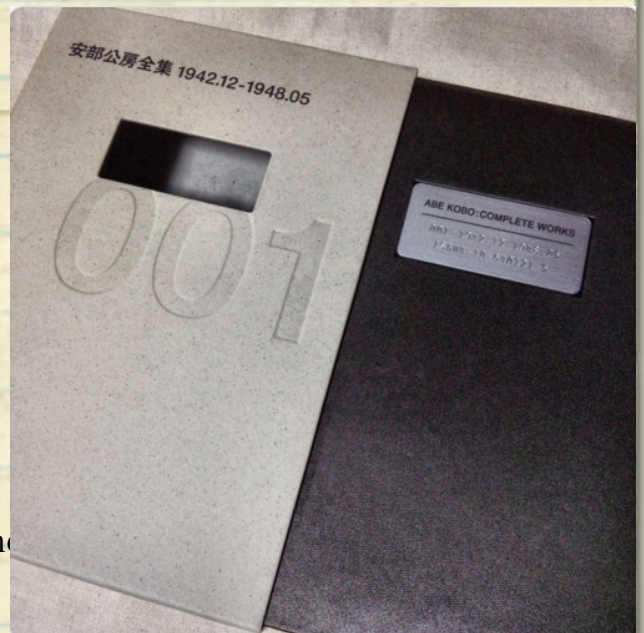
ホッタタカシ@t_hotta 18 hours ago

次の元号に安部公房の「安」の字がつく、なんて噂があるんですか？

今月の安部公房全集第1巻

o mai@yoshino314 Mar 2

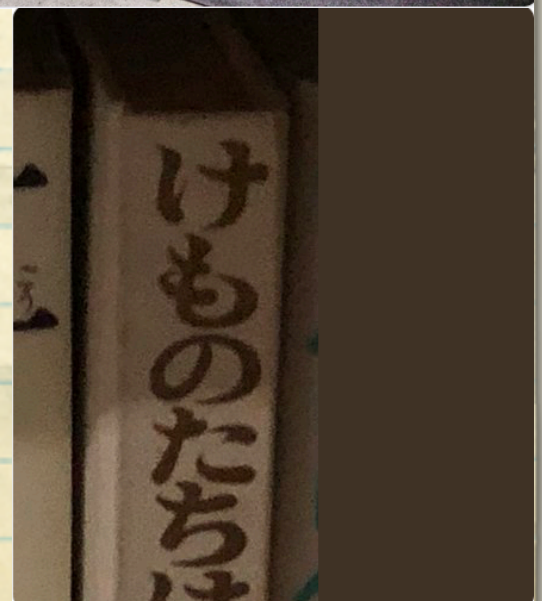
安部公房の全集は装丁がかっこよすぎる。
メタルプレート！



今月のシュールレアリズム

masataka nagano@masataka_nagano 8 h
talk !

ひとまず図書館で安部公房全集借りてきた



今月のけものたちは故郷をめざす

ゑもん@weiss_zoo 21 hours ago

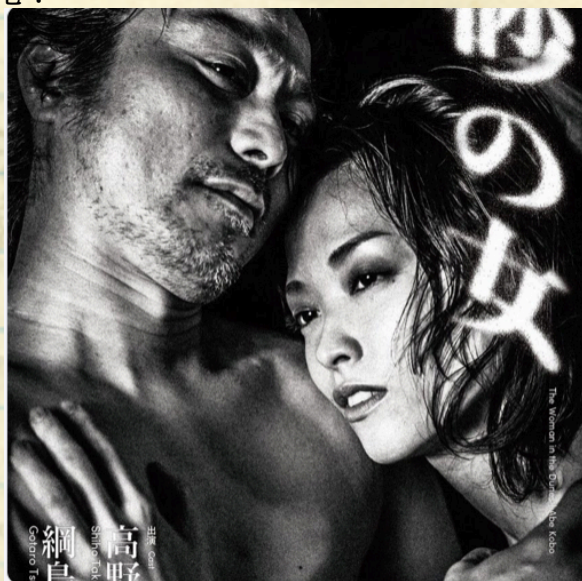
12月に高山線で岐阜を縦断してJMCを訪れた時、乗り換えの猪谷駅に置いてあった安部公房の著作。たましいの故郷をめざします。おやすみなさい。

今月の舞台『砂の女』

舞台「砂の女」2019年4/4~8早稲田小劇場どらま館@JGwTI9pAhxebkx9 6 hours ago

安部公房の代表作のひとつ『砂の女』を舞台化！

於 : 早稲田小劇場どらま館
日時 : 4/4木 夜公演
4/5金 夜公演
4/6土 昼夜公演
4/7日 昼夜公演
4/8月 夜公演
料金 : 3,800円 (当日4,000円)



今月の落語家

笑福亭羽光(中村好夫)@syoufukuteiukou Feb 28

影響を受けた作家たち。筒井康隆、ステイブソキング、遠藤周作、**安部公房**、竹熊健太郎、ヴォネガット、三島由紀夫。そんな僕の新作落語二席と古典一席、是非聴きに

来てください。明日です。

(入れる)



今月の島田紳助

scenery@scenery1000 Feb 25

安倍公房と島田紳助が似ています。

(画像4枚目は島田紳助にメガネを書き加えています。)安部公房はエスプレッティスト。

<http://rapt-neo.com/?p=41323>

島田紳助の本名は「長谷川 公彦」。

安部公房と長谷川公彦の名前は「公」という字がかぶっています。偶然でしょうか。

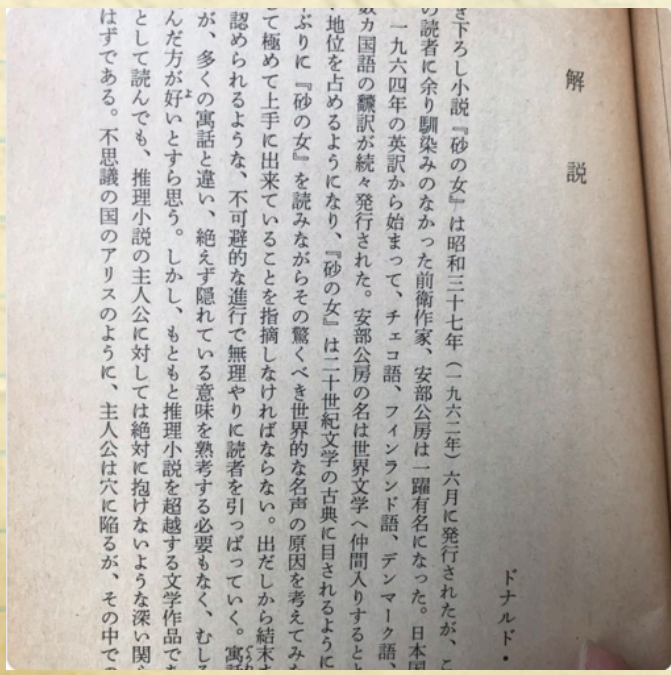


今月もキーンさん追悼

ヤマザキマリ (Mari Yamazaki) 公式 情報用アカウント@THERMARI1 Feb 24
 キーンさんをモデルにした「ジャコモ・フォスカリ」で描いたこのシーンは安部公房との対談集「反劇的人間」のあとがきにあった本当にあった話。安部公房がキーンさんに日本酒のソーダ割を飲ませて薬物依存症かどうかを実験したというシーン。どんどん再開したくなってきた… (カ)

叫沢@irotakla Feb 23

ドナルド・キーンさんの訃報を聞き、30年近く放置していた安部公房「砂の女」を引っ張り出し、彼が書いた解説を読み返した。安部公房は難しく考えて読むのではなく、変幻自在の比喻を愉しむものと思っているが、キーンさんのように日本語で公房の表現を理解できる人がいなくなるのは残念だ。



荒卷義雄詩集『骸骨半島』を読む

(16)

神の三角函数

岩田英哉

扉が象徴でなければ、懐中電灯は
月の光になり得ない
折り畳まれたエッシャーの階段で、発掘された
位相の化石は
ノアの骨ではあり得ない
クフ王の石棺は
虚空のテラスを浮遊しつつ
柔らかな月と戯れ
女神（アニマ）が豎琴を弾き
月の滴（しずく）で織物を織る

銀の時代に かつて矛を交えた巨神たちの古戦場
一筋の戦車の轍（わだち）こそが、世界の基準線だ
神々の名が神函数（しんかんすう）で微分計算される時
赤錆たドラム缶の中で、アダム製鉄所の溶鉱炉が停止する

あらゆるものを無化する 未来の源がある
ゲーデルの証明がなされて以来 神とは
無窮の時の停止点で 孵化する存在となり、
そこから 此の岸へ
後ずさりして やってくるのだそうだ。
恩寵の逆数

神々の種族にも 人為淘汰の原理が適用される
散乱する 神々の遺骨で 描かれた謎の図形は
荒野に横たわる三角函数式がその証だ。
殺戮された地の霊たちの夢精が この世界を創る

かつては棲みつし 無数の小さな神たちが人員整理され
許しがたき岬の文明が興り 機関銃を振りかざしつつ聖職者どもが
借り集めた奴隷たちを船出させた ペテン師の浜辺

渚の境界線は 強度の線分である。

三角函数といふ以上は、幾何学的に三角形を形成する三つの何かがあれば函数関係は成り立たず、三角函数と呼ぶに値する函数にはならないといふ事は解ります。しかも、これは単なる三角函数ではなく、神の三角函数です。

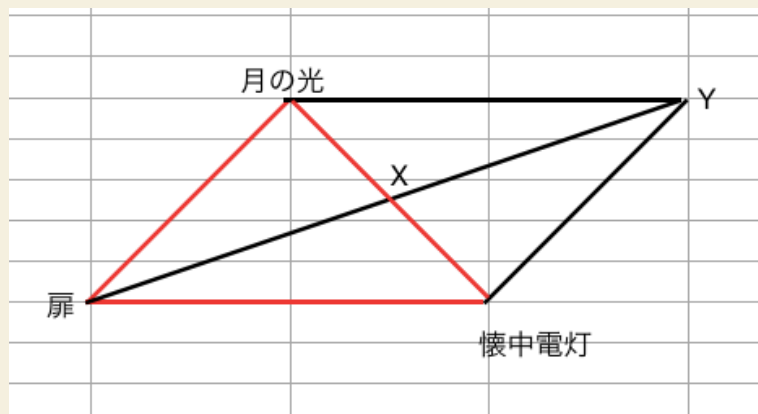
この「神の」の「の」が、神の支配する三角函数といふ意味なのか、それとも三角函数といふ相関関係の中に神宿るといふ意味なのか、これは詩を読み進めるにつれ自づと知られることでせう。

最初の3は次の三つの言葉です。

- (1) 扉
- (2) 懐中電灯
- (3) 月の光

この三つの言葉の関係は、象徴といふ言葉が媒介になつて、懐中電灯といふ人工的な地上の生活のなかの夜の光が、天上の月の光になるには、扉が象徴でなければならないといふ。

といふ事は、この詩は扉を巡る詩であるといふことになります。そして、この扉は象徴としての扉であるからには、扉の象徴としての隠喩（メタファ）が此の詩の中で使はれてゐる其の使ひ方を見れば、扉の使はれる文脈が判ることといふことになり、この詩の脈絡も判るといふことになります。図示すると次の通りです。



さて、果たして上手く行くかどうか。

視線を一挙に後ろの連にやつて、この三角函数が何かを最初に読むことにします。

「神々の種族にも/人為淘汰の原理が適用される」とは、神々も不死ではなく、この三角函数式が適用されれば死に至る。「散乱する/神々の遺骨で/描かれた謎の図形」が其れを物語る。それが「神々の遺骨で描かれた」「荒野に横たわる三角函数式」であり、これが其の証であるといふ。

ここまできを読み、次の連を読むと、一神教の唯一絶対神を奉戴する近代ヨーロッパ文明が「岬の文明」と呼ばれて、神々の世界を滅ぼしたと読める。ユーラシア大陸の極西の岬がヨーロッパ地域です。

「かつては棲みつぎし 無数の小さな神たちが人員整理され
許しがたき岬の文明が興り 機関銃を振りかざしつつ聖職者どもが
借り集めた奴隷たちを船出させた ペテン師の浜辺

渚の境界線は 強度の線分である。」

確かに、16世紀17世紀に日本にやつて来たイエズス会のスペイン人のカソリックの僧侶どもは、日本人の男女70万人（と私はある資料で読んだ）を奴隷にして海外に売り飛ばして巨利を稼いだ。有色人種は異教徒であり人間ではないからである。キリスト教徒になつた九州の大名たちも同じ日本人である自国の領民を同様に奴隷として海外に売り飛ばして巨利を得た。豊臣秀吉がイエズス会に宛てて書いた怒りの書状がイエズス会側の資料として残つてゐる。その書状に書いてある通り、秀吉は拉致された日本人を金を払つて買い戻したのである。それ故の豊臣秀吉によるバテレン追放令であり、徳川家によるキリスト教の神父とキリシタン大名の海外追放であり、キリシタン大名の帰国禁止命令であり、キリシタン教禁止令であると、何故日本の義務教育ではこの歴史的事実を正しく教へないのであろうか。伊達政宗の派遣した大正遣欧使節の一人がヨーロッパの奴隷市場で日本人の女性が秘部を剥き出しにして売られてゐる市場での様子を見たときと記録してゐる其の嘆きを私たちは思ひ出すことであらう。公平に見て、この500年、インカ帝国の侵略と虐殺から始まつて、カソリックの、即ちローマ法王庁のなした事は、確かに神々と人間の殺戮であり、物質科学の応用技術の産物である「機関銃を振りかざしつつ聖職者どもが/借り集めた奴隷たちを船出させた」事であつた。かうして、

確かに「渚の境界線は 強度の線分である。」

この線分の強度は日本の国の内側を守つた線分の国境線の強度か、それとも日本人の男女を奴隷として拉致して船出した聖職者たちの、日本の国に対する線分の強度であるか。

しかし、遂に此の絶対命令者たる唯一絶対神も「恩寵の逆数」によつて存在が許される命令者になつた。何故なら「ゲーデルの証明がなされて以来 神とは/無窮の時の停止点で 孵化する存在とな」つたからである。ゲーデルの定理とは『フロイト博士の家』（もぐら通信第91号）で知つたやうに次のやうな定理であつた。

「(1)第1不完全性原理

「ある矛盾の無い理論体系の中に、肯定も否定もできない証明不可能な命題が、必ず存在する」

(2)第2不完全性原理

「ある理論体系に矛盾が無いとしても、その理論体系は自分自身に矛盾が無いことを、その理論体系の中で証明できない」

第1不完全定理の証明は、唯一絶対神の創造した世界が完璧ではないといふことを証明して、そして、第2不完全定理は、

「矛盾のないことを証明するためには、その理論体系の外部に出なければなりません。これの意味するところは、理論体系は幾つもあるといふ事実を受け容れなければならないといふことです。この事実と論理そのものが、「ある理論体系に矛盾が無い」といふことを否定してあるといふことを意味してゐます。宇宙はいつも複数あり、宇宙は幾つもあるのです。安部公房の世界です。即ち、これは言語の基本ですが、あなたは一体何処にゐるのか？」

これが「神とは/無窮の時の停止点で 孵化する存在となり」、さうなつた停止点の「そこから 此の岸へ/後ずさりして やつてくるのだそうだ。」唯一絶対神が後ずさりして此の岸へ、即ち時間の存在する此の世にやつてくるのであれば、これは神が絶対命令の裏返しとして人間に与へ給ふ恩寵の逆のことであり、これを「恩寵の逆数」と呼ぶことができよう。逆数に時間は無い。これが、「あらゆるものを無化する 未来の源」にあることにならざるを得ない「恩寵の逆数」である。「未来の源」である「無窮の時の停止点」から此岸へと後ずされば、神は時間の創造をする事は出来ない。これが「恩寵の逆数」である。

この時間と神の停止点こそが、「神々の名が神函数（じんかんすう）で微分計算される時/赤錆びたドラム缶の中で、アダム製鉄所の溶鉱炉が停止する」一点である。

神函数（じんかんすう）とは、この点を何かと接続して線分に変へ（停止線）、更に面に次元を上げて（停止面）機能する。

その線の時代は「銀の時代」と呼ばれる。この「銀の時代に かつて矛を交えた巨神たちの古戦場/一筋の戦車の轍こそが、世界の基準線だ」といふ其の轍の一筋の線が、「渚の境界線は 強度の線分である」ならば、それは、日本人の男女を奴隷として拉致して船出した聖職者たちの、日本の国に対する線分の強度ではなく、この線分の強度は日本の国の内側を守つた線分の国境線の強度であることになる。

巨神たちは、「無数の小さな神たち」との死とは別に、神函数で其の世界を守護したのだ。

「一筋の戦車の轍こそが、世界の基準線だ」

それでは、一面である世界を測定する基準面は何か、それはどこにあるのか。

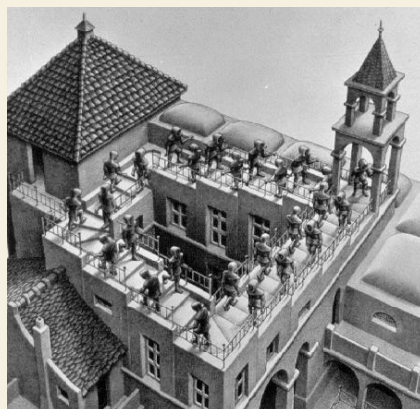
それが、「クフ王の石棺は/虚空のテラスを浮遊しつつ/柔らかな月と戯れ/女神（アニマ）が
豎琴を弾き/月の滴（しずく）で織物を織」られた其の織物である。

安部公房の読者ならば、ここで『詩人の生涯』でユーキッタン、ユーキッタンと繰り返しの
呪文によつて織られるあの汎神論的存在論の存在の、世界中の労働やが着るジャケツを思ひ
出しても良いでせう。

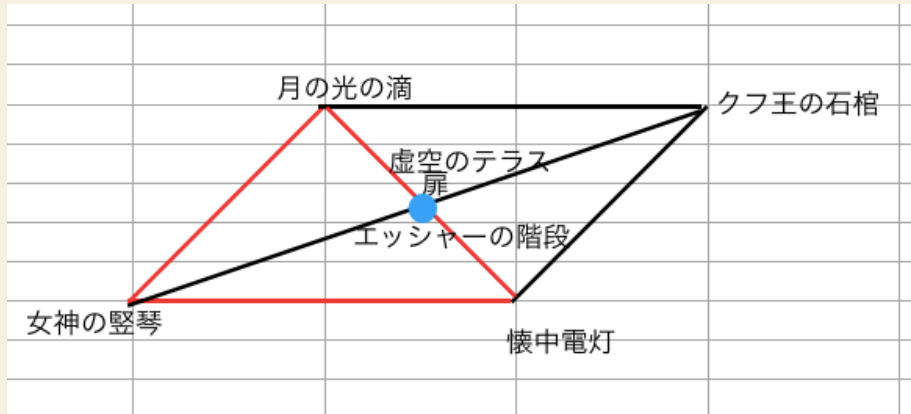
月の光の滴で織る織物が、女神の豎琴と凹のクフ王の石棺といふ共に神聖なるものによつて
「虚空のテラス」で織られるといふ事は、冒頭の最初の二行に戻れば、これが、扉が象徴で
あり、時間の中で有用に製作された懐中電灯の人工の光が無用の月の光になつたといふこと
なのであり、それが「恩寵の逆数」の存在する「無窮の時の停止点」たる「虚空のテラス」
で織られる月の光であるとは、安部公房ならば「クリヌクイ クリヌクイ/カーテンにうつ
る月の影」と詩にした部屋が存在の部屋であることに何処か通じてゐる。

さて、それでは、この織物をなす象徴の扉（入口・出口）といふ上位接続面は何であり、そ
れはどこにあるか。

それは一筆書きに「折り畳まれたエッシャーの階段で」はあるまいか。そこで何が発掘され
やうとも、このtopologyの位相にあつては時間は存在せず、メビウスの環の永劫回帰の相の
元に唯位相の化石あるのみ。この化石は、勿論人間「ノアの骨ではあり得ない」。



この永劫回帰の階段の上で、神の三角関数は次のやうに変形する。



然して、この汎神論的存在論のtopologyを成り立たしめてゐるのは、「殺戮された地の霊たちの夢精がこの世界を創る」からである。

私たちは果たして此の「殺戮された地の霊たち」であるか。

『周辺飛行』論

(1 1)

3. 『周辺飛行』について (6)

「ある芸術家の肖像—周辺飛行 8」

岩田英哉

これは「新傾向を代表する若手劇作家」AとBの話である。「AもBも実在する人物である。しかし、これから述べることは、AにもBにも、一切かかわりがない。すべてがぼくの夢の中の出来事にすぎない」といふ二人の現実と夢の話です。と言はむよりは、これが「ぼくの夢の中の」二人の「出来事にすぎ」ないといふのであれば、いつもながらの安部公房固有の話法 [註1]、即ち作者—読者論の要である話法「僕の中の「僕」」の后者の「僕」の話であつて、前者の僕が現実の僕であり、それ故に「AもBも実在する人物である」が、しかし他方、后者の「僕」の話である以上、現実の中に「AもBも実在する人物である」りながら、夢の中に「AもBも実在する人物である。」といふことが成り立つ、いつもの安部公房世界の大前提の始まり、即ち二項対立の否定による第三の客観 [註2]、即ち自己の反照たる存在が、このやうな冒頭の最初の二行です。即ち、かくして、

この話は存在の話であり、存在の中での話である。

といふことになるのです。

この存在のあり方と、「僕の中の「僕」」といふ作者固有の話法によつて、この「新傾向を代表する若手劇作家」AとBの話」の中にまた話中話、劇中劇が語られることになるといふのも、この安部公房の前提にする話法の構造から云つて「おのずから当然のなりゆきとして」実際読み進めると其の通りの話になつてゐる。

[註1]

「僕の中の「僕」」といふ安部公房固有の話法については『デンドロカカリヤ』論 (後篇)』（もぐら通信第56号）にて詳述しましたので、ご覧ください。

[註2]

この否定積算値 (二進数でいふ否定論理積: conjunction) を求める安部公房の数学的な、または論理的な論理は、22歳の論文『詩と詩人 (意識と無意識)』に詳しい (全集第1巻、104ページ)。

さうすると、さて問題は、「周辺飛行7」の睡眠導入術の場合を思ひ出せば、この夢と現実の、また夢の中の現実と前者の夢と後者の現実の「切れ目」がどこにあるのかを探すのが、私たち読者がなすべきことであり (何故なら読みながら此処まで来ると「既にして」「何時の間にか」この世界に迷い込んでゐるから)、実際にAは、Aの家宅に不法侵入しようとした

Bの後を追つてみる内に夢の中の現実から最後にはB演出の劇の舞台の上といふ虚構の中に迷込み（読者もまた一緒に迷ひ込み）、Aが止むを得ず観客に向かつて舞台上で科白を述べてみると「何度目かの幕が急速に降り」て来て、「周辺飛行3」の案内人たる給仕に従つて永遠に粉といふ存在の鶏料理を食べ続けて終はりが無いのと同様に、此処でも永遠に「ゴドーを待ちながら」幕の内側の舞台の「暗闇の中に、何時までもじっとただたちつづける」ことになる。さうして、ゴドーといふ端と端を上位接続（論理積）する何かの現れる気配はない。

そこで、私たちはAと一緒に、またはAに成り代はつて、いや、自分自身が此の幕の降りた舞台といふ閉鎖空間から脱出するためにあの「切れ目」を、即ち端と端の隙間を見つけなければならないのです。その切れ目はどこにあるか。

鶏料理といふ店のシェフお薦めの料理が粉であるのは、『砂の女』の砂といふ変形自在の形象（イメージ）を持つ汎神論的存在論的存在の形象だからであり、それが何故鶏料理なのかは、この鳥が繰り返しの呪文をコケコッコと、それも朝方といふ夜と昼の始まりの隙間の時間に鳴くからでした。同じことが、此処でも云へないだらうかと考へてみる。鶏料理の場合には、鶏はすっかり料理されてみて死んでゐるので呪文を唱へて鳴くことができず、従つて、存在を新たに招来して時間と空間の隙間をつくつて今閉じ込められてゐるレストランの中から脱出する契機を生み出すことができないので、永遠に主人公は鶏料理を食べ続けなければならなかつた。

この「周辺飛行8」で、鶏の役目を果たしてゐるのが、犬です。

Aの飼つてゐる犬が、Bに懐（なつ）いて少しも番犬の用をなさなかつた。この犬は、腹を空かせると餌をくれる人に誰でも懐いたふりをして「尻尾を振ったり」する。尻尾は繰り返し振るが、声に出してワンワンといふ繰り返しの呪文を唱へることのない犬になつてしまつてゐて、この呪文による「切れ目」がやつて来ないので、Aは幕の内側の舞台の「暗闇の中に、何時までもじっとただたちつづける」ことになつてゐるといふことなのです。

さう、従ひ、この「ぼくが忘れず餌をやつていさえすれば、B君のドラマは、その発端から成り立たなかつたわけだ」し、発端といふ端がなければ、終はりといふ端も存在しなかつた。しかし、この二つの時間の中での両端の始めと終はりといふ二項対立が否定されてゐるので、現実存在の舞台（虚構）となり、話中話の中にAはいつの間にか迷ひ込み、舞台上で、以上の構造と其の成り行きを説明する科白を口上として再帰的に述べる羽目になつたのです。

安部公房の世界では、猫は殺されるが〔註3〕、犬は殺されないのは何故でせうか。二項対立の否定といふのであれば、猫と仲の悪いもう一つの二項対立項である犬も殺されてしかるべきではないでせうか。

[註3]

『何故安部公房の猫はいつも殺されるのか?』（もぐら通信第58号）および『「安部公房猫殺人事件論」余滴：安部公房はオルフォイスを殺したか?』（もぐら通信第60号）にて詳述しました。各号のダウンロードは：

- (1) 第58号：<https://www.scribd.com/document/347233914/第58号-第四版>
- (2) 第60号：<https://www.scribd.com/document/350785066/第60号-第四版>

猫は天使の変形した姿でした。犬は何の変形した姿かと問へば、天使の変形に対して、悪魔の変形した姿だといふ答へが正解でありませう。この悪魔は初期安部公房にあつては、隙間に棲んでみて、夜になると主人公の部屋の中に登場するのです。（犬は悪魔の変形した姿であるといふ新しい知見を入れて「詩人から小説家へ、しかし詩人のままに」を新しくしました。ダウンロードのURLは：<https://docdro.id/FbpWU2d>）

天使と悪魔のうち、猫は天使の変形として殺され、犬は悪魔の変形として隙間の中に棲息し続ける。後年の安部公房の言ひ方をすれば、メフィストフェレスがみなければファウストがみないやうなものさ。といふ事ですし、穴がなければドーナツではないといふ事なのです。ここまで来れば、この論理がtopologyであることがお分かりの筈です。二義的・二次的なものが、実は一義的・一次的なものの生殺与奪の権を握つてゐる。その実在を存在論的に保証し保障してゐる。安部公房は子供の頃幾何学が好きで補助線を発見することが喜びだった。補助線の発見はユークリッド幾何学でのtopologyです。

この消息を、安部公房は次のやうに書いてゐる。

「ふと台所の方で、なにやら気になる物音がし、また何時もの泥棒猫だろうと考え、ちょうど目についた母校での講演記念の文鎮を手にしてそっと様子をつかがうと、呆れたことにそれがBだったというわけである。」（全集第23巻、329ページ上下段）（傍線引用者）

初期安部公房の作品『（ある霊媒の話より）題未定』でも老婆に魚を盗んだ泥棒猫（この場合はBに当たる）が両端のある「婆さん愛用のステッキ」といふ棒によつて撲殺されるといふ事を思ひ出して下さい（全集第1巻、19ページ上段）。この「周辺飛行」ではAは両端のある棒に相当する「母校での講演記念の文鎮」を片手にする訳ですが、しかし、後述するやうに/する理由によつて、犬が繰り返しの呪文を吠えないので、Aを撲殺することができず、現実と夢の中をさ迷ひ続けることになるのです。

Aが夜間に家宅侵入の罪を犯しても、「そうとも、ぼくはあいつを見たが、見られてはいない。猫に対する復讐に心はずませながら、凶器をつかむ手つきで文鎮を構えていたことも、殺気をおびた猛獣気取りで台所にしのびよったことも、Bに気づいてたちまち糊をかぶつたやうな顔になったことも、あいつ自身はまだ見ていないのだ。」

うがつた解釈をすれば「糊をかぶつたやうな顔」は「猫をかぶつたやうな顔」の本歌取り、即ち、文藝的なパロディー、即ち言葉遊びかも知れない。

この「周辺飛行8」の発表日付は1972年5月1日です。1973年3月30日に発表される『箱男』で、主人公の箱男が箱の中のこちらの覗き窓から外部を見るが、外部の人間からは見られてみないといふ此の契機の差異、食ひ違ひ、隙間に現実から脱出する契機を求める箱男の論理のあることを、私たち読者は、かうして安部公房スタジオ準備期間の此の時期に書かれた「周辺飛行7」と「周辺飛行8」の連載を読むことで知り、理解することができます。

そして、安部公房スタジオの俳優たちに指導したのは、舞台の上の俳優は夢見るものではなく、夢見られるものでなければならぬといふことでした。そして、夢見るものに夢見られるものは、窓の向かうの部屋にゐる死刑直前の椅子に座つてゐる男の状態にあつて、そのままの状態死ぬことを覚悟しなければならず、また其のやうに死なねばならぬといふことでした。（『睡眠誘導術—周辺飛行7』もぐら通信第97号）。

かうしてみれば、この「周辺飛行8」でAがBの舞台に「いつの間にか立っている」と、「向うの闇の底からどつと笑声」をあげる観客とは、夢見る者たちです。Aは「いつの間にか」夢見られる者になつてしまつてゐる。安部公房スタジオに足を運ぶ観客たちは夢見る者であり、舞台の上の俳優たちは夢見られる者である。そして、其の舞台と客席の「切れ目」は何処にあるのか。

これが箱男の生と死の論理であり、箱といふ閉鎖空間脱出の論理です。

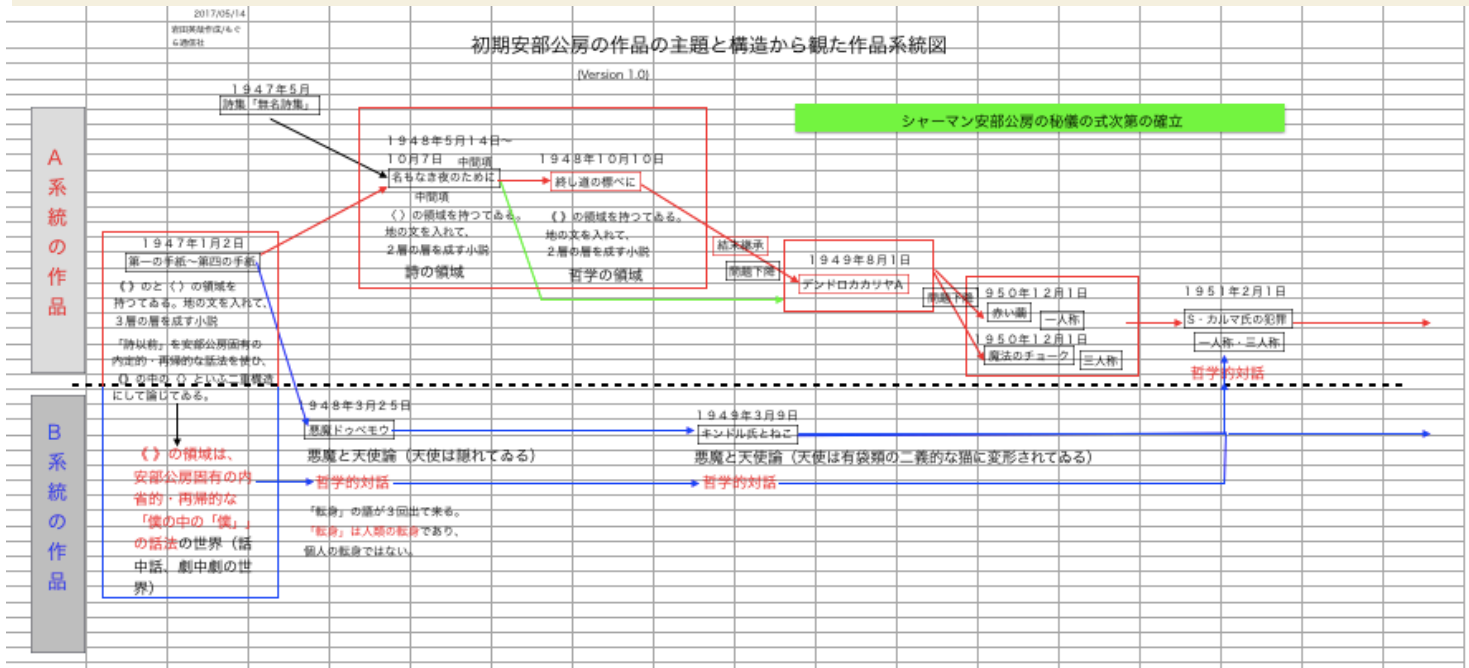
以後、この論考を含み此れ以外の論考があつても、この事を十分に知つた上で、単に箱を被るから箱男なのではなく、以上の論理を知つた男としての箱男といふ前提で、鉤括弧抜きで、箱男といふ言葉を地の文の中で使ふことにします。

このやうに考へて来ると、山口果林著『安部公房とわたし』に書かれてゐる1978年6月の、次の『人さらい イメージの展覧会Part II』の舞台がよく理解できる（「斬新な公演「人さらい」」の章。同書72～73ページ）。

「「人さらい」は言語化しにくい、暴力的と言ってもよいほど斬新な公演だった。劇場空間全体が作品の一部になっている。まず中央の舞台空間を囲んで、客席を離れ小島のように六つのブロックに分散させた。この公演では、客席は安全地帯ではない。開演前から各ブロックは他のブロックの客席と見合っていることになる。また仮面をかぶつた「人さらい」役の三人から、標的を狙う目でジロジロ監視される。舞台が始まっても、舞台と客席は相互に「見る・見られる」立場が入れ替わる。あるシーンでは、客席はブロックごとい大きな白布の壁で覆われる。「見る」行為が遮断されるのだ。布壁の上から竹馬に乗つた「人さらい」がじろじろと客席の獲物を物色する。布壁の下から這い出た「村人」が「十円頂戴！」と観客に迫る。

音楽は安部公房がシンセサイザーで創作した。聴覚にあえて拒否反応を起こさせるような音だった。」

最後に、悪魔が犬に変形した経緯を初期安部公房論からチャート図「初期安部公房の主題と作品の構造から見た作品系統図」（もぐら通信第59号）」を使つて説明します。再掲します。ダウンロードは次のURLで: <https://ja.scribd.com/document/348350612/初期安部公房の主題と作品の構造から見た作品>



以下第59号からの引用をして、上図の解説とします。この解説を読むと、安部公房が安部公房スタジオの創設を準備するに当たつて書いた「周辺飛行」ものに、犬といふ悪魔の変形の出て来る経緯と理由がお解りになる筈です。悪魔と「周辺飛行8」の犬の同一関係については此の後に述べることにします。

「今度は時間を捨象して、初期安部公房を作品の主題と構造で見えて見ませう。さうすると、次のチャート図「初期安部公房の主題と作品の構造から見た作品系統図」（もぐら通信第59号）を得ることが出来ます。ダウンロードは次のURLで: <https://ja.scribd.com/document/348350612/初期安部公房の主題と作品の構造から見た作品>

このチャート図からわかる事は次の通りです。

- 1。初期安部公房の詩人から小説家になる変貌の相(phase)は同時並行的に二つあること。
 - (1)一つは、**A系統の作品**と呼んだ詩文散文に関する問題下降の相であり、詩文は〈〉の記号で、哲学は《》の記号で示されてあるといふこと。
 - (2)二つ目は、**B系統の作品**と呼んだ《》で示された天使と悪魔に関する哲学的な対話の相であり、この相は、哲学的な対話を安部公房固有の内省的・再帰的な「僕の中の「僕」」の話法で対話するといふ相であるといふこと。 [註7]

[註7]

「『デンドロカカリヤ』論(後篇)」(もぐら通信第54号)をご覧ください。『デンドロカカリヤ』の此の話法について、詳述しました。

2. これら二つの相が成功裏に一つに統合されたのが『S・カルマ氏の犯罪』であるといふこと。
3. 安部公房は当初はまづ詩の世界の問題下降を考へたといふこと。即ち、先の戦争が終はつて現実の時間の中を生きるために詩の散文化を考へて『名もなき夜のために』を書き始めたといふこと。これが〈〉の中のリルケ論の記号の、この文脈での意味です。そこに、
4. 金山時夫の訃報に接して、今度はA系統ではなく、B系統の安部公房固有の「僕の中の「僕」」の話法の世界で哲学的な思弁の領域を『終りし道の標べに』を書くことによつて現実の世界へと問題下降したといふこと。これが《》の記号の、この文脈での意味です。このやうにして誕生した此の論理的哲学的な思弁小説(SF:Speculative Fiction)は、かうして見ると確かに安部公房の意識では小説を書くといふものではなかつたことがわかります。これは安部公房が言語で生きる事そのものでした。
5. 『第一の手紙-第四の手紙』は原稿の一部が欠落してゐて全体が不明であるが、しかしA系統の作品とB系統の作品の二つの相の発祥の源となる重要な分岐点にある作品であること。といふ事から云つても、
6. 『第一の手紙-第四の手紙』といふ作品に於ける、夜になると出現して主人公たる一人称の話者に語る得体の知れない男の話の論理は、このあと天使の姿を隠した体裁(「空白の論理」)で語られる『悪魔ドウベモウ』の中の悪魔の語りかける論理に通じてみて、この後『キンドル氏とねこ』で其れまでの天使・悪魔論では姿を隠してゐた猫は有袋類の二義的な猫に変形されて、悪魔である此れも有袋類であるカイネズミと一対になつて登場し、いつも殺される猫としての変形された天使[註8]の姿になつてゐる事。

[註8]

『何故安部公房の猫はいつも殺されるのか?』(第58号)お読みください。詳細に論じました。

7. B系統の作品の特徴は、安部公房固有の「僕の中の「僕」」の話法の中での内省的・独白的な又哲学的な、天使の出てこない、天使の隠れた天使・悪魔論であるので、言ひ方を変へると、この天使・悪魔論を語る登場人物の登場する時には、「僕の中の「僕」」の話法の形を、安部公房の小説は採る事。あるいは、「僕の中の「僕」」の話法の形をとる時には、安部公房の作品は、いつも「空白の論理」[註9]によつて天使の隠れた天使・悪魔論である哲学的対話になる事。 [引用者註：この「周辺飛行8」が其の好例の一つです。]

[註9]

『安部公房文学の毒について』(第55号)にて詳述しましたので、これをご覧ください。

8. この天使・悪魔論は、成城高校時代に熟考した、森羅万象を原理的に理解し体系的に説明

するための4つの概念の関係、即ち部屋、窓、反照、自己承認を巡る「転身」に関する多次元的な存在論である事、私の云ふ汎神論的存在論である事。[註10]

[註10] この論の詳細は20歳の論文『詩と詩人(意識と無意識)』(全集第1巻、104ページ)に詳細に書かれております。安部公房の実作は全て、生涯に亘って、この理論篇に書かれてある通りの実践です。安部公房のOS (Operating System)たるこの理論篇の一読を強く貴方にお薦めします。(全集第1巻、104ページ)

9. 1946年に引き揚げ船の中で書き始めた『天使』の中の天使が、**B系統**の作品の中で「空白の論理」によつて姿を隠し(それほど安部公房にとってはリルケに学んだ天使は尊く大切だった)、安部公房固有の話法である「僕の中の「僕」」の中で、topologicalに真獣類に対するに二義的な有袋類に変形されて、「キンドル氏とねこ」に猫になつて登場し、その後の殺される猫の嚆矢となつたといふ事。

さうして、以上『初期安部公房の作品の主題と構造から見た作品系統図』のチャート図と此の図から知られたことを念頭に置いた上で、そして『詩人から小説家へ、しかし詩人のままたに』のチャート図の上で特に**B系統といふ安部公房固有の「僕の中の「僕」」といふ内省的・哲学的対話の話法を其のまま『S・カルマ氏』以降の作品群に延長して適用して見ると、これが安部公房のTVドラマ、ラジオドラマ、映画の脚本、戯曲の脚本といふ俗にいふマルチメディアの世界での、安部公房の戯曲家としての才能を活かした活動に其の儘真っ直ぐに連なつてゐることが判ります。**

後者のチャート図を前者のチャート図附属のものと考えて、これらを一つのものとする、安部公房といふ人間が、初期安部公房の藝術家人生のみならず其後の活躍も含めて、安部公房の人生の全体を更に一層一望の元に収めることができます。初期安部公房の姿を、言葉でまとめますと、次のやうになります。

A系統の作品群に於いて、安部公房は小説家になつた、**B系統の作品群**に於いて、安部公房は戯曲家または脚本家(シナリオライター)になつた。そして詩人から小説家にオルフォイスのやうに「転身」するにあたり、其の二つの系列の根底には問題下降論の論理があり、同時に書いてゐた存在と現存在を歌つたリルケの詩とリルケを自家薬籠中のものとした自己の詩の実践があつた。小説については既に19歳の処女作『(霊媒の話より)題未定』(1943年3月7日)でtopologicalなシャーマン安部公房の秘儀の式次第は確立してゐた(袋凹で始まり袋凹で終はる)。この小説様式を、同時並行で自己の詩でも独自に同様の秘儀の式次第の確立に成功してから(詩集『没我の地平』にて)、二つの藝術範疇を一つに統合した。これは「『デンドロカカリヤ』論(前篇)」で明らかにした通りに問題下降によつてなし遂げたものである。その逐次の様子は『詩人から小説家へ、しかし詩人のままたに』のチャート図に表した通りです。此のチャート図のダウンロードは次のURLで：<https://docdro.id/X5YTFhi>

安部公房が戯曲家になつた根底にある**B系統**といふ安部公房固有の「僕の中の「僕」」とい

ふ内省的・哲学的対話の話法を使つて詩人から小説家への移行期の作品『デンドロカカリヤA』（1949年4月30日）を書いたことは「『デンドロカカリヤ』論（後篇）」で明らかにした通りです。このA系統とB系統を併せて備へてゐる作品が、欠損があるのは惜しむべきことですが、これまで其の意義の知られることのなかつた『第一の手紙～第四の手紙』（1947年1月2日）です。この間、安部公房は独自の記号を用ゐて、問題下降を成し遂げた。この問題下降はtopologicalに行われた。この同じtopologyの論理は、1970年代以降の小説のみならず、安部公房スタジオの演技論にも其のまま生きてゐる。即ち、安部公房の作品は、全て例外なく、topologyで書かれてゐる[註11]。

[註11]

Topologyについては『何故安部公房の猫はいつも殺されるのか?』（もぐら通信第58号）を、そしてtopologyが如何に全作品を接続し変形してゐるか、結局安部公房文学とは何かについては「『デンドロカカリヤ』論(前編)」(もぐら通信第53号)をお読み下さい。安部公房文学の全体の姿が判ります。

『第一の手紙～第四の手紙』でまだ悪魔と呼ばれてゐない男は次のやうな手紙（といふ安部公房の愛用する媒体（メディア））の世界に登場します。

（1）第一の手紙は〈詩以前の事〉について書いてある。この〈 〉の記号が、安部公房がルケと自分の詩の世界のことを本質的に語る時の記号であることは初期安部公房論にて既述の通りです。

（2）第二の手紙は冒頭に歩道の敷石の工事でできた「窪み」の話で始まります。この凹の形象は存在の形象であることは、これも諸処既述の通り。やはり〈歩道〉が繰り返す計5回述べられてをり、歩道といふ道が、安部公房18歳の論文『問題下降に依る肯定の批判』以来のtopologyの道であり、この数学によつて設計された都市と郊外の直接的な上位接続（論理積）が語られてゐることも諸処既述の通りです。第二の手紙も都市の〈歩道〉の工事の話で始まる。

（3）第三の手紙は〈運命の顔〉についての手紙です。この主題は詩集『没我の地平』の「詩人」や「夢と夢」の、また『無名詩集』の「笑い」や「マスク」の主題であり、小説家に「転身」なつて後に描かれる『他人の顔』の主題が既にここにあります。そして大事なことは、手紙を書いてゐる話者を毎晩訪れる男が必ず「窓辺に立つて」ゐることです。

また、これも同時に大事なことは、〈運命の顔〉と併せて〈運命の手〉も登場することです[註4]。この〈運命の手〉は、「若し手相見が見たら何と申すでしょうね。過去にも未来にも全く運命を持たない手」、即ち時間を捨象した存在の手です。話者は此の運命判断不可能な「のっぺりとして、しわ一つない」凸凹の無い〈運命の手〉を、窓辺に立つ男から手袋を譲り受けると一緒に譲り受ける。手袋を嵌めると手袋は主人公の手と一体となり皺の無い存在の手になる。〈運命の顔〉は、やはり男からマスクと一緒に譲り受ける。マスクは主人公の顔と一体となり見かけはさうではないが、しかし素顔と見分けのつかぬ凸凹の無い運命の顔となる。かうして男は無名の存在となり、後年の箱男となる。『他人の顔』の主題です。



[註4]

安部公房の手については『もぐら感覚6：手』（もぐら通信第4号）をご覧ください。同号のダウンロードは：
<https://www.scribd.com/doc/245957017/第4号>

（4）第四の手紙は、〈運命の顔〉と〈運命の手〉を持つた主人公の話者のその後の話です。この手紙の最後は恰も『S・カルマ氏の犯罪』の冒頭の出だしのやうである。ここまで来ると、会社に出ることと出ないこと、入社することとしないことの二項対立はなくなり、この話者はS・カルマ氏である。

「私はもう会社に出掛る事も止した。と云うよりは、そんな事はもう星の言葉よりも意味の無い、空言に等しかった。此の日からの私の生活を、客観的な態度で描写表現する事は一寸不可能だろう。普通の意味での生活と云うものはもうなくなってしまったのだから。私は宇宙を呼んだ。そして宇宙に呼び返されて、全存在そのものだった。

二三日経った時、会社の同僚がやって来て呉た。（略）”所で明日位は出て来るかい。皆心配しているぜ……”私は返事をしようとして、自分がすっかり変って了っているのに気付いてびっくりした。何時もの様な皮肉も、冗談もまるで出て来ない。彼の言葉をまるで夢の様に遠く聞き乍ら、私の心は唯限りなく静かな丈だった。私は笑った。そして答えた。”有難う。一寸風邪を引いたらしいが大した事はないらしい。心配する程の事

[1947.1.2/1.4/1.8/?]

*編集部注：この小説は後半部分が失われている」

「私は宇宙を呼んだ。そして宇宙に呼び返されて、全存在そのものだった」主人公は壁そのものになったS・カルマ氏です。これによつても『S・カルマ氏の犯罪』の結末の壁が存在の形象であることが判明します。S・カルマ氏は「宇宙を呼び、呼び返される」ことによつて存在自体になった。これは論理だけを純粹にみると、「宇宙を見、宇宙に見られる」のと同じです。

『悪魔ドウベモウ』で悪魔と呼ばれるやうになつた悪魔は次のやうな悪魔です。この作品でも『第一の手紙～第四の手紙』と同様に、主人公の話者が「窓を開け」て、時間の隙間である夕方5時前後の夕方といふ昼と夜の時間の隙間（差異）に部屋の中で待つてみると、存在の宿る「壁を斜めに走っている一条の割れ目の中に」「此の部屋に越して以来の友、人間の王であり神の手であるという悪魔が住んでい」て、「小声で呼び掛けてみる」と、「するとその声に応じて割れ目の間にきらっと輝くものがあつた。そして元気よく一匹の悪魔が跳ね出して来た。」この悪魔の姿は「少し猫背で、体中に黒い毛が輝いて居り、手足の爪は鋼鉄のようなつやを持っている。」

ここから先の話は「神の右手であつた」〈悪魔の生い立ち〉の話から、安部公房の存在論と（部屋、窓、反照、自己承認）の問題について語られます。安部公房の存在の手は左手ですから、悪魔が「神の右手であつた」といふ〈悪魔の生い立ち〉は、悪魔が時間の中で有用なものとして神の遣ひとして働いたといふことを、〈〉の記号は安部公房の詩の世界では意味してゐます。安部公房は仕事をする時には右利きだつたのでせう。若しさうでなかつたとしたら、敢へてtopologicalに其れを反転させたといふことになりますが、ここでは実際の、現実の時間の中を生きる安部公房は右利きであり、時間の存在しない「のっぺりとして、しわ一つない」〈運命の

手)は左手であるのです。これが確かな事は、安部公房が自らの左手を撮影した写真が全集第30巻の表側の見開き2ページに亘って収められておりますので、これをご覧下さい。勿論、現実の安部公房の写真の左掌には皺があります。

かうして初期安部公房に戻って考へて来ますと、後年の安部公房のいふメフィストフェレスがゐなければファウストもゐないといふ言葉の意味は勿論、穴がなければドーナツは存在しないといふ論理のtopologyであるわけですが、それはそれとしても、その意味は、《現存在》がなければ《存在》はないと言つてゐるのです。時間の中に生きる《現存在》がなければ時間の無い《存在》はない。神の右手たる悪魔がゐなければ、現在といふ現実を生きる人間はゐない。かうして悪魔は「人間の王であり神の手である」のです。若しこの悪魔に対抗できることが人間にあれば、それは時間の無い存在の手を持ち、時間の無い存在の顔を持つた人間に成ることである。ここに安部公房の主人公の変形の契機があります。

さうしてみると、「周辺飛行8」の「切れ目」で吠えない犬とこれら悪魔たちの共通項は次の通りです：

- (1) 時間の隙間である夕方か、または暗くなつた夜にやつて来ること
- (2) 窓辺と云ふ部屋の穴(凹)である窓のそばか、または壁の隙間に棲んでゐること。
- (3) 《現存在》といふ日常の時間といふ、時刻と時刻といふ時間的な差異の中にゐること
- (4) 二義的・二次的な立場にゐること

更に、

(5) 安部公房の悪魔の形象(イメージ)は「割れ目の間にきらっと輝くもの」であり、「元氣よく一匹の悪魔が跳ね出して来」るやうなものであり、「少し猫背で、体中に黒い毛が輝いて居り、手足の爪は鋼鉄のようにつやを持っている」やうなものであるといふことから見て、恐らくは犬といふ形象は、飢ゑてゐる犬が最も近い生き物だといふことです。それが証拠に、この「周辺飛行8」では犬は吠えない犬ですが、初期の短編小説『犬』に登場する犬は、最後には、「犬も人間も、ひどく腹をすかして」て、犬は「ヒモをくいちぎって」、ご主人さまである飼主の「男におそいかか」り、「二時間以上におよぶ死闘がつづけられ」たあとに「最後に犬が勝ちました。犬は男の下唇と耳をたべ、腕に肉をくい、血をのみました。」となつて終はります(『犬』全集第3巻、236ページ上段)。この犬も最初は「おまけに、絶対に、吠え無いんだ。オンオンだとか、ヴァヴァだとか、啞が口ごもつたような、うめき声をだし、犬らしい悲鳴をあげるのは、ただ牝犬がきたときだけ。むろんやつは牡犬だ。」といふ犬として書かれてゐます(全集第3巻、229ページ下段)。この短編小説では「切れ目」にならぬ犬が最後には「切れ目」になる。

今詳細に此の短編作品を論ずる事はできませんが、しかし、この引用で判る事は、犬が鳴くと、それがキャンキャンといふ悲鳴であれ、ワンワンといふ警戒のなき声であれ、繰り返しの呪文になつて存在を招来することになるわけですから、犬が悪魔の変形であつて神の右手

としての有用な《現存在》であれば、時間の中を生きる同じ《現存在》たる人間を次の存在へと脱出させることを邪魔することが、その有用の使命だといふことです。勿論、これは〈悪魔の生い立ち〉から云つて神は悪魔と袂を分かち、神は右腕を失つて、左腕だけの神になるといふ話に『悪魔ドウベモウ』ではなつてゐます。主人公が此の作品の出だしの第一行で「文部技官・加地伸……そう書いた名刺を口にくわえると、左手で腹ただしそうに幾つにも引き裂いた。というのは、彼の右手は肩の下で吸い込まれうように亡くなっているのだ。」と云ふ理由です。即ち、この作品の主人公は安部公房の創造した神の似姿に、即ち「右腕を失つて、左腕だけの神に」なつてしまつてゐた。しかし、この悪魔と犬をめぐる論理は以後継続して安部公房の作品の中に存在の手とともに、洒落ではありませんが手を替へ品を替へて出て来る筈です。

さて、このやうなわけで、幕と幕の合間といふ隙間に「犬が吠えなかった」ために、折角主人公が「そうそう、思い出した。一幕で、もう一つぼくが見落としていた、大事なこと。犬ですよ。犬が吠えなかった。」と気づいても後の祭り。Bの芝居に始まりの端といふ発端があれば終はりといふ末端があれば「この芝居が芝居として成立っているとしたら、おのずから、当然のなりゆきとして……」幕が降りる筈のものを、さうはならず、「そこでいきなり、何度目かの幕が急速に降り、Aはもう先をつづけることができない。当然のなりゆきとして、幕の向うは、なんの反応もなくひっそりと静まり返ったままだ。おそらく次の幕が残っているせいだろう。いずれ休憩が終れば、いつものように幕が上るにちがいない。そう思って、Aは暗闇の中に、何時までもじっとただ立ちつづける。」


さて、これらはみな、冒頭に戻れば「すべてがぼくの夢の中の出来事にすぎないのだ。」

ここまで安部公房の悪魔と犬と神と存在と現存在を巡る論理の仔細が判明すれば、この「周辺飛行8」の題名である「ある芸術家の肖像」の「ある芸術家」とは、単数形であつて複数形でないといふことから云つても、この「ある芸術家」とは、{ [A且つB] であり、且つ [Aではなく且つBではない] } といふことになる第三の存在の芸術家安部公房の話だと云ふことになりますが、如何。

さうさう、BがAの家に侵入してAに見つかり見られるのは、Bが「ピストル（略）片手に、窓枠に両脚をひらいて立って」ゐたときである。といふことであれば、話の脈絡は『第一の手紙～第四の手紙』や『悪魔ドウベモウ』と同じであり、この周辺飛行をした後では、あなたは自分の左手に手相が読める皺の凸凹があるかどうか、顔を鏡に映して人相といふ相の読める凸凹の起伏のある顔であるかどうかを、今日の夕方か夜に「窓辺に両脚をひらいて立って」[註5]、あなたの部屋で一度確認なさることをお勧めします。勿論、あなたが寝る前に。さうでなければ「当然のなりゆきとして……」

[註5]

安部公房の窓については『もぐら感覚5：窓』（もぐら通信第3号）をご覧ください。同号のダウンロードは：
<https://www.scribd.com/doc/245956904/第3号>



『飢餓同盟』論

～「飢餓同盟」の結成によつて
安部公房はマルクス主義と超越論を一つにした～

岩田英哉

目次

1. 『飢餓同盟』の書き出しから何が解るか
2. 作品の書かれた時期
3. 本論
 - 3.1 登場人物
 - 3.2 飢餓同盟の自己矛盾
 - 3.3 飢餓同盟は一切の権力を否定する
4. どこに詩的な「失敗の部分」があつたのか

1. 『飢餓同盟』の書き出しから何が解るか

「飢餓同盟」といふ同盟は一体何か、どんな同盟であるのか。同盟といふものを組むのは、目的が同じであればよく、それは組む相手が敵でも、敵の敵を倒すことが同じ目的であるならば、双方で同盟を組むことが有期限でできるといふ連携のことです。

それは国家単位の軍事同盟から、企業単位の利益追及の同盟から、個人間の些（いささ）か譬喩的な同盟に至るまで、様々な階層に様々な同盟があるでせう。

この小説の題名は『飢餓同盟』といふのであれば、この同盟の目的は次の二つです。

- (1) 飢餓を克服するための同盟であるか、または逆に、
- (2) 飢餓を求めるための同盟であるか

さうしていずれの場合であるにせよ、作者にとつて此の飢餓とは何に関する飢餓であるのかといふことが明らかにならねばならないでせう。

『飢餓同盟』発表後、安部公房は『認識と表現のあいだ』といふエッセイを書いてゐる。これは作家にとつて書き出しが如何に重要であるかを書いたもので、安部公房自身も此れにいつも苦勞するといふことから、『飢餓同盟』の場合も書き出しに苦勞をして大変だつたといふことについては、「とくに最初の二十枚はひどかつた」と言ひ、この作品の原稿の書き出しの苦勞は「すこしかかりすぎており、その結果があの作品の失敗の部分にはねかえっている。」（傍線引用者）と書いてゐる。それも続けて、「かかりすぎは論理的によくないのである。」とあ

るところを見ると、これは結構に関する部分的な失敗を意味してゐることが判る。「そのことはまた後で書く」といつてゐるところに従ひ読み進めると、ことの次第は次のやうになる。

「こんなふうにして、テーマをうまく表現しうる文体を、書き出しの数行をつかつてたしかめていくのだが、なんだか中学の時分幾何の問題をとくときのやり方を思い出した。たしかに似たところがある。」「さらに別な言い方をすると、あれは仮設を発明する精神であったような気がする。」と転じて、「書き出しの発見はまさにその補助線の発見に似ているのである。」と結論付けてゐる。これが安部公房が書き出しが何故作品の文体を決めるのかといふことの理由です。書き出しが決まつて補助線としての「仮設設定が発明」されて、作品全体を一貫した統一的な文体が生まれればよく。さうでなければ失敗するといふことを述べてゐる。何故ならば、その書き出しの仮設設定の決めるものが「文学的認識は、文学的表現の過程の中でこそなされる。表現しつつ、考えていくわけだから、書きだしの数行があつてはじめて、全体の具体的な見とおしも可能になってくる」からである〔註1〕。

〔註1〕

この書き出しが「シャーマン安部公房の秘儀の式次第」です。「『箱男』論～奉天の窓から8枚の写真を読み解く～」(もぐら通信第34号)より、シャーマン安部公房の秘儀の式次第は、次のようなものでした。

1. 差異(十字路)という神聖な場所を設けて、
2. その差異に向かつて、また其の差異で呪文を唱えて、
3. その差異に、存在を招来し、
4. 主人公と読者のために、存在への方向を指し示す方向指示板たる立て札を存在の十字路(差異)に立て、または案内人か案内書を配し、
5. 存在を褒め称え、莊嚴(しょうごん)して、
6. 最後に、次の存在への方向を指し示す方向指示板たる立て札を立てる。

という、このような、安部公房の秘儀の式次第でありました。

安部公房の読者が、安部公房の作品を読むための便覧として役立つように、もう少し簡略にしてお伝えすると、

1. 差異を設ける。
2. 呪文を唱える。
3. 存在を招来する。
4. 存在への立て札を立てる。
5. 存在を莊嚴(しょうごん)する。
6. 次の存在への立て札を立てる。

ということになります。」

さて、それでは書き出しの数行はどのやうになつてゐるかを見てみませう。さうすれば、この作品全体の中での結構上の部分的な失敗が何か、何故これが起きたかが解り、即ち安部公房が此の作品を書きたいと思つた理由を知ることができるだらうからです。いつもの安部公房ならば、シャーマン安部公房の秘儀の式次第に則り、存在の十字路から書き始めて、時間ならば定

時定刻に対する遅延を生ぜしめ、空間ならば隙間を最初に提示するところですが、この作品はどうか。見ると、超越論ではないものの、確かに同じ論を数学の領域に移した、あるいは写像 (mapping) の地図の世界に写した topological (位相幾何学的) な次の書き出しになつてゐる。それに書き出しに手紙といふお得意の使ひ勝手のいい媒体を使い、さらに物語についての言及は『人魚伝』の冒頭の、物語は閉鎖空間であるといふ仮説設定の文学を連想させる書き出しになつてゐます [註2]。

[註2]

私たちは『人魚伝』といふ小説の冒頭に物語閉鎖空間論のあることを知つてをります。『何故安部公房の猫はいつも殺されるのか?』(もぐら通信第58号)より引用します:

「ぼくがいつも奇妙に思うのは、世の中にはこれだけ沢山の小説が書かれ、また読まれたりしているのに、誰一人、生活が筋のある物語に変わってしまうことの不幸に、気がつかないらしいということだ。[註10-1] (略)

物語の主人公になるといふことは、鏡にうつった自分のなかに、閉じこめられてしまうことである。向う側にあるのは、薄っぺらな一枚の水銀の膜にしかすぎない。未来はおろか、現在さえも消え失せて、残されているのは、物語という檻の中を、熊のように往ったり来たりすることだけである。(略) 息をひそめた囁きや、しのび足が求めているのは、むしろ物語から人生をとりもどすための処方箋……いつになったら、この刑期を満了できるのかの、はっきりした見とおしだというのに。」(全集第16巻、77ページ)

これでわかる事は、安部公房の物語観ですし、それは其のまま小説観です。

- (1) 物語は主人公の閉籠められてゐる閉鎖空間である。何故ならば、
- (2) この空間は合わせ鏡の空間であるからだ。
- (3) この空間には時間は存在しない。従ひ、
- (4) 主人公はただ「物語という檻の中を、熊のように往ったり来たりすることだけである。」

しかし、

- (5) 小説は本来「筋のある物語」ではない。即ち超越論的な物語である。
- (6) 日常の時間に生きる人間は「筋のある物語」を求める不幸の自覚がない。
- (7) 「自分の人生をとりもどすための処方箋」として、安部公房の「筋のない物語」として小説はあるのだ。[註10-2]

[註10-1]

18歳の安部公房は此の社会を「無限に循環して居る巨大な蟻の巣。而も不思議に出口が殆ど無い」「偉大なる蟻の社会」と呼びました。(『問題下降に依る肯定の批判』全集第1巻、13ページ下段)

[註10-2]

この(1)から(7)の全体を安部公房はエドガー・アラン・ポーを規準にして「仮説設定の文学」と呼びました。詳細は「安部公房の変形能力2:ポー」(もぐら通信第4号)をご覧ください。

この(7)にある此の目的のための小説の形式(form)と様式(style)が、「シャーマン安部公房の秘儀の式次第」です。それ故に、いつも安部公房は存在への topological な「終わりし道の標べに」立て札の標識を立てて、そこに存在の方向を示して、この世での主人公の死とともに、読者を次の次元へと案内して、小説は終る、いや、開いて続くのです。

この安部公房の小説観のついでに、同じ小説観を述べている作品で、『人間そっくり』の元の短編『使者』にある主人公奈良順平が火星人と自称する男と会話をしながら心の中で思ふ論理を見てみませう。迂遠なやうですが、安部公房理解する近道です。

「……気違いだとすると、こいつは相当によく出来た気違いだよ。だが待てよ、もし本物の気違いなら、この話はそのまま使ってもかまわないだろうな。これが使えるとなると、今日の馬鹿気た手違いも、まんざらではなかったということになる。さっそく今日の講演に拝借してやるか……うん、ちょっとした風刺もあるし、なかなか悪くなさそうぞ……題は「偽火星人」……通俗的すぎるかな？「箱の中の論理」というのはどうだろうか？いや、ちょっと高級すぎるよ。なにかその中間くらいのを考えてみることにしよう……」（『使者』全集第9巻、306ページ下段～307ページ上段）（傍線筆者）

この同じ「箱の中の論理」、即ち後年の『箱男』の論理をtopology（位相幾何学）との関係で、本物と偽物、この論考でいふ真獣類と有袋類の関係を、人間と人間そっくりの関係の問題として解を種明かしとして説明してある箇所が、前者、即ち『人間そっくり』に書かれてあります。即ち『箱男』はtopologyで解説することができるのです。即ち、このことは、『箱男』のみならず、全ての安部公房の作品は、接続と変形といふ視点、言ひ換へれば真獣類と有袋類といふ視点から解説することができるといふことを意味してあります。〔註11〕

〔註11〕

Topologyと存在概念については、『存在とは何か～安部公房をよりよく理解するために～』（もぐら通信第41号）をご覧ください。また「箱の中の論理」と其の読解については『箱男』論～奉天の窓から8枚の写真を読み解く～』（もぐら通信第34号）をご覧ください。

『人間そっくり』より以下に引用する奈良純平といふ主人公と火星人との会話を読むと解りますが、主人公の思った「箱の中の論理」は、「そっくり」といふ事の内にtopologyと呪文と変形（の方法論と方法）を含んでをり、あるいは逆にこれらの三つの構成要素に基礎を置いて、全ての作品の持つ「箱男」の論理は成立してあるのです。

十代の安部公房が考へ抜いて概念化した四つの用語、即ち部屋、窓、反照、自己証認からなる安部公房の宇宙を思ひ出して下さい。部屋は存在の部屋、窓はtopologicalな変形と脱出の出入り口、反照は再帰的な複数の自己の存在する合はせ鏡、自己証認は次元展開、即ち「転身」の果てにみることによつて成り立つ第三の客観によつて存在が証明される「僕の中の「僕」」。これらの関係については『詩と詩人（意識と無意識）』に詳述されておりますので、ご一読をお薦めします。

「花園という地名はほうぼうにある。M県だけでも三つある。だから手紙をだすときには、郡、大字、字、とできるだけ詳しく書かなければ届かない。しかしいまは手紙をだすわけではないのだし、それにある先生に言わせれば、物語というものは作者が本当だと言いはるほどウソにみえ、なおさらアイマイなままにしておくほうがいいようにも思う。でも、昔の花園温泉だといえ、四十すぎた人ならおぼえているだろうか？いまはただの花園町だ。二十年ほどまえに大地震があつて、それ以来温泉はとまってしまっていた。一日一日とさびれていく、老いぼれた普通の町になってしまった。」

かうして冒頭の数行を引き写すと「二十年ほどまえに大地震があつて」といふ所などは、『デンドロカカリヤ』でコモン君が座標の軸を失つて地面が大揺れに揺れて変形の直前に目の当たりにする時間の地層の断面、時間の地層の断層に幾つもみる自分自身の複数の姿が現れるやうにも思ふのであるが、今後の展開はどうなるものか。

かうしてみると、安部公房は何とか自分の世界の初手の布石を碁盤の上に冒頭で打つて、その礎石の上に家を建てようといふ事に苦心したことが判る。苦心したのは、上の冒頭の引用に次の4つのことを最初に置いて以後も矛盾のないように書き進めることです。

(1) topologyの存在の三階層

郡>大字>字。この花園町といふ土地は、字といふ三階層目の一番底に存在する場所だといふ事になる。

(2) 手紙といふ記録藝術（ドキュメンタリー）の媒体

即ち、「明日の新聞」といふ紙のニュース媒体を如何に読者と登場人物たちに配達するか。この新聞は第2章第13節といふ超越論の章で花井太助に配達され、ニュースはラジオで伝達される。このラジオは『砂の女』のラジオと同じ役割を、このやうに、演じてゐる。このラジオが「遙かな距離」の値を0にして存在を現出せしめるといふ、リルケの『オルフェウスへのソネット』（もぐら通信第75号）の第一部のXXの詩その他に複数歌はれてあるリルケの詩想だといふことは既述の通り。

(3) 物語といふ言語による閉鎖空間の提示

いつものやうに、この閉鎖空間から如何に登場人物たちが脱出するか。『人魚伝』の冒頭にある物語閉鎖空間論を想起されたい〔註2〕。

(4) 大地震といふ時間の割れ目を露出させる天変地異の出来（しゅつたい）

いつものやうに、この大地震に原因して「一日一日ときびれていく、老いぼれた普通の町」を如何に変形させるか、あるいは登場人物を変形させるか。この変形は第3章の最後の第26章で花井太助の身に起きる。『デンドロカカリヤ』のコモン君と同じく、この時、花井太助は「ぐらっと地球が廻転し、彼は虚空にはじきだされて、宙に浮かんだ。」

この四つの礎石の上に『飢餓同盟』は成つてゐるといふ事になります。そして、鳥羽耕史著『運動体・安部公房』によれば「安部は、この小説をもとにしたシナリオ「(仮題) 狐が二匹やってきたもしくは白と黒もしくは神様になったペテン師たち」(全集17)を書いてみたり、十六年後に改稿(講談社、一九七〇年九月)してみたりと、様々な形で修正を試みている」(同書184ページ)のであれば、最後に此のシナリオにあつて『飢餓同盟』にないものは何かといふ考察をして論を収めたい。

安部公房が此の作品をシナリオにしたといふ事は、シナリオといふ科白のやりとりを書くといふ事は、安部公房の詩の世界の創造に値する行為ですから(会話の一行一行は詩の一行一行に相当する〔註3〕)、恐らくは、上記冒頭の書き出しで後々結構上うまく収まらなかったのは、この作品の詩的な部分のことなのだと推測することができます。

〔註3〕

戯曲のシナリオの会話が安部公房の詩の世界であることは、『周辺飛行(9)』(もぐら通信第96号)の「タブの研究」で証明しましたので、お読み下さい。

確かに冒頭の引用の次には「花園キャラメルという、箱に一匹の蜜蜂と菊の花をちらした」キャラメルの箱が出てきて、これが後々まで箱男の箱に似た力を発揮するものかどうか。（そして確かに、後述する「『飢餓同盟』場所 (topos) 関係図」で示すように「花園キャラメル」といふ箱は後々まで箱男の箱に似た力を発揮するのです。）そして、この、安部公房の詩的想像力を刺激する図形の後に来るのは、これも確かに次のような散文詩ともいふべき一節なのです。

「ある雪のふる夜だった。その日は朝から雪がふりつづいていた。最初にマサぶきの屋根の上で秋がおわった。次にワラ屋根の上の秋が追いはらわれ、最後にトタン屋根の上で死んだ。自転車にのっていたものが降りておしはじめると、短靴をはいていたものはゴム長にはきかえ、庭の畝に野菜をいけてあったものはあわててその上に目じるしの竿をたてた。馬にひかせた最初の除雪機が子供たちにとりかこまれて大通りを通りすぎると、そのあとにもう解けない冬がきた。」

そしてその後に、たとへ「ある雪のふる夜だった」と不特定の雪の降る夜だと仮説設定しても、しかし、その後、超越論で考へても topology で考へてもあり得ない定時定刻の始まりの話の幕開けの一行が書かれてゐる。

「二十二時五分。最終下り準急列車。」

これでは此の後に書かれる「六分もおくれていることだし」といふ遅延も超越論上の遅延にはならないので、安部公房は確かに書き出しとその後の結構の統一に苦心しただらうと思はせるものがあります。しかし、これはこれとして、冒頭の考察をいふことは此処までに留め、本題である作品の中に入る事にしませう。次の順序で論じたい。

- (1) 作品の書かれた時期
- (2) 本論

2. 作品の書かれた時期

安部公房が日本共産党員になつてまでマルクス主義を超越する道を模索してゐて [註4]、最も苦しい年が1953年(昭和28年)でした [註5]。『飢餓同盟』の発表は1954年2月15日です。また同年6月30日には『思い出』と題したエッセイを書いてゐて、1953年の共産党員としての組織的な一員としての政治・文化的活動と自分自身の藝術活動との均衡(バランス)を取る事に苦しんでゐることが、このエッセイでわかります。それ故に『飢餓同盟』といふ作品は、作家自身の魂を救ふために必要だつたのでありませう [註6]。何故なら森四郎といふ医師である飢餓同盟員が第1章5節で見る夢は、この『思い出』の引き写しそのままであるからです。『思い出』といふエッセイの方が時系列では4ヶ月後の遅れた発表になつてゐます。あり得る理由は、安部公房の常として、もう遅くともこの頃から夢の内容をメモにとつてゐたのか、または、1970年前半の「周辺飛行」もののエッセイのやうに掌編小説のやうにして、これから書く小説か戯曲執筆の準備のために発表したものか、いずれかの理由によるものでせう。全集第4巻と第5巻といふ1954年から1955年にかけての巻の目次を眺めると、このメモが表に直接出てくる作品は戯曲小説共にないやうですので、前者と解するのが良いのかも知れません。

[註4]

中壘肇宛の書簡で安部公房はマルクス主義に惹かれる自分についてかう語つてみます。

「マルクスシズムはぼくのアンチテーゼではなく、ぼくの超えるべきものであるやうに思はれます。」（『中壘肇宛書簡第17信』全集第2巻、333ページ。1950年4月20日付）

また、『安部公房と共産主義』（もぐら通信第29号）より引用して、何故安部公房は日本共産党に入党したか、その目的をお話します。

「何故安部公房は日本共産党に入党したのでしょうか。1950年代の文章を読むと、日本共産党の党員になつた動機と目的は、次の4つが挙げられます。

(1)典型的な人間としての詩人の意識と無意識の個人の在り方を、社会と人間の抑圧と被抑圧の関係にまで拡張して考えたこと。

『詩と詩人(意識と無意識)』（全集第1巻、104ページ）で確立した人間の典型としての詩人の意識と無意識の境域に在るその意識・無意識の在り方を、社会と人間の抑圧と被抑圧の関係にまで拡張して考えたこと。『シュールレアリスム批判』（全集第2巻、260ページ）と、もぐら通信第15号の『安部公房の変形能力14:シュールレアリスム』を参照下さい。

(2)生という混沌たる現実の背後に法則を見つけようとしたこと。

『文学における理論と実践』（全集第4巻、314ページ。1954年6月30日）

(3)言語の観点から、文学における理論と実践の統合を考えた事『文学における理論と実践』（全集第4巻、314ページ。1954年6月30日）。これは、(2)と表裏一体の関係にあります。大変興味深いことは、このエッセイで、この時点でマルクス主義に決別することを考え、同時にそのことに迷い、悩みながら書いた『文学における理論と実践』で引用するレーニンとマルクスとスターリンの言葉は、みな言語に関するものであり、言語の観点からのものであることから、安部公房は、共産党に対しても、その言語観の証明と実現のために接近し、急激に左傾化して、その党員となつたということが判ります。

同じ考え、すなわち言語の側から考えるということは、『文学理論の確立のために』でも述べられています(全集第3巻、229ページ、1952年6月10日)。

(4)日本の国に、言語の側から、革命を起こしたいと思つたこと『〈人物カルテ〉『社会新報』の談話記事』（全集第15巻、480ページ、1962年3月11日)。

また、『偶然の神話から歴史への復帰』（全集第2巻、337ページ。1950年8月）参照。池田龍雄の『詩的発明家---安部公房』（『安部公房を語る』、あさひかわ社、144ページ）によれば、安部公房は、この言語の側からの革命のシナリオを思い描き、革命が1957年に起きると本気で、そう考え、思い込んでおりました。[註23] 安部公房がこのことを池田龍雄に暗い小声で話したのは、間違いなく1955年2月25日以前の時点です。

つまり、以上4つのことを一言で言うと、言語の観点から現実を捉えようとしたということ、そして自分の言語観の正しさを現実の時代の中で実践的に証明しようとしたこと、そして、その正しさによつて革命、即ち日本人の意識の根本的な変革を起こすことによつて現実を実際に根本から変革しようとしたことが、安部公房入党の動機です。

大事なことは、徹頭徹尾、それが言語の観点からなされたということです。これは、共産党員であつた時代にも、終始変わらぬ、10代からの安部公房の姿です。」。

[註5]

安部公房は、この1953年という無残な年の前後について4年後、次のように言っています(『抽象的小説の問題』。全集第7巻、154ページ)。1957年。安部公房33歳。傍線は引用者。

「安部 特に人間の心理とかということについて専門的に知りすぎてるわけですよ。ただ知識として知ってるというよりもね、心理学の理論について学問的興味があり過ぎるんですよ。もう一つは、 Kommunismusとの接触だな。外面的な自由さを獲得すると同時に今までの内側の自由さとうどう対応するかという衝突だな。「R62号の発明」(筆者註:1956年、山内書店刊の短編集)はだいたい一昨年ぐらいから今年にかけての全部を集めたわけです。一応そういう変化がこれには出てると思うんですよ。これが終わると次は相当変わった姿勢に入る。これは「壁」から「闖入者」(筆者註:共に1951年)までの時期の後なんですよ。一番悩んでた時期だな。

佐伯 僕ら読者として読むと、作者が非常に楽しんで書いたものという感じだな。いろんなものを並べて見せてもらったという感じが強いね。

安部 そうじゃないんですよ。悪戦苦闘の時期でね。もっと勝手なことをやりたかった。」

[註6]

魂といふ安部公房が此の時期思ひ入れ深く使用した言葉については「3.2 飢餓同盟の自己矛盾」にて詳述します。

この時期に安部公房が何を試みたかは、前章にて「冒頭の書き出しで後々結構上うまく収まらなかったのは、この作品の詩的な部分のことなのだ」と推測するに至ったことを併せて考へますと、些か先走るやうですが、敢へて此処で結論を言へば、この作品でマルクス主義と超越論の一次元上の統一を図つたのだといふのが私の見立てです。「[贗月報30] 三浦雅士『安部公房の座標』～「安部公房の座標」から何が解るか～」(もぐら通信第94号)より、この事に関係する短い章を引用して、読者の理解に供したい。

「3.2 超越論とマルクス主義

(略)

1967年に書いたエッセイで、東京の六本木のとあるレストランで(間違ひなく、国際色豊かなイタリアン・レストラン”CHIANTI”でありませう[註18])、リルケの息子だと会食の友人に指差されて見た男に触発されて笑ひが止まらなくなつて無性に笑ひ続けた逸話が、『リルケ』と題して全集に収録されてあります。全集第22巻に収録の此のエッセイは、収録の題名とは異なり、『リルケ——苦痛の記憶・その後』と題されて最初『詩の本 第3巻 詩の鑑賞』に発表されたものです。

[註18]

『レストランキャンティ (CHIANTI) と安部公房安部公房-リルケの贗の息子と出会った場所-』(もぐら通信第28号)に詳述しましたので、ご覧下さい。

このエッセイを三浦氏のまとめたところは、そのままであると私は思ふ。それは、「影響を受けた本人に、その影響のありようを語ることはむずかしい。まるで捨てた恋人のことを語ってでもいるようにいささかヒステリックなこの回想は、逆に安部公房にとってのリルケ体験の重要性を物語っていると言つていい。実際、捨てた理由は、期せずして安部公房の主題と方法を示唆しているのである。遮断も自殺もリルケの企てた詩的な現象学的還元と矛盾しないだけではない。きわめて重要な主題として安部公房自身の作品のなかに持続しているのである。時間

の停止は、安部公房の最後期の作品群を貫く鍵とさえ言っているほどだ。」

安部公房はリルケを別に捨てはしなかつた。詩人のままに、上記引用の針生一郎に語った topologicalな方法によつて、そしてこれは初期安部公房論にて証明した通りであります[註19]、しかし、いづれにせよ間違いなく若き安部公房には超人的な、あるひは超絶的な、意志力を必要とした「転身」でありました。それ故に、最初の発表時の題名が『リルケ——苦痛の記憶・その後』と題されてゐるのは十分過ぎる程の理由のあることです。

[註19]

初期安部公房論は『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』と題してもぐら通信第56号から第59号までに連載して、どのやうに安部公房が詩人から詩人のまま小説家に「転身」したかを実証しましたので、お読み下さい。」

「3.2.1 安部公房はどのやうに超越論とマルクス主義を統合したか

さて、上記三浦氏の文章引用の後半の段落部にある三浦氏の指摘に全く、私も同感です。何故ならば、この、存在の「窪み」(凹)でリルケとマルクスを統合して、常に二者は裏表の関係で、前期20年は社会の中に(これはマルクス)存在の「窪み」(凹)を求めた(これはリルケ)この姿勢が、1970年三島由紀夫の死を境にして、大きくリルケと自分の詩の世界へと回帰して行くに当たり、「窪み」(凹)の中に(これはリルケ)社会を求めた(これはマルクス)といふ姿勢に変はるのが、後期20年の安部公房の藝術家人生であるからです。[註20]「時間の停止は、安部公房の最後期の作品群を貫く鍵とさえ言っているほど」です。

[註20]

安部公房の「安部公房の人生表」をご覧ください。ダウンロードのURLは：<https://www.scribd.com/document/390472019/安部公房の人生表-v4-掲載版scribd>

「人も馬も躓き、マルクスも躓いた存在の「窪み」(凹)で如何に安部公房がマルクス主義と超越論をtopologicalに統一して一次元上の存在の世界を創造した」か。これが「日本共産党員の時代にあつても、」針生一郎との「対話を読みますと、「リルケ的なものを否定的媒介」にしている以上、安部公房はリルケの影のもとにいたのでであり、そして後期20年もまた、今度は積極的に存在の詩の世界へと回帰するのであれば、やはりリルケは安部公房の元に姿を現して立ち続けてゐた。前期20年はリルケは影のやうに安部公房の元に立ち続け、後期20年は舞台の上で積極的に安部公房スタジオの舞台の存在の白い、といふことは凸凹の無いのつぺら坊の一枚布として登場した。1970年を境に、安部公房はリルケへの言及が目に見えて多くなります。そして、リルケの名前を出さない場合でも、同じ詩的・論理的・哲学的・topologicalな汎神論的存在論(超越論)は演技論の根底にある演技概念《ニュートラル》として若い俳優たちに教へられたのです。」

初期安部公房論で、安部公房が詩文と散文の一次元上の統合をした事は既述の通りですが、更

に今度は、さうやつて辛苦して成し遂げた成果に安住することなく、マルクス主義と超越論といふ水と油の論理の統合を二項対立の否定による第三の客観、即ち存在を求めるといふ22歳の論文『詩と詩人（意識と無意識）』の論理に基づいて、「人も馬も躓き、マルクスも躓いた存在の「窪み」（凹）で」生活（藝術の普及といふ実践）と藝術家人生（虚構の創造）の統合を図つたのが、この『飢餓同盟』だといふ事になります。（『飢餓同盟』が超越論とマルクス主義を統合したといふ此の知見を「詩人から小説家へ、しかし詩人のままに」に入れて新しくしました。ダウンロードのURLは：<https://docdro.id/FbpWU2d>）

この時期の安部公房の『飢餓同盟』以降の作家活動を全集第4巻に当たつて、座談ならば其の発言の、エッセイならば其の内容と論旨の、このマルクス主義と超越論の統合といふ視点から観てそれぞれ重要な年譜を作成しますと、次のやうになります。この1954年といふ年に書かれたものはいづれも此の年の安部公房の企図を、多かれ少なかれ濃かれ薄かれ反映してゐることが判りますが、しかし焦点を絞つて次の作品を挙げる事にします。必要があれば折に触れて、以後この中から引用したい。

- (1) 1954年2月25日：『飢餓同盟』発表
- (2) 1954年3月1日：新しい文学の課題〔座談会〕
- (3) 1954年4月1日：サークルをめぐる問題—わたし達の文学教室〔エッセイ〕
- (4) 1954年4月1日：私の小説観〔エッセイ〕
- (5) 1954年6月30日：思い出〔エッセイ〕
- (6) 1954年6月30日：文学における理論と実践〔エッセイ〕
- (7) 1948年8月10日：認識と表現のあいだ〔エッセイ〕
- (8) 1955年2月25日：猛獣の心に計算器の手を—文学とは何か〔エッセイ〕

普通に理論と実践といふことを考へれば、『飢餓同盟』発表の前に理論篇の来るべきものを（初期安部公房の「問題下降」の理論篇と実践篇の時系列の問題下降の厳密な順序を見よ〔註7〕）、それが発表の後になつてゐるといふ事は何を意味するのかと考へてみますと、実際には失敗が部分的にあるといふ事であるにも拘らず、巷間読者の間で『飢餓同盟』は失敗作だと思はれてゐるのは逆に、詩的箇所の結構上の処理に難点があつたものの、『飢餓同盟』はおおよそ安部公房のマルクス主義と超越論の統合といふ意図が達成された作品であつて、上記

(2) から (7) の発言が整理されて公にできるやうになつたといふことではないのだろうか。この一連のなり行きの結果として (8) の『猛獣の心に計算器の手を—文学とは何か』といふエッセイが結実したものと考へることができるし、実際此の文学論を読むと、たとへば (4) と (8) とは文学の無用性の意義を論じて、二つの文章の論旨の文脈が一貫してゐることが判り、(2) から (7) の発言が整理されて公にできるやうになつたといふ経緯を示唆するものになつてゐます。何故なら『猛獣の心に計算器の手を—文学とは何か』は『安部公房と共産主義』で述べた通り、『無名詩集』の最後に置かれたエッセイ「詩の運命」といふ理論篇が依然として詩と詩人論であり且つ作者—読者論であるのに対して、このエッセイ『猛獣の心に計算器の手を—文学とは何か』は、小説と小説家論であり、ロシアの詩人マヤコフスキーの『詩は

いかにつくるべきか』の論理を枕に振つて、詩をも包摂した（副題にある通りの）、作者一読者論を含む文学論になつてゐるからです〔註8〕。

〔註7〕

この「転身」（詩人から詩人のままに小説家にならうといふ変貌）の過程は「詩人から小説家へ、しかし詩人のままに」のチャートのダウンロードのURLは：<https://docdro.id/FbpWU2d>

〔註8〕

『猛獣の心に計算器の手を一文学とは何か』は、安部公房の書いた小説版「詩の運命」といふ作者一読者論、前者の詩人版が「詩の運命」といふ作者一読者論といふことです。『安部公房と共産主義』（もぐら通信第29号）より引用して「詩の運命」（『無名詩集』）と『猛獣の心に計算器の手を一文学とは何か』の関係を以下にお伝えして、後者の論が包括的な藝術に於ける作者一読者論になつてゐることを理解して下さい：

「そして、言語ということから、安部公房スタジオの試みは、やはり言語によって役者が役者以前に何よりもまづ存在になつて、そこから演技(機能)を發し、そこで初めて役者になるという考えであり、他方、同時に観客の意識についても、存在の舞台によって観客も我を忘れて自己を喪失して存在になることによる意識の根底的な変革をしようと考えたのです。

この時、安部公房は、既に『無名詩集』の最後に収めたエッセイ『詩の運命』の末尾に書いた詩人と読者の関係、それから、『猛獣の心に計算器の手を』の最後に書いた作家(散文家)と読者の関係、即ち「読者は自己の主体で、作者は客体化された自己」であるという考えで(全集第20巻、82ページ上段)、これらの作品の読者と観客の関係を、そして脚本家・演出家と俳優の関係を考えたのです。」

大事な事は「詩の運命」も『猛獣の心に計算器の手を一文学とは何か』も作者一読者論であるといふ事です。といふ事は、マルクス主義と超越論といふ水と油の二項対立の論理の統合を、『飢餓同盟』といふ実作をまづ書く事によつて、安部公房は固有の話法「僕の中の「僕」」によつて、それも実践する前者の僕はマルクス主義者として、虚構の作家としての超越論者である「僕」は後者の「僕」として、この二つの統合を話法の問題として解決したといふ事になります。上記〔座談会〕『新しい文学の課題』に、安部公房曰く「結局、事実と真実の関係……。」に関して、即ち現実と虚構の関係に関して安部公房の次の発言があります。

「安部 僕は事実というものは、分析的な物理的なものだと思います。仮説の中というか、試験官の中の出来事みたいに、括弧の中では証明可能なことなんだな【a】、それに対して真実は時間的歴史的に普遍化された総合的な観念でしょう【b-1】。その事実を真実にするところに、フィクションがあるわけでしょう【b-2】。積分作用というに変だけど、まあ典型化かな【b-3】。フィクションは日本語に訳すと嘘みたいなことになるけれども。」（全集第4巻、247ページ下段）

(1) 【a】は、仮説の設定によつて現実的な事実をモデル化して、現実分析を物理的にして、分析の正しさを証明すること。これは科学です。安部公房の持論である仮説設定の文学です。

(2) 【b-1】は、【b-2】にいふ通り【a】で証明した事実を、フィクションの中で、事実の

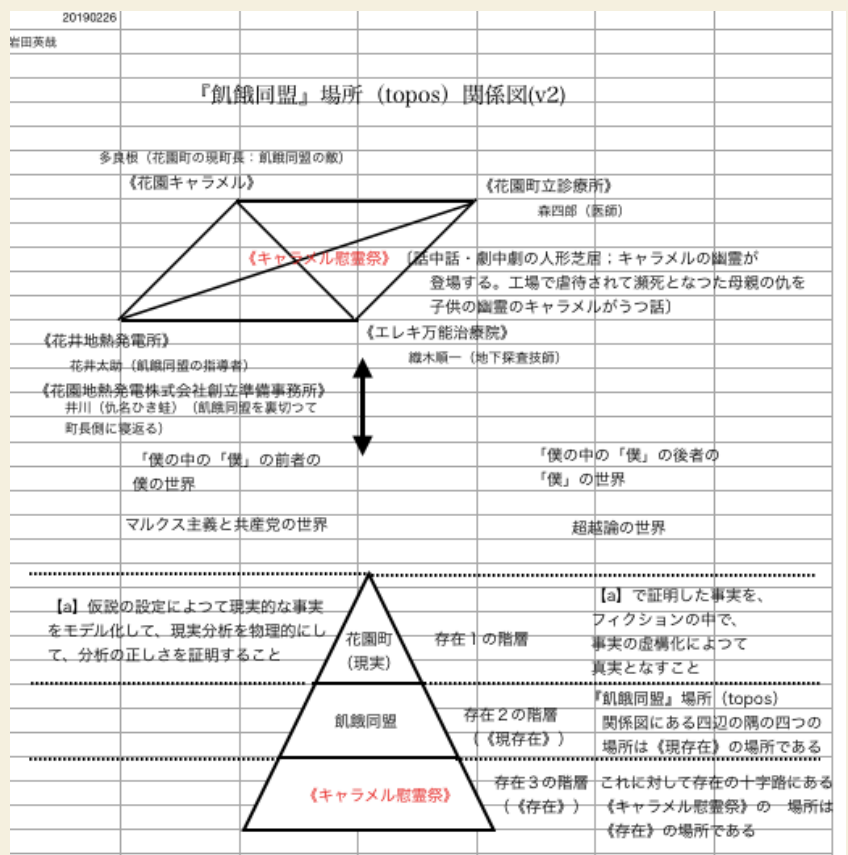
虚構化によつて真実となすこと。これが【b-1】でいふ「真実は時間的歴史的に普遍化された総合的な観念」である文学の世界だといふ主張であり、証明された事実を虚構化によつて真実となすことを、「真実は時間的歴史的に普遍化された総合的な観念」と為すことだと言つてゐて、

(3) この「総合的な観念」と為す為し方を【b-3】で「積分作用」といふと変だけど、まあ典型化かな」と言つてゐる。この【b-3】でいふ「積分作用」とは、安部公房の言語論で繰り返し対談者やインタヴューアーに説明する、円といふ面を積分すればチューブのやうな立体になるといふ、積分によつて言語による現実を一次元上に上位接続する事による現実の虚構化（「時間的歴史的に普遍化された総合的な観念」といふ真実の探究と創造）〔註9〕であり、即ち話法の視点で同じ此のことを観れば、「僕の中の「僕」」といふ話法によつて、マルクス主義と超越論を統合したといふことになります。（以下【b-1】【b-2】【b-3】を総称して【b】と呼ぶ事にします。）

〔註9〕

安部公房の言語機能論については『安部公房文学の毒について～安部公房の読者のための解毒剤～』（もぐら通信第55号）の「4. 言語論といふ毒（問題下降の毒）」に、安部公房の言葉を列挙しましたので、これをお読み下さい。

くどいやうですが、要約すれば、安部公房はマルクス主義と超越論の統合といふ問題を仮説の設定（科学）と「僕の中の「僕」」といふ話法（現実と虚構の関係の言語論理の一種である話法（mode）によつて「人も馬も躓き、マルクスも躓いた存在の「窪み」（凹）」（この窪みは織木順一がフキの芽を採りに降りて行く「死に窪」（凹）といふ汎神論的存在論（超越論）の世界で、織木順一の自己犠牲によつて解決したといふ事になります。（この事実を「『飢餓同盟』場所（topos）関係図」として此の作品の全体を俯瞰できるやうに図示しました。この topology の図解は以後手元に置いてお読みなると作品の理解が捗る筈です。ダウンロードの URL は：<https://docdro.id/YKWMRUu>



それ故に、「仮説の設定によつて現実的な事実をモデル化して、現実分析を物理的にして、分析の正しさを証明すること」【a】のために、安部公房には珍しく日本語の町の名前が、それも出来るだけ「花園という」「ほうぼうにある」固有に際立つてはゐない平凡な町の名前が、冒頭から出てくる小説になつたといふわけです。これに【b】といふ「【a】で証明した事実を、フィクションの中で、事実の虚構化によつて真実となすこと」が加はつたのが本作です。

再度、「1. 『飢餓同盟』の書き出しから何が解るか」より冒頭に何が書いてあるかを此の文脈で見出しのみ引用して確認して描きたい。

- (1) topologyの存在の三階層
- (2) 手紙といふ記録藝術（ドキュメンタリー）の媒体
- (3) 物語といふ言語による閉鎖空間の提示
- (4) 大地震といふ存在が時間の中に出現する割れ目を露出させる天変地異の出来（しゅつたい）

これらのうち（1）と（4）は（虚構の中の）現実分析【a】、（2）と（3）は【b】即ち「【a】で証明した事実を、フィクションの中で、事実の虚構化によつて真実となすこと」といふわけです。しかし、【a】は既に虚構の中の現実ですから、これを如何に【b】といふ「僕の中の「僕」」の話法の中で、この話法を用ひて「存在の「窪み」（凹）」（「死に窪」）で問題を解決するか。その問題とは何か。この話法の中での現実と虚構の階層構造は次のやうになつてゐます。

作者の生きる現実>虚構の中の現実【a】>虚構の中の虚構の現実【b】……（A）

この構造の中での作者の運筆であり筆法であるとすれば、私たち読者は素直に作者の筆に従ひつつ、

- (1) 何が問題であるのか
- (2) その問題の解決を如何に図るか

この二つを、更に上記（A）にtopologicalに複眼視点で、これらの問題に薄いトレース紙を重ねて、

- (1) 一般：作家>話者>登場人物……（B）
- (2) 個別：作者>作者の中の僕>「作者の中の僕」の中の「僕」……（C）

といふ物語の階層構造との関係で〔註10〕、（A）（B）（C）の関係の重なる場所を（地図を読むやうに）読んで行くと解決に至り、回答を得るといふ事になります。

[註10]

「『デンドロカカリヤ』論（後篇）」（もぐら通信第54号）の「2.2 安部公房独自の話法(個別)」をお読みください。詳述しました。

前置きが長くなりましたが、それでは本論に入ります。

3. 本論

この作品は全部で三つの章と通算26節からなつてゐます。

- (1) 第1章：1から8の8節からなる。
- (2) 第2章：9から19の11節からなる。
- (3) 第3章：20から26の7節からなる。

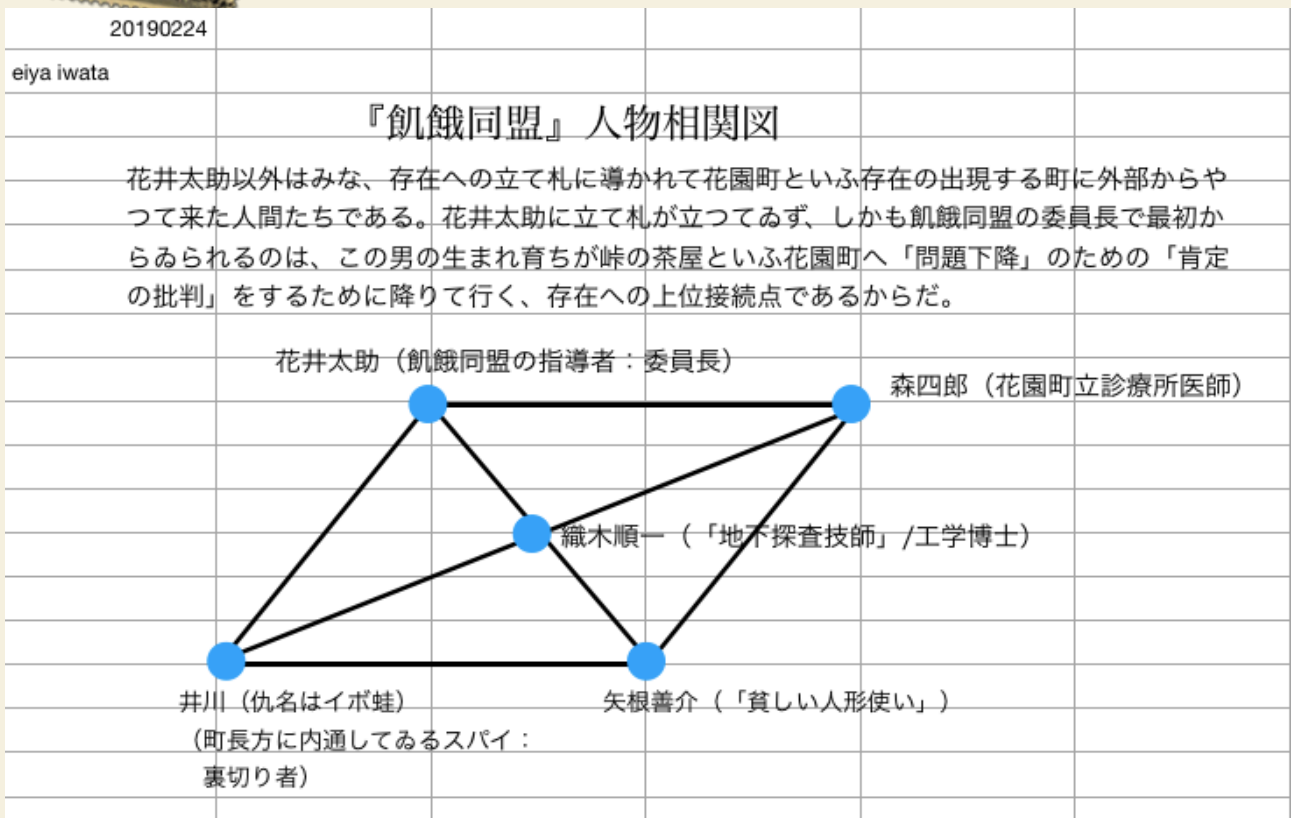
これらの章節の関係は「**3.3 飢餓同盟は一切の権力を否定する**」にて詳述します。

3.1 登場人物

主要な人物をtopologyで表すと次の図形のやうになります。もし此の作品に主人公がゐるのだとすれば、安部公房の他の作品の主人公がさうであるやうに、その人間は『（霊媒の話より）題未定』の主人公パー公以来、霊媒であり、シャーマンであり、媒介者であり、媒体であり、触媒である役割を演じてゐるものが主人公となるでせう。最後者の触媒にあつては、舞台の上で役割を演じて両極端が上位接続されれば姿を消して、存在の十字路で死ぬか失踪してしまふ。これが魂の「地下探査技師」織木順一である。

花井太助以外はみな、存在への立て札に導かれて花園町といふ存在の出現する町に外部からやつて来た人間たちである。花井太助に立て札が立つてゐず、しかも飢餓同盟の委員長で最初からゐられるのは、この男の生まれ育ちが峠の茶屋といふ花園町へ「問題下降」のための「肯定の批判」をするために降りて行く、山の上の境界といふ存在への上位接続点であるからです。この「『飢餓同盟』人物相関図」のダウンロードは：<https://docdro.id/Bfy2w8j>

(以下、このページは余白)



以下、小説を読みながら人物を点描したい。

(1) 織木順一 (地下探査技師)

第1章第1節で「二十二時の準急でやって来た男」と花井と狭山に呼ばれる土地のものに知られぬ無名であつた男が、第3節で此の名前だと知られる。

「二十二時の準急でやって来た男」と定時定刻の時間の区切りの中での男だといふ事は、織木順一が「僕の中の「僕」」の前者の僕の現実に生きることを意味してゐる。即ち、「仮説の設定によつて現実的な事実をモデル化して、現実分析を物理的にして、分析の正しさを証明すること」【a】のための役割を演ずるために定時定刻に此の町に登場したといふことです。

(1) 一般：作家>話者>登場人物 …… (B)

(2) 個別：作者>作者の中の僕>「作者の中の僕」の中の「僕」 …… (C)

この話法の図式で云へば (B) ならば現実の時間の中にゐる作家が物語る「物語の中の話者」の語る登場人物、(C) ならば「作者の中の僕」、即ち「僕の中の「僕」」といふ前者の僕といふ現実の時間の中の僕の中の三人称の「僕」だといふことです。以下此の話法への言及は煩雑かも知れませんが、これを控へ、(A) (B) (C) の関係の理解は十分でせうから、この二つの話法の図式は必要に応じた場合にのみ引用する事にします。

この男の職業が地下探査技師であることは、次の矢根善介の住んでゐる（恐らく此の作品の書かれた当時は「乗合自動車」と呼ばれてゐた）廃車のバスを尋ねる第3節冒頭で判る。廃車のバスとは、これも安部公房の読者にはお馴染みの動かぬ自動車であり、例へば『方舟さくら丸』

の地下空間の入り口となつてゐる廃車スバル360であり、また『箱男』に挿入された写真のうち一枚である車輪のパンクした自転車を家財を積んで押して行く乞食の其の永遠に動かぬ自転車である。即ち、この廃棄されたバスは永遠に動かずに走り続ける、時間の存在しない自動車たる超越論のバスである。このバスは永遠に出発せず、永遠に帰着しない。バスの発着に始めも終わりもない超越論のバスです。このバスといふ乗合自動車の中で後々飢餓同盟の第一回目の会議が開催されることになるといふ設定が、飢餓同盟の性格を物語つてゐます。これについては、また飢餓同盟の使命との関係で「3.3.3 第2章第13節は超越論の章である」で後述します。

さて、地下探索技師であり且つ工学博士といふ科学者であるといふ人物造形であれば、これはもぐらの安部公房といふに等しい。現実の自分（科学者）と「僕の中の「僕」」のうちの、後者の「僕」（地下探査技師）、即ち虚構の中の「僕」である。とすれば、やはり此の人物は現実と夢とを上位接続する使命を作者によつて託された人物といふ事になります。

この男は自殺未遂をして、森医師の手当てを受ける。自殺未遂を起こして手当てを受ける廃車のバスに矢根善介が住んでゐるが、本当の法律上の「正式の持ち主」は、温泉の廃れた20年前の経緯（いきさつ）によつて、織木順一である。

織木順一の遺書は手紙でもあり、安部公房の世界では此れも常道の、「僕の中の「僕」」を映した話中話、劇中劇、小説の中の小説となる媒体となつてゐる。

大地震後20年振りで花園町に帰つて来た此の男の遺書を読むと（第2章第9節）、この男はS・カルマ氏と同様に絶えず追跡されてゐる。父親は20年前に朝鮮半島から帰還して、花園温泉復活を期待して営業するバス会社の開業といふ念願のための資金作りにと、「S市からエレキ号電波療治器」といふ機械を購入して、花園町に《エレキ万能治療院》〔註11〕を開業して、謂はば『箱男』の贗医者やうに、医師免許なしで病気の治療を始めた。この営業を妨害したのが、「藤野健康という町の開業医」である。

[註11]

この《》を含む安部公房の存在論の記号に関する簡略な結論の説明は『カンガルー・ノート』論（もぐら通信第66号）の「3. 『カンガルー・ノート』の記号論」を、また詳細の論述については『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』（もぐら通信第56号から第59号）をお読みください。論証しました。ここでは前者の引用に留めます。

1. 『カンガルー・ノート』論（もぐら通信第66号）：

「3. 『カンガルー・ノート』の記号論

最初に、次の5つの記号の意味をお伝えします。

(1) 《 》：《存在》と《現存在》に関する『終りし道の標べに』以来の哲学用語を意味する。

(2) 『 』：存在の中の存在の詩人または其の物語の作者《縞魚飛魚》の書いた物語についてのものであることを意味する。

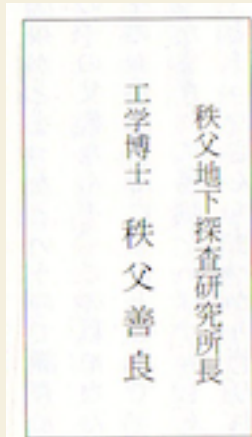
- (3) [] : 存在の中の存在の中の存在であることを意味する。
 (4) 「 」 : 地の文にある立て札を意味する。
 (5) () : 存在の中に存在することを意味する。

これらの記号の階層は、次のやうになります。

存在といふ視点から分類すれば、その階層は、階位の高い順に並べると、

- (1) ()
 (2) 《 》
 (3) 『 』
 (4) []
 (5) 「 」」

花井太助の母親から、東京に行つて此の人を尋ねなさいといはれて貰つた紹介状としての名刺が、織木順一の存在への立て札である。それは次のやうな立て札です。



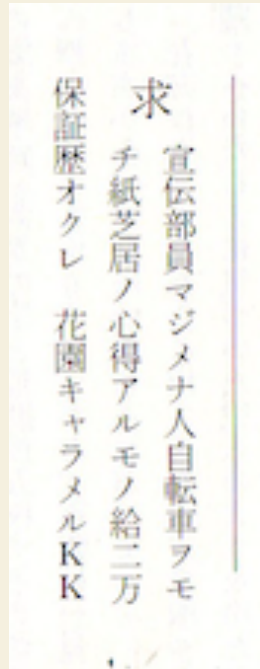
織木順一は、この研究所の住み込みの給仕になり、夜間工業高校に通つて「卒業と同時に、技術見習に昇格して、測定やボーリングの現場に手つだいで出かけるやうに」なる。その後戦時で技術者が出征して少なくなつたことが理由で「技師待遇の軍属として、一つの専門を持たされ」た「ばかりか、検定に合格し、所長の推薦で大学に籍をおくことになった」。自分の開発した「分離電極法」を持つて故郷に帰り、「かくれてしまった温泉脈の心臓をさぐりあて、花園に地熱発電を起こして」町を復興して、故郷に錦を飾りたいと願つてゐる。しかし秩父博士の「分離電極法」を利用した強制的な人間の「大脳変革」の応用技術開発のために渡独して成果をあげ、自分自身が人間機械である「立派な大脳メーター」になつて秩父博士に対する義務を果たしたものの、帰国後に博士の元から逆らつて逃亡したために、絶えず追跡されてゐるといふのは、このことです。かうして織木順一は20年振りに逃亡者S・カルマ氏として花園町に帰つて来た。

(2) 藤野健康 (開業医)

上記(1)に記したやうに、織木順一の父親との因縁がある。土地の地主で、権力がある。藤野幸福といふ、獣医学校中退の弟がゐる。この弟が織木順一の母親の死の原因をなし、ある因果によつて、母親は夫たる織木順一の父親に殺される。

(3) 矢根善介（「貧しい人形使い」）

キャラメル工場にキャラメルを仕入れに行く時の工場の卸の係が花井太助であるといふ関係にある。矢根善介が花園町といふ存在の町へと誘われた立て札は次のものである



(4) 森四郎（花園町立診療所医師）

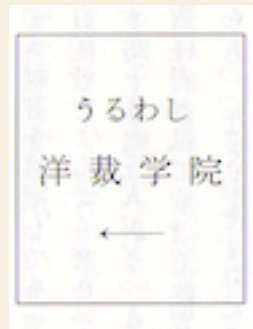
森四郎が第1章5節で見る夢は、上記「(5) 1954年6月30日：思い出〔エッセイ〕」の引き写しそのままである。その夢は安部公房らしく、小学生の自分が学校の教室に行くと、小使〔といふ二義的・二次的な役割の人間〕が、教室の窓から顔を覗かせて〔窓であるといふことにご留意〕が、「世界中の子供がみんな大人になる注射をうけに行く日であって、今日かぎり、世界中の子供がみんな大人になって、もう子供はいなくなるはずだった」そのための注射を受けるための定時定刻に遅刻して到着したために罰を受けることを大きな声で告げる、といふ夢である。

また、自分の両親がいつの間にか現れて、「私たちは恥ずかしいよと呟くように言い、うなだれて立ち去った。彼は鉛筆をだしてそぎはじめた。するとどこかでベルが鳴りだした。逃げだそうとして目が覚めた。」といふ夢の中の話に登場する鉛筆は『S・カルマ氏の犯罪』の中の詩の一節を思ひ出させるし、ベルについてはいふまでもありません。これは劇の始まる開幕のベルである。この甲高いベルの音が登場人物を誘拐する救急車の音であるならば、終りのベル（『箱男』）でもあり、始まりのベル（『密会』）でもあり得ます。

この医師も、職業柄、人間を病人、社会は病院施設と考へる医学士安部公房の意識を映してゐるものと考えることができる。

この人物は「こうしてある日、彼は切符といっしょにいくばくかの悲しみと希望をポケットにして、T市を後にした。」とあるので（全集第4巻、108ページ上段）、安部公房の世界で切符と云へば、いふまでもなく生きて帰らぬ存在への片道切符である。やはり上記「1. topologyの存在の三階層」の通り、「郡、大字、字」と下降する「この花園町といふ土地は、字といふ三階層目の一番底に存在する場所だといふ事になる。」

そこで、これも安部公房の世界の常道ながら、存在が話者（作者）と読者に意識されたならば、存在の方向への立て札が立つ。ここで立つのは「うるわし洋裁学院」への立て札である。この洋裁学校が存在の宿る場所になるのであろう。といふことは、この医師は迷路をさ迷ふ事になるのであるが、果たして此の医師は、カフカの主人公のやうに、職場の診療所になかなか辿り着くことができない。



さ迷ふ理由は、誠にtopologicalな事に、医者－患者といふ関係に於いて、「患者を持たない医者」だからであり、穴の無いドーナツがドーナツでは無いのと同じ理屈で、従ひ、患者がゐないので「昼間のユウレイか、宙に浮かだ梯子のようなもの」であるやうな宙ぶらりんの状態に着任以来あるからです。

この医師は「昼間のユウレイ」の状態を脱して、私は私だといふことを証明するといふ此の安部公房十代以来の自己承認（または自己証認）といふ、難しい言葉で世にいふ自己同一性の証明を自分でするためにあれこれと策を講じてみるが、どれもうまく行かない。

安部公房の十代の存在論の鍵語（キーワード）は、（部屋、窓、反照、自己証認）ですが [註12]、この医師に与へられてゐる寝泊まりの部屋には窓がなく、無いどころか、本来の安部公房の存在の部屋には無い筈の両隣の空間に接続してゐる扉（ドア）が付いてゐるといふ部屋である。扉は「一方が事務室に、もう一方が洋裁学院の教室に通じている。」窓がなければ閉鎖空間からの存在論的な脱出はできないが、その代はりに、部屋の両側に事務室と洋裁教室といふ空間があつて、その現実の中で往来をするといふのが此の医師の生活といふ事になつてゐる。これを作者は「言ってみればむき出しの鉄格子が、色とりどりのペンキで見栄え良く塗られたというくらいのことだったかもしれない。」と書いてゐる。要するに安部公房の存在の部屋の存在論から見れば、自由のない監獄の現実には森医師はゐるのです。「森は夢に見るほど患者に飢えていた。」ので、花井太助に飢餓同盟に誘はれる。森四郎は織木順一の自殺未遂の手当てをする。織木順一が、赴任して最初の患者である。

[註12]

安部公房の概念化したこれら四つの言葉については「もぐら感覚5：窓」（もぐら通信第3号）にて論じたので、お読み下さい。同号のダウンロードは：<https://docdro.id/SLscB7x>

(5) 多良根町長 (S市に常住して花園町にいつも不在の現町長)

飢餓同盟の敵である。町の最高権力者が常に町に不在であるといふ設定は、父親の不在を意味してゐて、これも安部公房らしい。『密会』の舞台である病院に院長がゐずに、二義的・二次的な地位にゐる副院長の馬が実際の支配者であるのと同じである。二義的・二次的な位置にゐる町を支配する此の町の馬は誰なのか。

(6) 花井太助 (ひもじい同盟 (後の飢餓同盟) の指導者)

キャラメル工場の卸の係を務める。役職は不明。子供の頃は、峠の茶屋に母親と姉の三人で住み、「通りがかりのものに、飲物や「満腹」というきのこの干物 (ひもじい様の護符で、飢餓よけのご利益があるという) をひさいで暮らして」みた。(傍線は原文傍点) (全集第4巻、130ページ下段)

花井太助には尻尾が生えてゐるといふ噂がある。この尻尾を切除する手術に力を貸したのが井川 (仇名はイボ蛙) である。

最初ひもじい同盟、後に改名して飢餓同盟の名前の由来は、この峠の茶屋の「満腹」というきのこの干物が「ひもじい様の護符で、飢餓よけのご利益がある」ことに由来する。

峠は、これもいふまでもなく、安部公房の世界では二項対立の両の対立項を否定して、主人公が存在へと失踪する、窓や橋と並んで形象化されてゐる上位接続 (積分値) の場所であることは、代表的には『カンガルー・ノート』の最後の第7章人さらいの中の「人さらい」といふ、第6章風の長歌に対しての反歌である安部公房の詩に「北向きの小窓の下で/橋のふもとで/峠の下で」とある通りです。

花井太助以外はみな、存在への立て札に導かれて花園町といふ存在の出現する町に外部からやつて来た人間たちである。花井太助に立て札が立つてゐず、しかも飢餓同盟の委員長で最初からみられるのは、この男の生まれ育ちが峠の茶屋といふ花園町へ降りて行く、存在への上位接続点であるからです。即ち、

ひもじい同盟または飢餓同盟とは、存在へと脱出するといふ目的を共有して事に当たる外部から来て存在の方向へと進もうといふ人間のための同盟であるといふ事になります。冒頭に掲げた同盟の一般的な目的二つ、

- (1) 飢餓を克服するための同盟であるか、または逆に、
- (2) 飢餓を求めるための同盟であるか

といふ問いに対しては、かうして上記 (1) の目的であることがはつきりしました。しかし、誰が、何が、飢えてゐるのか。いづれにせよ、この同盟の最終目的は存在の「革命」である (全集第4巻、143ページ下段)。

花井太助は織木順一の遺書を読んで、織木が日本に持つて帰つて来た「立派な大脳メーター」に人間になるための「地下探査」の機械を利用して、花園町に発電所をつくることを発想する。

花井太助が織木順一の遺書といふ話中話を読み終えた後に、いつもならば接続が連続の非連続、非連続の連続といふ接続で話が次の章の第10章へと進むものを、安部公房は次の章の初めの第一行を、花井太助が「織木の遺書を読み終えた」のが「六時二十五分」であるといふ定時定刻で始めてみるのが異例である。これでは安部公房固有の話法は生きず、従ひ、存在の窪み（凹）があつても、呪文を幾ら唱へても、存在は招来されない。ここを安部公房はどのやうに凌いで解決しようといふのか。

花井太助は、この「立派な大脳メーター」に人間になるための「地下探査」の織木順一の機械を利用して町に発電所をつくり、多良根や藤野に対抗して、町の社会基盤を一気に掌握して町の政治権力を握る事によつて存在の革命を起こすための発電会社の創設を決意し、勤め先を退職することを決意した時点で、ひもじい同盟が飢餓同盟に名前を変へる（全集第4巻、144ページ下段）。

しかし、この改名と同時に、この同盟の自己矛盾が明らかになります。

3.2 飢餓同盟の自己矛盾

「井川（イボ蛙）：「花井さん、〔多良根だつて藤野だつて〕あなたが一つ町長になってください、なんて頼みにきますよ。」

花井：「いや、ぼくは断るさ。私は発電会社の社長である前に、飢餓同盟の委員長です。同盟は一切の権力を否定する。諸君は勝手にやりたまえ。しかしわれわれは、諸君が同盟の前に膝を屈するまで、闘いをやめないだろう……」（全集第4巻、144ページ下段）

花井の上の科白に「発電会社の社長である前に」とある。「前に」とは、これはいつも安部公房が本格的に物事の本質を考へ、書くときに使ふ超越論の「以前」ではないが、しかし、意味としては同義であるにとるとどうなるかと言へば、飢餓同盟は、時間の中の利益創出目的で（通貨と）等価交換をして電力を販売する電力会社といふ組織とは別して、それはそれとしてあるが、しかし、時間を超越した超越論による存在の同盟であるといふことを言つてみる事になります。従ひ、町の政治的権力者たる多良根や藤野を念頭に「諸君が同盟の前に膝を屈するまで、闘いをやめないだろう」といふ発言になるのです。飢餓同盟は超越論の組織として、最初から政治的には無力であることを前提とする。

やはり、安部公房は、この作品でマルクス主義と超越論の一次元上での統一を図つたのです。

間違ひなく、これが、安部公房の日本共産党内部に於て考へた、「日本共産党そつくり」の「贗の日本共産党」といふ存在の共産党であらうと私は考へる。それでなければ、次のイン

インタビューでの安部公房の発言にはなりません。確かに、安部公房は、上記【a】の所説で、「仮説の設定によつて現実的な事実をモデル化して、現実分析を物理的にして、分析の正しさを証明するといふ仮説設定の文学」といふ安部公房の文学にあつて、これは此の通りにこれまで紹介して来た登場人物を通じて「【a】で証明した事実を、フィクションの中で、事実の虚構化によつて真実となすこと」を現実の共産党員としての活動にあつても、従ひ虚実ともに実践してみたのです。そのことの判るインタビューがあります。共産党が、共産主義を否定する思想である超越論者を受け入れる筈が、そもそも、ない〔註13〕。古林尚によるインタビューをお読みください。

〔註13〕

『安部公房とチョムスキー』（もぐら通信第73号）の「（2）西洋近世哲学史の中の安部公房の位置」にて、近代ヨーロッパ哲学思想史の中で共産主義と超越論の違いを画然たる線を引いて明らかにしましたので、これをご覧下さい。同号のダウンロードは：<https://docdro.id/LRyQAvx>

古林尚による1972年1月1日、後年安部公房スタジオを立ち上げて、『箱男』とともに十代からのリルケと自分の詩の世界へといふ存在の中に社会を求める後期20年の当初の、永劫回帰の準備で現実に忙しい時の安部公房の当時の回想です。

「中野重治にカチン

古林 実際には『人民文学』の運動に加担するところまではいっていない。

安部 いや、書いてはいます。なんか短いものを……。ぼくは、あの当時、何をしたかという下丸子でオルグをしていたんですよ。だから、いわゆる上のほうの『人民文学』とか『新日本文学』とかそういうところにはまったく関係がなくて、工場街で寝泊まりして文学サークルのオルグをしていた。

（略）

安部 あの当時も、ああいう小説〔引用者：初期の変形譚〕を書いてたわけだし、工場に入っていったって、ぼく流のやり方で文化運動を組織したわけですよ。それがハネ返されていたら、ぼくも考え方を変えたかもしれないけど、けっこう同調してもらえたわけだ。それで、そういう形でどんどん組織していくと、労働者が、へんてこなシュールの詩を書いてたりなんかするようになってっちゃう。そういう作品を『人民文学』に持ちこむと、蹴とばされちゃうんだね、反労働者的でダメだと。この話、あんまり喋ったことない。

古林 そうですね、だから、きょうは聞いてみようと思っていたんです。そうすると安部さんの党員時代というのは、何年ごろから何年ごろまでですか。

魔に憑かれて書く

安部 ぼくは記憶力が悪いから……。決定的に対立しちゃったのは、ポーランドやハンガ

リーの騒ぎのとき。ぼくは、それを予告するようなことを書いたわけだ。

古林『東欧に行く』ですね。

安部 そう、『東欧に行く』。」

(全集第24巻、289ページ)

『東欧に行く』の内容は1956年9月19日のアカハタ紙上でのインタビューから1957年2月15日までの発言の集成(全集第7巻、27ページ)。さうすると、1953年の一番苦しい年を脱して三年後から四年後の間に、1956年後半以降、上記インタビューでの発言通りに日本共産党の権力機構に近い文学雑誌から拒否された/てみたといふ事になります[註14]。

[註14]

マルクス主義に基づく共産党といふ党(パルタイ)がどういふ国家構造を理想とした党かといふ事は『安部公房とチョムスキー』(もぐら通信第93号)の「11.6 マルクス主義の歴史・共産党・社会・国家・国民・個人の関係」で明確にしましたので、お読みください。同号のダウンロードは：<https://docdro.id/BFVceOM>

『飢餓同盟』といふ虚構の中に真実を求めた安部公房が此の時代に何をしてみたかといふ実際が、上記に挙げた「(3)1954年4月1日：サークルをめぐる問題—わたし達の文学教室〔エッセイ〕」といふ報告書であり、この文章に安部公房の視点で、成る程次のやうによく書かれてあります。

「労働者が、へんてこなシュールの詩を書いたりなんかするようになっちゃう。」といふ事は、やはり此のエッセイの最後に「私が、美の問題をとりあげたのは、そうした理由からだった。」「そうした理由」とは、関係のバラバラになつてゐる複数の文学サークルを指導してわかつた事は「大衆の要求をしっかりとつかみ、要求を発展させることに奉仕しようと思えば、当然思想改造の闘いが浮かび上がってくる筈ではないか。それが大衆の苦しみであり、サークルはその解決に奉仕しなければならないものなのだ。」といふ視点が欠落してゐるからであり、この安部公房の提案の意図を共有してゐないからであるといふのが、文学サークル不調和に関する安部公房の分析です。

しかし、「そうした理由から」安部公房が「美の問題をとりあげ」、また此の報告の冒頭にある通りに「美について、あるいは笑いについて……という具合に、すでに三回にわたって私たちはかなり抽象的な問題を論じあつてきた」にも拘らず、または其れ故に、「よせられた批判の中には」「重大な、ある典型だと考えられる意見がまじつていた」。それは「あるいは、君の考え方は正しいのかもしれない。しかし仮に正しくとも、そんなことはまるで役に立たない意見ではないのか。」といふ批判のあつた事であるといふのです(全集第4巻、279ページ)。

この工場の労働者からの批判に対する回答と考へても良い小説論が、「サークルをめぐる問題—わたし達の文学教室」と同じ年月日に発表された「私の小説家観」です。同じ年月日に発表されたといふ事実に意味があるでせう。

ここには注文主の注文通りに「好きなやうに作つてくれ」と言はれて、実際その通りにしたら注文主が住めない「やくに立たない」家を建てたがために、「サギだというのでK君は訴えられた」といふ当のKといふ建築家の話を譬喩（ひゆ）に使つて、現実認識と実用とは別事であるが、しかし、小説を読むといふ事は「魂を通じて、未知の現実を知り、発見する事なのです」と、文学サークルでも説いたに違ひない安部公房の言葉があります。

何故これを文学サークルで説いたことが判るかといひますと、この時期もう少し後の同年6月30日の「文学における理論と実践」に論ぜられてゐる現実認識は、全て言語との関係においての理論と実践の中での現実認識であり、引用されてゐるマルクスの言語と観念についての言葉も然り、レーニンの「唯物論と経験批判論」からの引用も然り、スターリンが言語学について言及する引用も然りだからです。

文化サークルで、小説を読むといふ事は「魂を通じて、未知の現実を知り、発見する事なのです」と言つて教へた此の魂といふ言葉が、またスターリンの言葉を引用して「スターリンは、「作家は魂の技師である」と言つたが、魂の技師であるということは、魂を変革するものということではないだろうか。」と云ふ安部公房の問ひかけが、この時代の安部公房の理論と実践を一つにまとめる安部公房の人間としての、また共産黨員としての、全人格を賭けた人間信頼の鍵語（キーワード）であつたものと思はれます。〔註15〕そして、この魂は、後述するやうに、存在の革命に餓えてゐた。魂と一対であるかのやうに、この時期の安部公房の鍵語（キーワード）は、飢餓であつた。

[註15]

このことを一層証明する文章を『文学サークルのあり方』といふ文章に書いてみます（全集第5巻、466～467ページ）。これは文学サークルといふ活動の場で、安部公房が伝へた実際の言葉であると思ひます。以下、魂といふ言葉のある発言の箇所を引用します：

「無痛分娩とヒステリー」と題した前章の後に続けて「文学サークル」といふ題で新たに立てた章の中に次の言葉があります：

「文化運動とは、人間の心の世界の無痛分娩運動なのです。渡したいの要求を、ヒステリーの絶望に向わせることなく、一步一步その実現に向つて進めるやうに、魂を武装することなのです。魂の革命運動なのです。」（同巻、466ページ上段）

「よく、方々で、文学サークルはどうあるべきかというような質問を受けます。一言でいえば、サークルはその条件に応じて、それぞれ独自の形を發明すべきであり、あるべき形などというきまりはないと思うのです。サークルを形のほうから考えていくのは、今まで私が話してきた、人間の魂を浅くしかとらえていない証拠だと思ふのです。サークルの基準はただ一つです。それは私たちのすべてが今魂の解放のために手を結び合わなければならないということです。」（同巻、466ページ下段）

「サークルにとって一番恐ろしいのはセクト主義でしょう。複雑な、矛盾したものを、形の上から割り切つてしまおうとするから、セクト主義になるのです。魂の痛みが複雑で矛盾していればこそ、サークルが求められ、ま

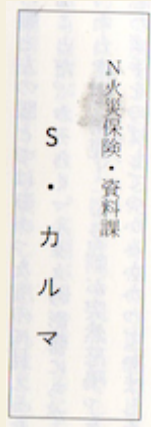
た必要であるわけです。サークルが、絶対に希望を失わない強い魂のよりどころであると同時に、痛む魂のためのあたたかい病院であることを忘れてはいけません。だからサークル指導者になにより必要なのは、文学についての専門的な知識などより、人間の魂に対する鋭い感受性、自分の意見より他人の意見を尊重する気持、目先を見るより遠くを見る態度、のんびりした気持の長さ、魂の変化に対する理解と研究心などです。文学がきらいではむろん困ります。が、いわゆる文学青年では困るのです。解放された魂の力に対する強い信頼が必要なのです。だからこそ私は、無痛分娩やヒステリーの話をしたわけなのです。」

(同巻、466ページ下段～467ページ上段)

それ故に、織木順一の職業が技師であり、それも「地下探査技師」であると云ふ彼の名刺の肩書きの意味するものは、もつと以前にシュールレアリズムの現実と虚構への応用に関して自分のレアリズムはシュール(超越した)リアリズムではなくサブマリンのサブ(下へ潜る)レアリズムだと言った安部公房のもぐらの精神であり、「地下探査技師」とは、藝術と呼ばれる高度な言語技術の作家としての魂の発露である職業的名前であり、これは、ある朝起きたら名前を喪失してゐたと云ふ無名の人間、即ち「いつの間にか」存在となつたS・カルマ氏の名刺と同じ名刺なのではあるまいか。

「地下探査技師」の名刺もS・カルマ氏の名刺も、これは虚構の世界の事であるが、「地下探査技師」とは、しかし、現実の世界でも実際に地下活動をしてゐた事の二重の意味の言葉の掛詞だと解することができる。それが『飢餓同盟』といふ虚構の中に真実を求めた安部公房が此の時代に求めて実践してゐた事の、魂による探査と現実の実際の地下探査が、織木順一の名刺に現れてゐる。とすれば、S・カルマ氏の名刺についてもやはり同様のことが言へると云ふことになります。

(以下、このページは余白)



S・カルマ氏の名刺に書いてある職業上の名前が「N火災保険・資料課」であるのは、『飢餓同盟』の世界でかうして考へて来ると、その意味がよく解ります。S・カルマ氏は、家屋が火災に遭つて焼失しても、その保険金を支払ふことの保証できる記録（ドキュメンタリー/ドキュメント）が資料として保管されてある課に勤務してあるといふ意味だと改めて知るのです。

S・カルマ氏の技術は、藝術といふ高度の言語技術ではありませんが、しかし世俗の時間の中にあつて必要とされる記録の技術だといふことです。安部公房が記録藝術（ドキュメンタリー）と云へば、世界を差異であると観る超越論です。さうであれば、記録の高度な技術があつて、それが目から見る現実の全てを（目といふ割れ目・穴—差異—から）吸い込むといふ能力が記録藝術といふ超越論的な技術的能力だとすれば、名前を喪失したと引き換へに獲得した此の能力と技術もまた無名になることのための技術だといふ理由で犯罪的であり、追跡されて法廷で裁かれることになるのです。

さて、S・カルマ氏がさうであれば、「地下探査技師」織木順一も同様の運命をたどつて最後は砂漠の中で垂直方向といふ無時間の方向に果てしなく成長する存在の壁になるのではないでせうか。たとへ、織木順一が★印の柵を超えて向かうに行つてしまひ、こちらの★印の柵の人間からは死んだ人間と思はれたとしても。そして実際に、『S・カルマ氏の犯罪』では、★印の柵であつたものが、『飢餓同盟』の最後では◇の印の柵になり、「織木が死に、花井は発狂し、イボ蛙〔井川のこと〕が裏切り、矢根が去り、そしていま森も去つた。こうして飢餓同盟は消滅した。」といふ結末になつてゐます。

やはり、死ぬのは織木順一といふ『飢餓同盟』のS・カルマ氏であつた。さうであれば、この小説の主人公は、作者によるマルクス主義と超越論の一次元上での統合という企図によつてS・カルマ氏のやうには無名ではないものの、同じ性格を賦与された織木順一だといふことになります。

「その人間は『（霊媒の話より）題未定』以来、霊媒であり、シャーマンであり、媒介者であり、媒体であり、触媒である役割を演じてゐるものが主人公となるでせう。最後者の触媒にあつては、舞台の上で役割を演じて両極端が上位接続されれば姿を消して、死ぬか失踪してしまふ。」といふ通りの虚構の中の真実を織木順一は生きて、上掲「『飢餓同盟』人物相関図」の通り存在の十字路で死んで逝つた。

3.3 飢餓同盟は一切の権力を否定する

3.3.1 第2章第10節と第11節は超越論の章である

前節で知ったように、飢餓同盟が一切の権力を否定した上で革命を起こすのだとすれば、それは最初から敗北を前提にした革命であるといふことになります。

マルクス主義の革命とは『共産党宣言』を読めば、当時のヨーロッパの中産階級を皆殺しにして構はない（言語のドイツ語はもつと酷いvernichten（フェアニヒテン）、即ち絶滅または廃絶といふ恐ろしい言葉）といふ理屈で起こす革命ですから、当然に非合法の武力を使った暴力による人間虐殺の革命です。武力は権力と経済力に一致してみますので、飢餓同盟が発電会社の設立と成功をまだ達成してゐないうちに、町の権力と経済力の階層と戦ふ事はできませんし、それこそが最初からの敗北である。未来のことを頼みにして今のことの利益を図る事は、必ず失敗に終わりますし（何故なら人間は未来の予測は出来ないから）、これは他者を巻き込んで実現しようとする、それはどんなに見栄え良く仕立てても、詐欺に等しく、あなたはペテン師になる。このことをよく知った上で安部公房は花井太助といふ人物を造形し、最後に「4. どこに詩的な失敗の部分があつたのか」で述べる理由によつて、後年1962年にバロッキ的に長い名前のシナリオとして花井太助をペテン師として再生させてゐます。

一切の権力を否定したら、否定する者には経済力なく、武力なしといふ状態になる事は最初からわかつてゐる。明治政府の国家挙げての標語、殖産興業と富国強兵といふ政策は正しいのです。しからば、この小さな廃れた温泉町の殖産興業と富国強兵をどうするのかといふ政策を花井太助は飢餓同盟の指導者としては旗幟鮮明にしなければなりません。

飢餓同盟の初回の会合は、廃車のバス（乗合自動車）の中で開催され、集まり/集められた同盟員は、花井、井川、狭山、森医師、矢根、それに自殺未遂を起こして看病されてバスに寝てゐる織木の6名といふことになった。

朝まで花井太助と井川が事前の準備の話をして夜があけた。花井太助が出勤時間に間に合ふようにと駆け戻ると、工場の門が見えたところで、サイレンが鳴り響いた。このサイレンはいふまでもなく、シャーマン安部公房の秘儀の式次第に則り、これから存在が現れる前触れの甲高い音、『箱男』と『密会』ならば人さらいの救急車のサイレンの音です。

かうしてみると、織木順一の開発した「機械を利用して町に発電所をつくり、多良根や藤野に対抗して、町の社会基盤を一気に掌握して町の政治権力を握る事によつて革命を起こすための発電会社の創設を決意し、勤め先を退職することを決意した時点で、ひもじい同盟が飢餓同盟に名前を変へる」といふ事の裏返しは、登場人物が意識するにせよしないにせよ、作者の語る話としては、工場のサイレンの甲高い音が花井太助が門に入らむとした所で鳴つたのであれば、それまでのひもじい同盟が超越論の同盟になる転換点で名前を花井太助はひもじい同盟を飢餓同盟に変へたといふ事をもまた意味してゐることになります。

工場のサイレンの鳴つた後に、次のことが続く。いずれも存在を窪みに呼び出すための秘儀

の順序であり、その準備です。存在の窪みは第3章第21節に「死に窪とよばれている凹地の傾斜に、フキの芽が出ているというので、それも摘んで帰ろうと」（原文は傍線は傍点）織木順一が思ひ、降りて行く凹の形象の場所として現れる（全集第4巻、202ページ下段）。そして、大事な事は「凹地の傾斜に、フキの芽が出ているという」ことです。これはリルケの世界です。第3章第21節で後述します。かうして、リルケの存在論の詩の世界（超越論）と飢餓同盟が接続されてゐる。以下超越論（汎神論的存在論）に関する箇所を引用して、此の事情の成り行きを読者の理解に供したい。

安部公房が坂道（例へば『燃えつきた地図』の冒頭）、この傾斜、または崖（『鏡と呼子』や「周辺飛行7ー睡眠誘導術」の舞台設定をみよ）を持ち出す時には、必ずリルケの詩想であるHang（ハング：傾斜、崖）といふ斜面が念頭にあります。何故なら斜面は垂直方向の差異だから。そして其の斜面には竜胆（リンドウ）の花が咲いてゐる、そして其の花は採らうとしても採ることのできない急斜面にある〔註16〕。ですから、もし織木順一が此の花に相当するフキの芽を採らうして実際に採つたとしたら、それは安部公房の詩の世界の事件としては、その人間が谷に落ちて死ぬことを意味してゐます。それ故に谷の名前が「死に窪」といふ名前なのです。その後も織木順一は地下探査をして生きてゐるかの如くに描かれてゐますが、しかし実際には此の時ここで「既にして」死んでゐるのであり、この後の織木順一は死者なのであり、戯曲『幽霊はここにゐる』の幽霊と同じ役割を演じる存在になるのです。

〔註16〕

リルケの『ドゥイーノの悲歌』の「第9の悲歌」から崖、傾斜、斜面と花を摘むことの間接関係を歌つてゐる次の箇所を以下に引用します。勿論、この崖は『ドゥイーノの悲歌』のみならず、『形象詩集』には数多く登場します。

〔原文〕

Bringt doch der Wanderer auch vom Hanne des Bergrands nicht eine voll Erde ins Tal, die Allen unsägliche, sondern ein erworbenes Wort, reines, den gelben und blauen Enzian.

〔拙訳〕

たとへ旅人が、山の縁（ふち）の崖から、片手に一杯の土（大地）を谷の中には運ぶことがないとしても、せめて、自分の力で独りで手に入れた一つの言葉を、純粋な言葉を、即ち黄色と青色をした竜胆（リンドウ）の花を。

〔註釈〕

リルケが「純粋」といふ形容詞を使ふ時には、それが時間の存在しない空間であることを常に意味してゐます。ですから、この場合も、「純粋な言葉」とは、その内部に時間の存在しない言葉といふ意味です。それが、「黄色と青色をした竜胆（リンドウ）の花」であるといふのです。この花は存在の花といふことができませう。

織木順一は確かに旅人であり、大地を探査する探査技師であり、「片手に一杯の土（大地）を谷の中には運ぶことがないとしても、せめて、自分の力で独りで手に入れた一つの言葉を、純粋な言葉を、即ち黄色と青色をした竜胆（リンドウ）の花」、即ち自己を犠牲にしてまでも此の花を『飢餓同盟』を通じて町の人々のために摘み取りたかつたし、実際に摘み取つたために「死に窪」の底に至つて「ふと足もとに鳥の死骸があるのに気づいた」。雪の窪みの中に死んだカラスの写真は、全集第12巻の裏表紙の内側に装幀されてゐる。

(1) 花井太助に飢餓同盟への加入を誘はれて、「矢根はとんでもないというふうにも上唇をめぐって、長い廊下を便所をさがしに駆けまわった夢のことをくどくどと喋り、考えるひまなんかまるでなかったと弁明した」。

尿意を我慢して便所を探して駆け廻るといふのは安部公房の定番の動作で、これは「周辺飛行 3—案内人」を読むと（もぐら通信第93号）、やはり「外では、いまも、便所探しの女たちが、腰をくねらせながら駆けずりまわっているのだろうか。どうやら、このレストランにも、便所は無さそうだ。」とあつて、この女たちは地下世界で主人公のいる存在の三層目の鶏料理を出すレストランに降りて来ることが出来ずに、存在の二層目を走り廻って、その入り口である便所を探しあぐねてゐる女たちです（かうしてみると確かに『方舟さくら丸』の便器のある地下空間は存在の三層目だといふことがわかる）。従ひ、此の場面ではいつの間にか矢根は夢の中で存在の二層目に降りてきてゐることになります。（全集第4巻、147ページ上段）

(2) 「矢根は両手のくぼみの中に息を吹きこみ、足ぶみしながら、他人の書いた文章を暗唱するような調子で言った。/「加入……し、ま、す。」

矢根は両手に存在の窪みをつくつた。足踏みは繰り返しの呪文。「文章を暗唱するような調子で言った」とは此れもまた呪文を唱へることに通ずる。（全集第4巻、147ページ下段）

(3) 「遠くで、しかしいつもよりは近く、老いぼれた獣のような汽車の吠え声がした。峠を越えた合図である。」

サイレン同様の甲高い汽車の汽笛の音と、峠といふ存在への上位接続点の明示。甲高い音が鳴つて汽車は存在への上位接続点を越えて存在に入った。いふまでもなく甲高い音は存在の出現する前触れ。（全集第4巻、148ページ上段）

(4) 「この旧式のダットサンは、寒いとうまく始動がかからない。ガソリンをうんと吸いこまして、ぐっとセルを押す指に一念をこめるのだが……ザザザザ、パッフ、パッフ……誰か押してくれるものはいないか？……三十メートル、……パパパパ、パッフ……工員たちは七時半にならなければやってこない、なまけ者め！……ザザザザザ、パッフ、パッフ、パッフ……くそ、革命でこんな自動車はたたき割ってしまわなきゃならん……パッフ、パッフ……おれは、社長で、委員長なんだぞ、……ザザザザ……いまに見てやがれ……パッフパッフ、パッフ……」

いふまでもなくカタカナの言葉はみな繰り返しの呪文である。「……」は安部公房の読者にお馴染みの存在の隠れてゐる沈黙の記号。（全集第4巻、148ページ下段）

(5) 「……駅についたのは、予定よりも五分おそかった。が、さいわい、汽車のほうでもちよほど五分おくれて着いてくれた（略）。」「……」といふ沈黙の中に、定時定刻を示さぬ超越論的な遅延の時間の設定をして、この遅延の中に峠を越えた汽車が駅に到着した。（全集第4巻、148ページ下段）

3.3.2 第2章第12節は現実の章である

第11節を受けて置きながら、またそれ故に「花井は手をくぼめてしっぽの上にあてがい、顔をしかめた。」と手に存在の窪みを作り、topologyの尻尾がありながら〔註17〕、第12節の最後の二行が次のやうになつてゐるので、この章は最後には現実に接続可能な定時定刻で終る章になつてゐて、完全に超越論的な時間の存在する章ではない。

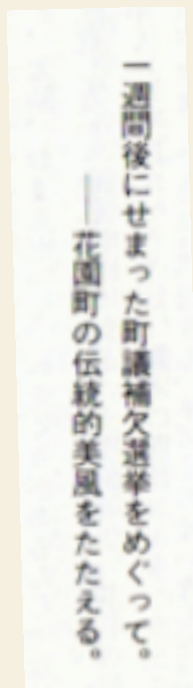
「就業をつげる工場のサイレンが鳴りひびいた。八時に二分ないし三分前の合図だった。」
 (定時定刻に対しての事前の時間である事は明らか) (全集第4巻、154ページ上段)

[註17]

『カンガルー・ノート』の第1章に尻尾の無い豚の描かれたカードが出てくる。カードと云へば安部公房の世界では存在への片道切符です。この片道切符は第6章風の長歌で再度今度は尻尾のない鯛焼として出てくることは『カンガルー・ノート』論(もぐら通信第66号から第84号)で論じた通りです。安部公房は何故尻尾に拘泥するかといひますと、尻尾とは端ですから、端があると、そこでtopoogyの一筆書きが終はつてしまひ、最後に最初が接続しないからです。この端のあることとないことが現実と夢とこれら二つの「切れ目」の意識の話であること、安部公房固有の話法「僕の中の「僕」」の問題であることは、「周辺飛行7ー睡眠誘導術」(もぐら通信第97号)のゴムまり人間の話として、「周辺飛行8ーある芸術家の肖像」(もぐら通信第98号)では此の同じ主題を「見ることと見られること」ややはり現実と夢の「切れ目」の話として、様々な安部公房の動機(モチーフ)と形象(イメージ)の関係で論じましたので、お読み下さい。

3.3.3 第2章第13節は超越論の章である

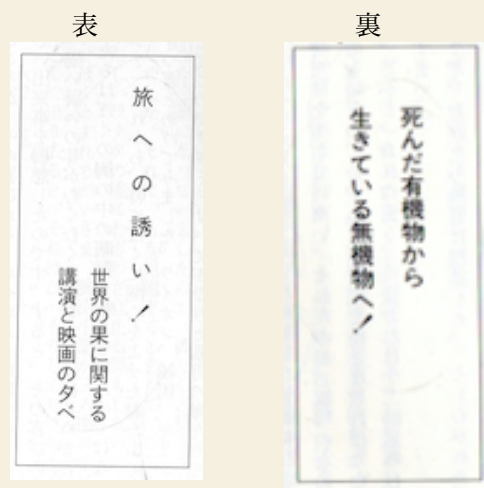
第13節は、しかし、これに対して、第12節を受けて「……」といふ沈黙の記号で始まる。第12章の終はりが現実の章の終はりでありながら、次の章の始まりが沈黙で始まるといふのは、この章が存在の章であるからでせうか。確かに花井の母親は「自分で灰をかきませ(灰は『砂の女』の砂と同じ移動して止まない存在の形象)、中からヒモでくくった財布を取り出して、ふところにおしこんだ(勿論ヒモは『赤い繭』や『なわ』の一筆書きのtopologyの形象。財布は袋といふ凹の形象であるので『鉛の卵』や『カンガルー・ノート』の有袋類の袋と同じ存在の形象)」。 (全集第4巻155ページ上段) また、花井太助が「明日の新聞」を読み、ラジオのニュースに耳傾げるとか(「母親があざ笑うように言って出ていくと、花井はすぐにラジオをかけて新聞をのぞきこんだ」(全集第4巻155ページ下段)といふやうに、存在の形象が連続してゐて、更に選挙の立て札が次のやうに太字で書かれて立つてゐる。



また、新聞記事の論説の文章中に、次の立て札も立つてゐる。

一週一訓——人にめいめいの道あり、争うは道はずるるなり、おのが道ゆくものにあやまつなし。

『S・カルマ氏の犯罪』に立て札の活字の例を求めれば、映画上映へのビラ《旅への誘い！世界の果に関する講演と映画の夕べ》〔註18〕と地の文で安部公房の存在論の記号で書かれた文字を写してある同じ文言のビラの面も太字であり、「死んだ有機物から/生ききている無機物へ！」とある裏面の文字もまた、次のやうに太字の活字である。



といふことから考へて、この章は存在への立て札の立つ超越論の章であるといふことができる。

〔註18〕

《》といふ、安部公房の割り当てた存在論の記号の意味については〔註11〕を参照下さい。

ここまで来れば、この選挙の立て札はやはり存在の方向への立て札に間違いありません。ここまで読んで来て判ることは、『飢餓同盟』の主要な人物には皆存在への立て札が立つてゐて、存在へと導かれてゐることです。再度topologyの並行四辺形を以つて示せば、次のやうな人間関係になります。

20190224				
eiya iwata				
『飢餓同盟』人物相関図				
花井太助以外はみな、存在への立て札に導かれて花園町といふ存在の出現する町に外部からやつて来た人間たちである。花井太助に立て札が立つてゐず、しかも飢餓同盟の委員長で最初からみられるのは、この男の生まれ育ちが峠の茶屋といふ花園町へ「問題下降」のための「肯定の批判」をするために降りて行く、存在への上位接続点であるからだ。				
花井太助 (飢餓同盟の指導者：委員長) 森四郎 (花園町立診療所医師)				
織木順一 (「地下探査技師」/工学博士)				
井川 (仇名はイボ蛙) 矢根善介 (「貧しい人形使い」)				
(町長方に内通してゐるスパイ：裏切り者)				

そして、この章に至つて何故ひもじい同盟が飢餓同盟に名前を変更したかの理由が花井太助によつて森医師に向かつて作中明かされる。流石に安部公房である。二項対立否定といふ否定論理積の論理は誠に首尾一貫して此の作品にあつても妥協なく貫徹してゐる。結論は、

- (1) 飢餓を克服するための同盟であるか、または逆に、
- (2) 飢餓を求めるための同盟であるか

これらの二項対立を否定することによつて、これらのいづれをも含み、向かうに超越することが、単なる土俗的な信仰を離脱して、超越論的存在の革命に向かふ飢餓同盟の使命なのです。花井太助の言葉で説明を続けます。

「そこで先生、飢餓同盟のことなんだけど、これ、まへはひもじい同盟って言ってたんです。ひもじいってのは、そら、この町じゃよくひもじい野郎という悪口をいうでしょう。あれは他所者の悪口なんですけど、こんな言い伝えがあるんですよ。ひもじい様って飢餓神がいて、それがいつも町境をうろついており、外来者を見つけると、すぐとつついて餓死さしてしまう……ね、うまいことを考えたもんでしょう。他所者なら、飢え死にしてもかまわないっていう、狼みたいな排外主義の合理化なんですよ。本当の原因は見て見ないふりして、かわりに結果を神様にしあげ、原因に祭り上げちゃったんだなァ。」
 「氣にくわんやつはみんなひもじい野郎にしてしまう。権力には都合のいいきたりだな、フツ、……分かるでしょう？
 ね……で、ぼくらは、逆にひもじい野郎の同盟をつくって、やつらの逆手をとってやろうというわけなんです。」
 (二つの引用の傍線は原文傍点) (全集第4巻、158ページ上段～下段) 即ち、

飢餓同盟といふのは、原因と結果を取り違へることで結果を神様として祭ることで、余所者を排外して、飢え死にさせてしまふことを正当化する論理を逆用して、今度は外部から来た余所者の「ひもじい野郎」が既成の権力の此の論理を逆に適用して、これを飢え死にさせてしまはうといふことを、即ち町の内部と外部を等価交換して差異を産み出すことによつて存在の革命を起こすことを使命とする topology の同盟である。といふことになります。

ここに於いて、

- (1) 飢餓を克服するための同盟であるか、または逆に、
- (2) 飢餓を求めるための同盟であるか

この二つの問ひは、飢餓同盟の目的に於いて一つになるので、意味を失ひ、自己矛盾をきたす事はなくなるのです。この自己矛盾の解決を、花井太助は「同盟は一切の権力を否定する」事によつて図らうといふ事なのです。これはリルケの詩想であり、安部公房の大好きなリルケの『涙の壺』の論理です [註19]。中田耕治さんと二人で立ち上げた『世紀の会』の設立の時に作った詩『世紀の歌』（1949年3月15日）をお読み下さい。初期安部公房の成功の後に尚、このリルケの「涙の壺」の叙情を此処でも自己犠牲によつて二項対立を否定して乾溜する安部公房がゐる。

「世紀の歌

ぼくらの日々を乾かして
 涙の壺を蒸溜しよう
 ミイラにならう
 火を消すものがやつてきたら
 ぼくら自身が火となるために！」
 (全集第2巻、230ページ)

この激しい自己犠牲の火は、確かに花井太助に受け継がれて生きてゐる。

[註19]

『魔法のチョーク』論（もぐら通信第52号）より引用します：

「この涙は、安部公房の愛唱したリルケの詩のうちの一つ『涙の壺』に歌はれてゐる涙です。 [註1]

[註1]

『涙の壺』

Tränenkrüglein

Andere fassen den Wein, andere fassen die Öle

in dem gehöhlten Gewölb, das ihre Wandung umschrieb.
 Ich, als ein kleineres Maß und als schlankestes, höhle
 mich einem ändern Bedarf, stürzenden Tränen zulieb.
 Wein wird reicher, und Öl klärt sich noch weiter im Krüge.
 Was mit den Tränen geschieht? — Sie machten mich schwer,
 machten mich blinder und machten mich schillern am Buge,
 machten mich brüchig zuletzt und machten mich leer.
 (<http://www.textlog.de/22406.html>)

【散文訳】

他の者たちは葡萄酒を掴み、他の者たちは油を掴む
 これらの者の囲壁を一定の範囲で囲っている、この中空になった丸天井の中で
 わたしは、より小さな尺度として、そして最も痩せたものとして、
 わたし自身を穿って、中空にし、窪ませて、他の欲求を満たすものとなす。墜落する涙のために。

葡萄酒はより豊かになり、そして油は壺の中でより清澄になる。
 涙には何が起きているのだ？—涙は、わたしを重たくした、
 わたしを目くらにした、そして、わたしの足の関節を玉虫色に光らせ、わたしを遂には破れやすい脆（もろ）い
 ものにし、そして、わたしを空にしたのだ。

【解釈と鑑賞】

この詩は、何を歌っているのでしょうか。

第1連で歌われているのは、わたし以外の他の人々の行為です。
 ひとつは、葡萄酒を掴み、ふたつは、油を掴むというのです。

リルケの最晩年の傑作二つの詩作品『オルフェウスへのソネット』であったか、『ドイーノの悲歌』であったか
 の一節に、やはり壺と、これら葡萄酒と油のことが歌ってある一節があります。これを読むとリルケは、葡萄酒
 の壺や油の壺で、人間の文明が誕生して、都市が生まれて、社会が生まれ、そこで交易をして生活をする、その
 ような生活の豊かさを表すものとして、この二つを使っています。
 これと同じ理解をここでも適用することで、この第1連は理解することができます。

しかし、わたしは、そのような都市や人間の生活の豊かさを享受する者ではない。そうではなく、全く逆に「墜
 落する涙のために」いる者だとあります。

「墜落する涙」とは、涙を流しながら墜落してゆくということであり、そのように墜落するときに涙を流すとい
 う意味でしょう。

この涙を流すと、人間は墜落するというのです。そして、それは、「他の欲求のために」墜落するのです。この
 「他の欲求」の他とは、わたし以外の他の人々の欲求とは異なってという意味です。即ち、わたしは、葡萄酒や
 油の壺を手にしなないのです。

そして、この欲求に身を任せると、自分自身が空になり、窪みになる。

この空になり、窪みになるという形象（イメージ）は、10代の安部公房がリルケを読み耽って我がものとした

形象のひとつです。この窪みが、後年『砂の』女の砂の穴という窪みに成長します。

第2連では、そのようなわたしと社会との関係が歌われています。

わたしが空になればなるほど、窪みになればなるほど、社会の、都市の葡萄酒と油は、より豊になり純度が増す。

これに対して、全く反対に、わたしの身に起こることは、

「涙は、わたしを重たくした、
わたしを目くらにした、そして、わたしの足の関節を玉虫色に光らせ、わたしを遂には破れやすい脆（もろ）いものにし、そして、わたしを空にしたのだ。」

とあるようなことになります。

この詩の題名は、邦題は『涙の壺』ではありますが、ドイツ語ではTraenenkrueglein、トレーネン・クリュークライン、ですので、正確に言えば、涙の小さい壺、涙の小壺という意味です。

つまり、リルケは、このわたしは、葡萄酒の壺ではなく、油の壺でもなく、涙の小さな壺（凹）だといっているのです。それが、わたしである、と。

しかし、そのようなわたしは、他の人々よりもより小さな尺度であり、最も痩せたものとしてあるのです。即ち、この測定者としての小さな存在であるわたし、そして、そのような存在として社会に対してある最も痩せたものとしてのわたし、リルケはこのようなわたしを『涙の小さな壺』と呼んだのです。

10代の少年安部公房は、この詩をこのように誠に正確に理解したことでしょう。繰り返し、後年引用するほどに。

翻って、第1連を読みおすと、わたし以外の、社会の中に生活する豊かな人々の周囲には壁が巡らされていること、そして、その壁の上には、中空の丸天井があって、わたし以外の他の人々は、その天井の下で生活していると歌われています。

このリルケの歌った都市の生活の抽象的な表現についても、少年安部公房は、よく理解をしたことでしょう。

18歳の安部公房は、そのような社会を、『問題下降に抛る肯定の批判』と題した論文の中では、社会は「蟻の巣」だと書いています。その蟻の巣である閉鎖空間から脱出するために、安部公房自身もまた涙の小さな壺になろうと決心したのです。

この詩には、既に『赤い繭』や『デンドロカカリヤ』の種子が胚胎しています。そういえるならば、『砂の女』や『他人の顔』の種子もまた。

ちなみに、このリルケの詩について、1948年7月4日付で、安部公房は中田耕治さんに次の手紙を送っています。

「しかし若し僕が想像するように、君が割切れた合理的な仮面(?)の背後に、弱々しい、余りにも感じ易い、例えば脆いガラスの鉢、リルケが歌った涙の壺のような眼を隠してゐるのだつたら、僕はさう思へてならないのですが、僕等は今後もつと別なやうに、今までとは異つたやうに話し合つたほうが良くはないかと思ふのです。」

(『中田耕治宛書簡第1信』全集第2巻、50ページ上段)

また、安部公房の10代の詩集『没我の地平』所収の詩『詩人』と題した詩の最終連に、リルケの『涙の壺』を念頭において書いた「悲哀の壺」といふ言葉が出てきます。(全集第1巻、157ページ)。

「この様に
 外の面が内を築きあげ
 移ふ生身で悲哀の壺に
 歓喜の光を注ぎつゝ
 久遠の生に旅立つ事が
 吾等詩人の宿命(さだめ)ではないのか」
 (全集第1巻、157ページ)

また、『S・カルマ氏の犯罪』の中に、リルケの『涙の壺』や自らの詩の中にあつて上の詩のやうに歌はれたのと同じ動機(モチーフ)による次の詩がある。これが、安部公房の「革命歌」であることは、この詩の後の次の行でS・カルマ氏の世俗社会の中での名前である名刺が「「そんな革命歌なんてあるものか！」名刺はますます腹をたてて叫んだとあることで明らかです。リルケの「涙の壺」は、安部公房を介して、安部公房の共産主義(Kommunismus)の理念の中に生き続けたのです。

「おれは水蒸気の中で殺されて
 丸くなった。
 しかし饅頭ではない、
 なぜなら中味が空っぽだからだ。」
 (全集第2巻、413ページ上段)

この『S・カルマ氏の犯罪』といふ作品は、1951年の作品です。安部公房は、当時中田耕治さんと二人で立ち上げた「世紀の会」のための宣言書として、『世紀の歌』といふ題の詩を1949年に書いています。後者は、生きてある人間のために涙する詩人の涙の蓄へられる壺と、詩人自身が其の壺になつて、即ち自己が空虚な壺になつてゐる其の自己との関係を歌つた同じ主題が、しかしもっと涙をを中心の主題にして、これからは「日々」の時間を「乾かして」「涙の壺」を、即ち涙を乾溜すべきことが、それによつて空間的な空虚の壺を、自分自身がミイラになる其のやうな壺である自己を創造することが歌われてゐます。この詩は次のやうな詩です。「涙の壺を蒸溜」するための「火を消すものがやつてきたら」自分自身がミイラになる其のやうな壺である自己を創造することが歌われてゐます。

(『世紀の歌』は本文にあるので省略します。)

『世紀の歌』と『S・カルマ氏の犯罪』の2年ほどの間に、安部公房の上記のやうな詩人から小説家への進境があります。丁度この努力の中間地点に、『牧神の笛』といふ、詩人から小説家への此の進境にかける決意と覚悟を示した1950年の作品が位置してゐます。安部公房は自らが火になる覚悟をし、「涙の壺」を蒸溜して、乾かせて、1951年に『不思議の国のアリス』に出逢つて、散文家としての乾いた明るい、日本共産党員になる以前に於いての乾いた文体を獲得するのです。日本共産党員の10年を闊した後に、この乾いた文体はもつと進境して、その後の小説の世界で読者に馴染み深い黒い笑い(ブラックユーモア)の横溢する典型的な安部公房の文体になります。この経緯の詳細は、『安部公房と共産主義』(もぐら通信第29号)に詳述しましたのでご覧ください。

さて、長い註釈とはなりましたが、『魔法のチョーク』(1950年12月1日)は、このやうに、その前に書かれた『デンドロカカリヤ』(1949年8月1日)と同様に、安部公房の散文としての『涙の壺』であり、『赤

い蘭』(1950年12月1日)もまた同様であつて、この時期の安部公房の努力と散文家への確かな方向を示してゐるのです。その根底には、しかし、リルケの詩想のみならず、他方論理的には位相幾何学のあることは、いふまでもありません。」

「誰が、何が、飢えてゐるのか。いづれにせよ、この同盟の最終目的は革命であるならば、この存在の革命とは何をする事なのか。」といふ従前の問いに答へませう。

同盟員が飢ゑてゐる。飢餓同盟が飢ゑてゐる。この同盟の最終目的である存在の革命といふ超越論による時間の外部から時間の内部に起こす外部と内部のtopologicalな等価交換に依る存在の革命は、かくして、同盟員の自己犠牲といふ結果を結果とはせず、従ひ原因ともしないといふ〔註20〕、かうしてみれば、やはり原因と結果の連鎖である因果律は時間の中での出来事ですから、さうではなく時間に無関係に時間(大地震から20年後)と其の場所(花園町)の内部ゐる人々に知られずに誰も意識してゐないうちに始まり終はり終はらず従ひ未だ永遠に始まらぬといふ時間の隙間(差異)に存在する「ひもじい革命」は、これを求める内外の人間には此の革命は飢餓の対象であり(何故なら時間の中に生きてゐては此の実現はなく、決して満足することがないから)、そのやうな人間である同盟員の集まり其のものが飢餓自体である飢餓同盟〔註21〕だといふことになります。

[註20]

「周辺飛行4—自己犠牲」(もぐら通信第94号)に、自己犠牲によつて人間は、時間の中での原因と結果の連鎖の因果律を脱することでき、従ひ、この『飢餓同盟』の文脈では同盟員は法律の適用のない、裁判で司法が裁きやうのない人間たちだといふ論理が一篇の掌編小説として語られてゐますので、お読み下さい。この脱出法は哲学的には超越論であり、数学的にはtopologyといふ端のない伸縮自在のゴムまり人間の一笔書きの数学です。

加えて、既に安部公房文学のOS(Operating System;基本ソフトウェア)である22歳の論文『詩と詩人(意識と無意識)』の「四、人間の在り方」に「今や吾等は其の危険に直面しているのである。我等は原因と結果の逆行に陥らぬ様に批判しつつ論理をすすめていかねばならぬ。」とある。引用を入れる。「其の危険」とは何かと云へば、18歳の論文『問題下降による肯定の批判』の言葉を使へば「それ自体巨大な蟻の巣に過ぎない」「現代社会」といふ固定した座標が確実なものだと思つて、其の座標の内部でだけ生きるといふ蟻のやうに(以上『問題下降による肯定の批判』論)「表象内容の自己内循環」を繰り返すこと(以上『詩と詩人(意識と無意識)』といふ閉鎖空間脱出論)を言つてゐます。

[註21]

飢餓といふ言葉は、1955年4月1日発表の短編『盲腸』にも出てきます。この作品は後年1974年の安部公房スタジオのための戯曲『緑色のストッキング』に実つた作品です。次のやりとりが、羊の盲腸を移植された主人公Kと手術とその後の養生の管理をしてゐる助手の牧との二人の間で交はされます。この会話がバスの停留所といふ存在の方向への道標(みちしるべ)の立つてゐる場所だといふことにも、この会話にとつて意義あることでせう。二人の言葉のやりとりの続いた中のある所で、主人公Kが牧といふ助手に次のやうに言ひます：

「すると、君は、スパイか……」

牧はあわててあたりを見まわし、声を低めた。「そんなふうには言わないで下さい。あなたは事情をまったく

誤解しているんです。いいですか、来月の学会は飢餓問題に関する二つの大きな原理の決戦場になるのです

【a】。その勝敗の鍵をあなたが握っている。あなたはこの問題を真剣に考えた事がありますか？」

「二つの原理……」Kはおどろいて牧の顔を見返した。

「いったい君はなにを言うつもりなんだ？」

「ぼくにもよく分からないんです。人間は自然をつくりかえてきた。しかし、偏見はいつもその邪魔をしようとした。いま、われわれの原理は、人間の内部の自然をつくりかえようとしている。（略）」

「もう一つの原理は？」

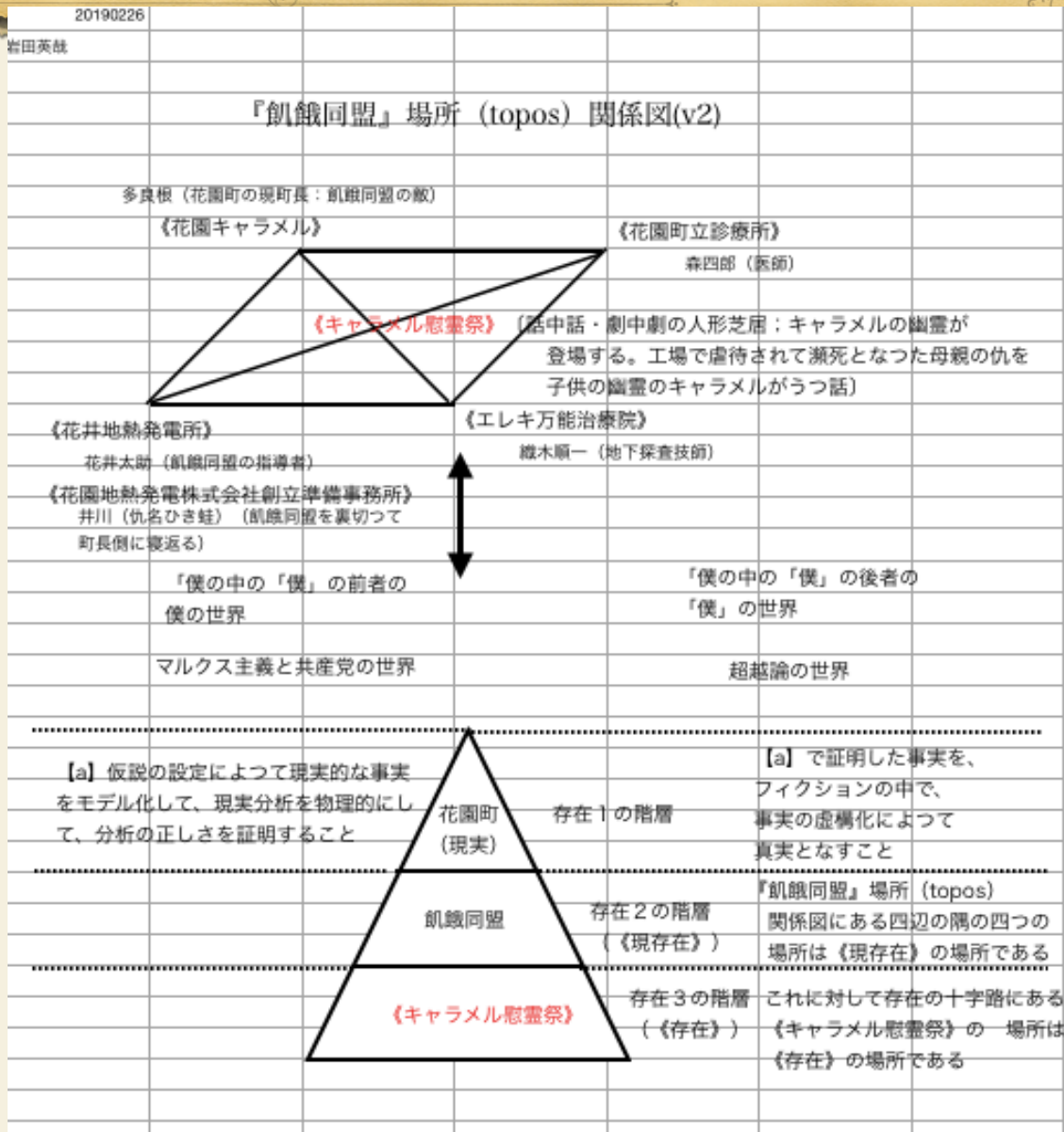
「もう一つの原理は、革命です」（傍線引用者）（全集第5巻、73ページ上段）

【a】に云ふ「飢餓問題に関する二つの大きな原理」のうちの一つは、この引用の前に出てくる「エレックス先生」といふ名前の先生の発見した原理で、Kに手術を施した「教授」と呼ばれる博士（である筈の男）は、その「先生」についても「原理」についても説明する事が一切なく、常にこの二つの名前を挙げて此の手術への疑義や反論に答へるだけで、「先生」についても「原理」はいふまでもなく絶対的に正しくといふ言ひ方で、それ以外には何の説明もなしで、ただ言論と意見の開陳を封ずるのは共産党の諷諭でせう。とすれば、この飢餓問題に関する二つの原理とは、このエレックス原理と革命原理の対決といふことになり、これは、そのまま『飢餓同盟』の名前の由来と飢餓同盟の目指す所を、この飢餓同盟発表の翌年の此の作品でも尚、指し示してゐます。二つの原理とは、勿論『飢餓同盟』に描かれたのと同様に、超越論と共産主義の原理の対立です。この主人公Kの実験結果発表の学会の名前は「飢餓学会」とまでいふのです（全集第5巻、76ページ下段）。

3.3.4 第2章第14節から第18節は超越論の存在と現存在の章である

これらの章を読んで、この小説の存在の三階層の構造は、いつもながら、次のやうになつてゐる。これで如何に安部公房が理論と実践に首尾一貫してゐるか、言行一致の人間であるか、言葉「以前」に/の人間であつて、言葉と存在に生きたかがお判りでせう。

（以下、このページは余白）



以下節の見出しが、その節の内容の要約になつてゐる場合には本文を省略します。

3.3.5 第2章第19節は廃車バスといふ存在への入り口で飢餓同盟の設立会議が開催される。マルクス主義は貨幣経済を否定する。時間の中で権力と貨幣経済を全面否定した場合を、織木は「絶対矛盾の自己同一」といつて、花井と自分との間で殴り合ひをすると、それは「自分で自分をなぐ」ることであり、「なぐり返すのも、自分をなぐつたのと同じだと」主張する。「絶対矛盾の自己同一」は十代の安部公房が知つた西田幾多郎の『善の研究』の哲学用語である。

《キャラメル慰霊祭》が第19節と第20節の余白の隙間で「既にして」読者と登場人物に対して慰霊祭言及以前に執行されて「しまつてゐる」。

3.3.5 第3章第20節では/の始まる前に「既にして」《キャラメル慰霊祭》が執行されてゐた

掲題の事実からして、狭山ヨシ子の織木順一宛の手紙と花園新聞の論説が『』といふ記号の中に引用されてゐる事は、『カンガルー・ノート』のあの《縞魚飛魚》の書く小説での例に範をと

れば、狭山ヨシ子の手紙と花園新聞の論説『読書会をあやつる政治的背景——手先になってあやつられた人形使い矢根善介』は、三層目の存在での物語を意味する。〔註22〕

この層では、従ひ、「……矢根の追放」は〔全集第4巻、197ページ下段〕、第19節と第20節の節と節の隙間で超越論的に開催された存在の「人形芝居」《キャラメル慰霊祭》の公演の直後におこなわれた。」この論理と感覚は全く古代的であり、縄文紀元的であるといふのは、源氏物語の「雲隠れ」の巻と同じであつて、光源氏の死はいつであるのかは読者には知られることなく「いつの間にか」終はつてゐるのであり、「雲隠れ」の巻は白紙のページ一枚であるからです。同様に同じ超越論が源氏物語で語られる箇所は「宇治十帖」に入つて、薫と匂宮といふ二人の男に愛された浮舟が苦しみの余り宇治川に身を投じて不図気づいて見れば、川とは正反対の林の木々の中に身を横たへてゐる自分を発見する。といふ、生死の場合にも因果律を離れた物事と物語の在り方が、誠にシャーマン安部公房の文学の持つ古代性に通じてゐるのです。〔註23〕

〔註22〕

『カンガルー・ノート』論（もぐら通信第66号から第84号）のうち『カンガルー・ノート論（14）』（もぐら通信第80号）の「5.3.2(1)冒頭共有」に、この存在の三階層図を示しましたのでご覧ください。安部公房の本格的な表通りにある全ての小説は三階層になつてゐます。

〔註23〕

〔贖月報25〕（全集第25巻附録）にドナルド・キーンの次の日本文学の物語の超越論に関する次の言葉がある：

「不思議なことですけど、結末がないということは、あるいはそれはきわめて日本的かもしれません。つまり日本的な物語の場合は源氏物語をはじめとして不完全なものです。終わったつていう感じがしない。あとはどうなったか誰もわかりません。むしろ、西洋の小説は、いわゆる結末というものがありますけれど、日本の小説は必ずしもそうじゃなかったと思います。」

3.3.6 第3章第21節はは存在の窪み（凹）の章である

織木順一が一人で、温泉の水脈を地下探査するために歩いてゐるところから此の節は始まる。上述のやうに、この節に存在の招来される窪みである「死に窪」の地形が、凹の形象と、その底へと降りて行く際の斜面と斜面に芽吹いてゐる「フキの芽」を採りに行く織木と共に描かれてゐる。安部公房が金山時と共有した『オルフェウスへのソネット』より、この崖や斜面と谷底を歌つたリルケの詩については上述の通りです。

「3.2.1 安部公房はどのやうに超越論とマルクス主義を統合したか

（略） この、存在の「窪み」（凹）でリルケとマルクスを統合して、常に二者は裏表の関係で、前期20年は社会の中に（これはマルクス）存在の「窪み」（凹）を求めた（これはリルケ）この姿勢が、1970年三島由紀夫の死を境にして、大きくリルケと自分の詩の世界へと回帰して行くに当たり、「窪み」（凹）の中に（これはリルケ）社会を求めた（これはマルクス）といふ姿勢に変はるのが、後期20年の安部公房の藝術家人生であるからです。〔註20〕「時間の停止は、安部公房の最後期の作品群を貫く鍵とさえ言つていいほど」です。といふ私の理解の正しさは『飢餓同盟』によつて証明されたといふことになります。

「人も馬も躓き、マルクスも躓いた存在の「窪み」(凹)で如何に安部公房がマルクス主義と超越論をtopologicalに統一して一次元上の存在の世界を創造した」か。これが「日本共産党員の時代にあっても、」針生一郎との「対話を読みますと、「リルケ的なものを否定的媒介」にしている以上、安部公房はリルケの影のもとにいたので」であり、そして後期20年もまた、今度は積極的に存在の詩の世界へと回帰するのであれば、やはりリルケは安部公房の元に姿を現して立ち続けてみた。前期20年はリルケは影のやうに安部公房の元に立ち続け、後期20年は舞台の上で積極的に安部公房スタジオの舞台の存在の一枚布として登場した。1970年を境に、安部公房はリルケへの言及が目に見えて多くなります。そして、リルケの名前を出さない場合でも、同じ詩的・論理的・哲学的・topologicalな存在論は演技論の根底にある演技概念《ニュートラル》として若い俳優たちに教へられたのです。」

初期安部公房論で、安部公房が詩文と散文の一次元上の統合をした事は既述の通りですが、更に今度は、さうやつて辛苦して成し遂げた成果に安住することなく、マルクス主義と超越論といふ水と油の論理の統合を二項対立の否定による第三の客観、即ち存在を求めるといふ22歳の論文『詩と詩人(意識と無意識)』の論理に基づいて、「人も馬も躓き、マルクスも躓いた存在の「窪み」(凹)で」生活(藝術の普及といふ実践)と藝術家人生(虚構の創造)の統合を図つたのが、この『飢餓同盟』だといふ事になります。

3.3.7 第3章第22節で飢餓同盟の回数不明の定例会議が開催される

回数不明といふことは、定例会議でありながら、超越論の会議だといふことを意味してゐる。それ故に、この節と次の節の間の余白で「既にして」仲間割れが起きて「しまつてゐる」ので、第23節では《花井地熱発電所》の花井太助(社長)と矢根(副社長)の間の意見の相違が表立つて同盟員の前で明らかになる。

3.3.8 第3章第23節でヴァイオリンとは何か?が明らかになる

ヴァイオリンは風の音を響かせるからといふことが判る(全集第4巻211ページ)。存在を招来する甲高い風の音である。『カンガルー・ノート』の第6章風の長歌を思ひ出してもらひたい。

ここではまだヴァイオリンは「乾いた四本の絃が遠くの林を吹きわたる風のように微かに鳴つた。」程度であるが、これから先このヴァイオリンが甲高い風の音を鳴らした時には、主人公の織木順一が死ぬ筈である。何故ならば「地下探査」のためのヴァイオリン演奏者と作曲者は自己再帰的に織木順一だからである。以下、「第3章第24節をみることにする(全集第4巻、218ページ上段)

3.3.9 第3章第24節は超越論の存在と現存在の章である

何故なら、この章が定時定刻不明不定の「四日後……/……分かつた?」といふ日にち開始不確定の数字表現と沈黙の記号で始まり、これを受けて次の新たな段落の第一行目の「……分

かった？」の段落が続くからである。

織木順一がいよいよ飢餓同盟の革命のために役立つ地下探査のための「立派な大脳メーター」になる。

この章では、森医師が織木順一の脈拍を数えるといふ呪文と、音楽的な音階の呪文が織木順一によつて唱へられる。織木は地下の温泉脈探査のためにヴァイオリンを使ふ其のヴァイオリンを弾くための音楽を作曲する音符の発声が、呪文になつてゐる。ともに二つの呪文の言葉は「……」といふ沈黙の記号の間に置かれてゐる（全集第4巻、212ページ）。《キャラメル慰霊祭》が節と節の余白の隙間で「既にして」読者と登場人物に対して慰霊祭言及以前に執行されて「しまつてゐた」のと同じである。

現場で地下探査がなされる。

3.3.10 第3章第25節で臨時緊急秘密町会議が開かれて、花園温泉復活の公式声明が公表され、「二十年間中断していた温泉審議会の再発足が決議され、新たに地熱開発協力会というものが結成されて、多良根が会長に推挙された」ことによつて超越論的飢餓同盟の存在が時間の中の政治と地価高騰といふ経済現象によつて全面的に否定される

3.3.11 第3章第26節は「大地震といふ存在の割れ目を露出させる天変地異の出来（しゅつたい）」で物語の終はる最後の章である

「いつものやうに、この大地震に原因して「一日一日とさびれていく、老いぼれた普通の町」を如何に変形させるか、あるいは登場人物を変形させるか。」と「1。『飢餓同盟』の書き出しから何が解るか」の初めに自問自答しましたが、この変形は此の最後の章の最後の節で花井太助の身に起きるのです。

井川（仇名イボ蛙）といふ裏切り者に「花井は夢中でおどりかかった。なにか暗い大きな塊りをつかんだ。それは多分地球のどこかの突端だった。ぐらっと地球が廻転し、彼は虚空にはじきだされて、宙に浮かんだ。もう何もふれないし、何も見えない。しばらく、このままにしていよう。……」

これは『デンドロカカリヤ』のコモン君と同じ契機に起こる同じ変形です。

次の段落に「……気がつくと、彼は桂川の堤防にころがって寝ていた。もうほとんど日が暮れていた。」とあるやうに、これは桂川ならぬ宇治川に身を投じて林の中で目を覚まして自分に気づく源氏物語の浮舟の姿と同じ超越論といふ原因と結果を超越した、私たち日本人の体内の遺伝子にある（と安部公房ならばいふでせう）論理です。あなたの通つた学校で此の古代の論理と感覚を全面的に否定され、会社でも時間の中の一次元のスケジュールだけを優先させ、さうやつて生活してゐるために此の感覚と論理を日常忘れてゐるのです。そして此の古代感覚と論理を思ひ出すために安部公房を読んでゐる。さて、そして更にそのまま続いて次のやうな変形が花井太助の身に起きます。あなたにも此の尻尾があるのではないか？

「花井は立ち上がろうとして、体の具合が異常なことに気づいた。いつの間にか、しっぽが長くのびているのだった。ズボンの感じで、そのしっぽがかなり大きく、しかも彼の意志にはかかわりなく、勝手に動くことが分かった。こわごわ手をやってみると、親指の太さほど、長さは十五センチくらい、ざらざらした角質の皮が、ズボンの上からでもはっきり感じ取れた。」（原文は傍線は傍点）（全集第4巻、222ページ下段）

尻尾は端であつて、安部公房のtopologyでは尻尾がクルリと丸まつてゐて一筆書きでは交差するのでtopologyにならない場合には、尻尾を切つてしまひますが（『カンガルー・ノート』第1章で警官が主人公に指し示す豚の絵の「存在しない尻尾」や同じ作品の第6章風の長歌に出てくる縄文人が鯛焼の尻尾を先に齧りとつてしまふことを思ひ出すこと）、それ故に第1章では「花井太助についての、妙なウワサだった」尻尾が、最後の章では地殻変動を契機に本物の尻尾になつて、従ひ、topologyの超越論の世界から現実の世界へと戻ることになる徴（しるし）となつてゐます。尻尾は端であるといふ事は、一筆書きが出来ないのでtopologyの世界が成立せず、メビウスの環が生まれないので連続の非連続、非連続の連続といふ差異の上位接続を可能にする始めも終わりも無い超越論の世界が成立しない。これがtopologyと超越論の関係です。

花井太助は同盟員である森医師に相談しますが、森医師は花井太助が狂気に堕ちたとして、「精神分裂病の患者がいるのですが、保護ねがいたい」旨の電話を交番にする。

かうして、『飢餓同盟』の最後ではS・カルマ氏の★印が◇印の柵になり、外部から来た「ひもじい様」の同盟員は全員「織木が死に、花井は発狂し、イボ蛙〔井川のこと〕が裏切り、矢根が去り、そしていま森も去った。こうして飢餓同盟は消滅した。」

4. どこに詩的な失敗の部分があつたのか

シナリオ『狐が二匹やってきたもしくは白と黒もしくは神様になったペテン師たち』にあつて、『飢餓同盟』にないものはなにか？

それは、詩である。

前者の長いバロック的な題名の詩の冒頭に詩が置いてある。これは22歳の論文『詩と詩人（意識と無意識）』の構成と同じです。小説であれ詩であれ、冒頭に詩篇を置くと、安部公房は想像力が湧き、筆が走るのでせう。さうすると、この冒頭の詩篇に相当するものが、超越論に基づく存在の十字路だといふことになります。しかしてまた逆に、安部公房の詩が超越論の詩であることが、安部公房の作品を書く上での結構の問題の解決策として、証明される。

ですから、私が「冒頭の書き出しで後々結構上うまく収まらなかったのは、この作品の詩的

な部分のことなのだ」と推測」した推理が、このやうな順序で考へて正しい。とすれば、そして、もし『飢餓同盟』に依然として不満を作者が感ずるとすれば、『飢餓同盟』の冒頭に詩を置かなかつたことが原因であるといふことになります。しかし、これは、政治的な圧力が相当強く安部公房に働きかけたといふ現実のことでもあることを示してゐます。

もし日本共産党を「日本共産党そつくり」の《飢餓同盟》といふ存在の組織にしたければ、『飢餓同盟』の四年後に書いた『使者』（1958年）の冒頭の詩を此処で書いて置けばよかつたのです。勿論『飢餓同盟』を書いたことに安部公房の後悔はないでせう。何しろ此の作品によつてマルクス主義と超越論の次元上での統合を果たしたのですから。この小説に詩が書かれ得なかつたことだけが、気がかりであつた。『使者』の冒頭の詩は、まさしく飢餓同盟のための詩と理解しても差し支へない詩となつてゐます。

「秘めたる使命をおびてきた
三十二人の使者たちは
あかしをたてる術もなく
冷たき狂気の墓場へと
嘲られつつ追われゆく
—彼等の歌—

確かに使者の32人といふ数字は、飢餓同盟の外部から来た「ひもじい野郎」4人の倍数になつてゐる。これら4人が存在の革命を起こして、時間の中の因果の連鎖を断ち切つて無効にして、存在の招来に成功すれば、「ひもじい野郎」は「ひもじい様」といふ神様に4人は、死んだり狂気に墮ちたりすることなく、なることができた筈です。また、『使者』の火星人のやつて来た当の火星といふ惑星は超越論の惑星であり、時間の存在しない世界であることもまた、「『周辺飛行』論（6）：案内人—周辺飛行3」（もぐら通信第93号）で論じ知るに至つたことでした。火星といふ惑星で結成された《飢餓同盟》の同盟員が「四人の使者たち」といふことになり、「おびてきた」「秘めたる使命を」言へば、『使者』の火星人と同じ使命だといふことになりませう。これが、安部公房の仮説設定の文学であり、この場合、仮説とは常に超越論であつて、これを時間の流れて移る現実 に 当て嵌めて、現実を構成要素に分解して（「問題下降」）、これらの関係を函数関係に置き換へて（「問題上昇」）、無時間の世界を具体的形象（イメージ）と生理的な感覚の文体を以つて再構成するといふこと（再度超越論の「問題下降」）、これが安部公房の超越論といふ哲学に基づく方法論なのであり、かうして日本共産党と此の党（パルタイ）と黨員の盲信するマルクス主義に、この方法論が実践と共に適用されて、現実（マルクス主義）と超越論（リルケと自分の詩の世界）を統合して『飢餓同盟』が生まれたといふわけです。たとへ詩的部分に不満が残つたにせよ。

このやうに考へて来ますと、上記前者の長い題名のシナリオ（シナリオといふ形式は、その科白の一行一行の会話のやりとりから言つて、安部公房の詩の世界だといふことを思ひだし

て下さい、そ)の冒頭の詩を『飢餓同盟』の冒頭に置くか、または此のシナリオにある通りの配役にして、花井太助と織木淳一を一对の、前者ペテン師、後者其の乾分(こぶん)といふ組み合わせにすれば、『飢餓同盟』は完璧になつたといふことを意味してゐます。

この詩の題名から云つても、また内容から云つても、白と黒は二項対立、狐の色違ひも二項対立、さすれば「赤狐、黄狐に呪文をかけると、黄狐たちまち、卵に変わる」といふ間柄のペテン師二人の主従の二項対立と考へることができる。そして、この現実の二項対立を超越する一对が、花井太助と織木順一といふペテン師と乾分(こぶん)といふ主従の組み合わせなのです。

そして、ここまで来ると、安部公房の読者であるあなたには同類の一对が他の作品にも登場することにお気づきでせう。さう、支配者と被支配者といふ一見一方的な関係にあるやうに見えてゐて、安部公房の文学はtopologyの世界ですから、二義的・二次的な位置にゐる者が一義的・一次的な位置にゐる者の実は生殺与奪の権力を持つてゐる。一次的な位置にゐる者の実は生殺与奪の権力を持つてゐる。『飛ぶ男』の兄と贗の弟、『さまざまな父』の贗の父親と息子、『スプーン曲げの少年』の父親マリ・ジャンプと息子の《スプーン曲げの少年》津鞠左右多(ゴム鞠人間)、そして『第四間氷期』の勝見博士と予言機械、『燃えつきた地図』の依頼人の女と主人公の探偵、『砂の女』の女と仁木順平、『他人の顔』の主人公と妻、『箱男』の最初の箱男と其のあとの数々の箱男の関係、『密会』の不在の父親である院長と副院長馬の関係、『方舟さくら丸』の主人公もぐらと他の三人の船長と船員の等価交換の関係、『カンガルー・ノート』の主人公と存在への案内人「垂れ目の少女」の関係。そして、『鞆』の鞆と主人公の関係、等々等々、限りがなく、そしてまた同じ関係は、言語の領域で、支配者の言語に対して被支配者の言語と(欧米白人種キリスト教徒に考へられた)クレオール語についても然り。この場合、大事な事は、支配者と今借りに呼んだ(アングロサクソン語では文法上固定してゐて絶対命令者である)主語は命令する父親であるが(アリストテレスの論理学)、しかしクレオール語の場合には述語と等価交換可能な相対的な主語であり(topology)、しかも不在の父親であるといふことです(topology:超越論:汎神論的存在論)。円(まる)い穴が無ければドーナツは実在せず、コーヒーカップの持ち手が無ければカップは実在しない。それ故に、ドーナツとコーヒーカップは等価交換可能であり、互ひに変形し合ふことができる。このクレオール語の持つtopological(位相幾何学的)な関係の特質は、往々にして、アングロサクソン語を基準にして主語が無いと誤解されて来た日本語といふ言語のみならず、安部公房の作品中の一对の父子の関係に其のまま適用され得る。本居宣長の日本語クレオール語論については別途稿を改める。

更に此処でいふべきは、topologyの観点から安部公房文学を眺めてみると、安部公房は言語構造を其のまま作品構造として互ひに等価交換可能な世界を創造し、読者が存在の方向への標識に案内されて夢と現(うつ)および言語構造と作品構造の両方を、始めも終はりも無く超越論的に「いつの間にか」「ふと気がついてみると」往来できる/してしまつてゐるやうに工夫をしたのだといふことができる。そしてまた安部公房の読者の位置と其の構造もまたこのやうな構造であるといふことになるのです。[註24]

[註24]

安部公房は古林尚とのインタビュー『共同幻想を否定する文学』で次のことを批評の果たすべき役割について述べてゐる:

「安部 ところで、アンケートの結果からみると、批評というのは、これまでのような分析的な批評だけでは、やっぱりほんというの意味で、読者というものの構造を解き明かすことにならないでしょうね。批評というものの役割には、作品を解き明かすことと同時に、読者というものの構造の解明がある。だから何かもつと総合的な視点を批評の中に導入しないと、批評が読者と無関係になってしまう。」（傍線は引用者）（『共同幻想を否定する文学』全集第23巻、293ページ上段）

「ぼくはその小林秀雄ってのを、一度も読んだことがないんです。」と率直に発言して憚らないほどに屈託のない此の安部公房の批評論は（『共同体幻想を否定する文学』全集第23巻、293ページ上段）、さう意識することなく、日本文学史上最も簡潔で本質的な小林秀雄批判 (Kritik) になつてゐる。何故なら、小林秀雄も「僕の中の「僕」」といふ安部公房と同じ話法で批評 (Kritik) を書いたからです。これが二人の詩の構造であり、作品の構造です。「生きてゐる人間とは、人間になりつつある一種の動物かな。」といふ『無常といふ事』の、川端康成にいふ有名な最後の一行は、この内省的・哲学的話法との関係では、前者の現実世界の僕（「生きてゐる人間」といふ「一種の動物」）が後者の「僕」（「人間の形をしてゐる」人間即ち「解釈を拒絶して動じないものだけが美しい」といふ、森鷗外が晩年の史伝を書くことで「歴史の魂に推参した」事で至つた当の歴史の死者といふ生者または生者といふ死者）へと移行することを言つてゐるからです。安部公房ならば、存在の階段を三段降りるのだ、といふことでせう。かくして、私は安部公房の読者の一人として、その著作『本居宣長』を論じ、本居宣長の日本語論をひらかなカタカナの文字論も含めてクレオール語論として論ずる資格があるといふことになるのです。

さう、日本共産党といふ最上位権力者の絶対命令に服する組織の中にあつては、如何に花井太助が上位接続点たる峠の生まれ育ちであつても、二義的・二次的なまつとうな「人間そつくり」のペテン師としてさすらふ事は、「二十年ほどまえに大地震があつて、それ以来温泉はとまってしまつていた。一日一日とさびれていく、老いぼれた普通の町」といふ動きの固定してしまつて、人間の移動も役割の等価交換もない花園町では、できなかつたのでありませう。人口流動性の極めて低い狭い村社会の中ではペテン師は直ぐにペテン師だとバレてしまふ。それ故に外部から来た「ひもじい野郎」とはいへ、20年前には花園町の住人であつた織木順一とペテン師兄弟の同盟を、物語の開始「以前」に二人は組むことができなかつた。これが若い頃から安部公房が都市と農村を二項対立として語る場合に、後者を否定して、また前者を単純に肯定するのではなく、現実の都市から（否定によつて）存在の都市（例へば『燃えつきた地図』）といふ第三項へと変形する理由でありませう。

さて、かうしてみると「ひもじい野郎」が「ひもじい様」といふ神様に変形する詩ができてみたら、『飢餓同盟』に詩が詠まれてゐて、作品は完璧になつてゐた。長いバロック的な題名のシナリオの冒頭の詩です。勿論《 》は、安部公房の存在論の記号です。

「《狐が二匹……の唄》

狐が二匹やってきた

黄色い狐は ヒゲが十本

赤い狐は ヒゲが十八本」

『飢餓同盟』に詩が詠まれてゐた筈の詩は、このやうになります。

《ぺてん師が二匹……の唄》

ぺてん師が二匹やってきた

黄色いペテン師は 尻尾が一本
赤い狐は ヴァイオリンの弦が四本

といふもし詩であれば、確かに尻尾の一本は最後には存在の透明なる尻尾になるために並行四辺形の辺形の真ん中に交差する存在の十字路に、四人は四本の弦の一本一本として四辺形の四隅に置かれてみて、四本の弦は交差点の織木順一に集中して接続して一体となつてみた筈です。さうして、四人で「地下探査」をおこなつたといふこととなります、その内花井太助と織木順一だけが一對のペテン師仲間で、飢餓同盟の委員長役の花井太助が補助役の子分の織木順一と等価交換可能であつて、他の3人の知らぬ間に役割を交代して権力を行使してゐる。

といふ『飢餓同盟』になつてみたと考へるのは、私の妄想でありませうか。



私も織木順一同様に、◇印の柵を超えてこちらに来てしまつたようですから、私が死ぬか、狂気に堕ちるか、人を裏切るか、または此処を去るかする前に、こちら辺で、話はお終ひにします。

かうして『飢餓同盟』論を書き終えてみると、この作品は三島由紀夫の文学ならば丁度『鏡子の家』に当たる作品であつて、作家の藝術家人生の十代の詩人の時代から最後の作品にまで其の意義の及ぶ作品だといふこと〔註25〕、さうして安部公房の読者にとつても作品の評価が否定的・消極的でありよく理解されないほどに誤解されて来た作品であるといふこと〔註26〕、といふばかりではなくむしろ逆に其の作品が理解できなければ此の藝術家の世界が理解できないほどに本質的で最も重要な作品であるといふこと、この同じ事を安部公房に関していふならば、何故なら初期安部公房の詩文と散文の統合の上に立つて更に政治と哲学と文学を安部公房の言語機能論〔註27〕に依つて統合した世界を、当初の日本共産党入党の目的通りに〔註28〕マルクス主義と超越論を一次元上で統合して一つのものとなした極めて重要な作品だからであるといふこと、さうして、この企図の実現した此の作品を近代ヨーロッパの思想史と文学史の上に措いて文明論の視点から評価すれば、前者に於いては18世紀にカントーヘーゲルに分岐する共産主義の系譜とカントーショーペンハウアーに分岐する超越論の系譜〔註29〕を統合した作品が此の作品であり、後者に於いては此れを安部公房は17世紀以来のバロック小説の文学的系譜に属する言語藝術家として〔註30〕超越論の世界認識、即ち「世界は差異である」といふ認識論（差異より生まれる範疇横断的な螺旋構造の様式）と「価値は等価で遍在する」といふ汎神論的存在論（ライプニッツの『モノド論』の topology やニュートンも含む微分積分やデカルトの『方法叙説』と解析幾何学の哲学と数学の基礎）を18歳の『問題下降に依る肯定の批判』以来22歳の論文『詩と詩人（意識と無意識）』で確立した理論に基づき実践して、実際に20世紀後半のマルクス主義の世界史上の激しい暴力的な潮流に身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ、日本列島の上で日本語の世界で其の身命を賭して産んだ世界思想史上・世界文学史上の価値を有する作品が、如何にもわたくしたち日本人らしく騒々しくはなくひつそりとした、恰も世界史といふ時間の書物のページと

ページの隙間に、或いは世界といふ空間の書物の章と章の間の隙間に、共に沈黙と余白にあるやうな『飢餓同盟』といふ作品であるといふことが、よく判ります。1954年に刊行されてから二十一世紀の今日までの65年間《飢餓同盟》の使命は理解されず、かうして此の論考が書かれるまで人に知られることがなかつた。

はつきりしてゐることは、Hunger Alliance (飢餓同盟) は、共産党の赤旗も掲げず、第四インターナショナルの歌などは決して歌ふことはないといふことです [註31]。何故なら、言語に固有の自己再帰的機能 (働き) 二つ、即ち、集団化機能と個別化機能のうち、安部公房の重きを置いたのは後者であり、これによつて又其の超越論によつて、共産主義 (ヘーゲル) から生まれたダーウィンの進化論を否定して (歴史は進歩せず、弱肉強食の世界ではない)、《弱者》といふtopologicalな二義的・二次的な位置にゐる超越論に生きる人間の救済を考へる [註32] 逆進化論 (超越論) による21世紀の日本の国の四極國體論 [註33] を考へてゐたからです。飢餓同盟は徒党を組まないし、イデオロギーとも無縁である。

時間を捨象した逆進化論 (超越論) による存在の革命とは「『飢餓同盟』人物相関図」で示したやうな個人の関係の汎神論的存在論の並行四辺形のtopologyが、言語構造として其のまま四極國體論で示したやうな組織 (国家を含む) の汎神論的存在論の並行四辺形のtopologyになつてゐる。そして、この姿と結構を其のまま小説の虚構に仕立て上げた。

これが安部公房の理想の、個人のあり方であり、人類の歴史上最大の組織である国家を含む組織のあり方であり、安部公房の理想の世界であり、ユートピア (Utopia: 何処にも無い場所 (topos))、即ち安部公房の、片道切符の、往きて還らぬ存在のふるさとであつた。四人の飢餓同盟員たちがさうであつたやうに。

[註25]

三島由紀夫の『鏡子の家』の三島由紀夫文学史上での意義と其の及ぶ影響の範囲については、「『鏡子の家』の中のS・カルマ氏」(もぐら通信第96号) および「何故安部公房は1973年(昭和48年)に『無名詩集』を巡る対談を自ら企画したか〜『鏡子の家』の絶望と『無名詩集』の絶望〜」(もぐら通信第97号)にて詳細に論じましたので、お読み下さい。

[註26]

『飢餓同盟』が発表当時如何に不評であつたかを鳥羽耕史著『運動体・安部公房』の「第10章 書割としての〈記録〉と〈家〉——『飢餓同盟』1954」(同書185~186ページ)より以下に引用してお伝へします:
「十返肇は当時の時評の中で『飢餓同盟』に触れて次のように述べている。

この小説が一風変つてゐるのは、ここには全然リアリティというものが無いからだ。彼の小説はどれでもそうであるが、ことにこの小説は一応リアリティを持たなければ書き得ないやうな題材でありながら、また部分的にはリアリティを感じさすやうにも書いてありながら、小説全体には全然といつてよいほどリアリティが見られないのである。(十返肇「長編小説合戦」)

この他、同時代小説評では「読み終わつてのこつた印象は、それほど明瞭なものではなかつた」とする佐々木基一の「書評 安部公房著 飢餓同盟 講談社刊」をはじめ、「うちけしがたい印象の希薄さ」(浜田新一・村松剛・米田和夫)などが指摘されている。肯定的な評価としては、「「美しい」恋愛もなく、「男らしい」冒険もないこの戯画の方がはるかに現代日本の現実をリアルに浮彫にして」(白井浩二) いるとか、「封建的な勢力と、それに対する奇妙なたたかいを戯画化し、風刺的な方法によつて、現実をリアリスティックにとらえている」(林尚男) と言つた書評が挙げられる。一体この小説にリアリティはないのだろうか、それともあるのだろうか。」

当時の文藝に携わる専門家たちの評言は、かうして見ると、いずれも表層的なものに留まつてゐて、『飢餓同盟』を本質的に理解することができなかつたことが判る。

[註27]

安部公房の言語機能論については諸論の文脈に応じて諸処既述の通りですが、特に『安部公房文学の毒について～安部公房の読者のための解毒剤～』（もぐら通信第55号）の「4. 言語論といふ毒（問題下降の毒）」に、安部公房の言葉を列挙しましたので、これをお読み下さい。安部公房の言語観が判ります。第55号のダウンロードは：<https://docdro.id/hsOldFA>

[註28]

中壘肇宛の書簡で安部公房はマルクス主義に惹かれる自分についてかう語つてみます：

「マルクスシズムはぼくのアンチテーゼではなく、ぼくの超えるべきものであるやうに思はれます。」（『中壘肇宛書簡第17信』全集第2巻、333ページ。1950年4月20日付）

[註29]

この二つの哲学史上の分岐については『安部公房とチョムスキー』（もぐら通信第73号）にて明らかにしましたので、お読み下さい。「西洋近世哲学史の中の安部公房の位置」図のダウンロードは：<https://docdro.id/hq9nZkS>

[註30]

リルケの『形象詩集』を読む（連載第1回）より（もぐら通信第32号）より、世界文学史の中の安部公房の位置についての箇所を引用します：

[註3]

安部公房は、コリーヌ・プレのインタビューで次のように、日本文学と世界文学に関する自分自身の位置について語っています(全集第28巻、104～105ページ)。

「―― 安部さんは処女作『終りし道の標べに』から、すでに日本の伝統を拒絶しているように見えます。日本、もしくは世界文学の流れのなかで、自作をどのように位置づけているのですか？

安部 その返事も誰か他人に任せましょう。僕も解答をぜひ聞かせてほしい。ただ言えることは、僕は日本語でしか考えることが出来ないということ。日本のなかで、日本語で考え、日本語で書いている。しかし日本以外にも読者がいるということは、現代が地域性を超えて、同時代化しているせいではないか。その点、言語の特殊性と普遍性についてのチョムスキーの考え方に同意せざるを得ません。すべての個別文法の底に、遺伝子レベルの深さで地下水のように普遍文法が流れているという考え方です。僕が拒絶したのは日本の伝統ではなく、あらゆる地域主義的な思想の現象に対してなのです。」

わたしは、このコリーヌ・プレの質問に対しての安部公房の答えにある「その返事も誰か他人に任せましょう。僕も解答をぜひ聞かせてほしい。」という此の言葉に答え、解答した人間の一人ということになります。

安部公房の日本文学史上の位置については、『夏目漱石と安部公房～日本文学史上の安部公房の位置について～』（もぐら通信第31号）と題して、同号の「編集者通信」にて明確にしましたのでお読み下さい。」

[註31]

第四インターナショナルについては：<https://ja.wikipedia.org/wiki/第四インターナショナル>

[註32]

安部公房の汎神論的存在論により遍在する、そして差異に生きる、超越論の《弱者》については、「『周辺飛行』論（8）：3。『周辺飛行』について（5）：〈これはある職業的關係によって〉—周辺飛行5」（もぐら通信第95号）および「『周辺飛行』論（9）：3。『周辺飛行』について（5）：たとえば、タブの研究—周辺飛行6」（もぐら通信第96号）」をお読みください。詳述しました。

[註33]

安部公房の考へた四極国體論については、『安部公房とチョムスキー（11）』（もぐら通信第93号: <https://www.docdroid.net/BFVceOM/93.pdf>）の「13. 安部公房の国體変形論」に、日本の古代の国體を如何に topology で変形して汎神論的存在論的の四極国體にするかを述べましたので、これをお読み下さい。二極國體から四極國體までの遷移を図示しました。この國體遷移図のダウンロードは:<https://docdro.id/hsOIdFA>

リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む

(41)

第2部 XVI

～安部公房をより深く理解するために～

岩田英哉

XVI

IMMER wieder von uns aufgerissen,
ist der Gott die Stelle, welche heilt.
Wir sind Scharfe, denn wir wollen wissen,
aber er ist heiter und verteilt.

Selbst die reine, die geweihte Spende
nimmt er anders nicht in seine Welt,
als indem er sich dem freien Ende
unbewegt entgegenstellt.

Nur der Tote trinkt
aus der hier von uns gehörten Quelle,
wenn der Gott ihm schweigend winkt, dem Toten.

Uns wird nur das Lärmen angeboten.
Und das Lamm erbittet seine Schelle
aus dem stilleren Instinkt.

【散文訳】

何度も何度も、私たちによって、引き裂かれるように引き開けられても、
神というものは、治癒する場所であるのだ。わたしたちは、鋭い者たちだ。
何故ならば、わたしたちは知っているから。しかし、神は明朗で且つ分かち与える。

純粹な、清められたお布施でさへ、神は、微動だにせず、放たれて何もない端に対立し
て位置する以外の仕方では、神の世界の中へと取り入れない。

ただ死者だけが飲むのだ
ここの、わたしたちによって聴かれている源泉の中から
神が死者に沈黙しながら合図をするときにはいつでも

わたしたちには、喧騒のみが提供される。
そして、羊は、静かな本能から
自分の鈴を懇願して得るのだ。

【解釈と鑑賞】

何か、前のソネットといい、このソネットといい、それまでのソネットと調子が違っている。変な言い方かも知れないが、極度に思弁的ではないときの、リルケの言葉の美しさが現れている。

第1連の「引き裂かれるように引き開けられて」と訳した、aufgerissen、アウフゲリッセンは、瘡蓋（かさぶた）をとるのは、きっとそれに当たることだと思う。いかにも、そんな感じがする。

人間は知りたいと欲する。知ることは、傷つき、出血し、瘡蓋のできる行為なのだ。しかし、これに対して、神は明朗であり、与える。明朗とは、第2部ソネットXI第4連では、精神に冠して使われた形容詞でもありました。より明朗なる精神は死をも受け入れ、新しい世界を創造する。それは、神に一步なりとも近づく精神のありかたなのでしょう。

さて、神は治癒する場所だといっている。原文は、神に定冠詞がついているので、神というものはと訳したように、そもそも神とは何かと言えばそれは、という意味。それは、場所であるといっている。しかし、これはリルケのいつもの、悲歌とソネットの読者には親しい考え方。リルケの「空間論（一般論）」（2009年7月18日：http://shibunraku.blogspot.com/2009/07/blog-post_3081.html）で論じたように、（もの、場所、空間）は、同義です。リルケは、神もまた空間だといっているのです。詳細は、このときのブログをご覧くださいけるとうれしい。

第2連は、神様に奉納するのに、そのお布施もまづ清められ純粹になる必要がある。そのようなお布施、喜捨できへも、神という空間が自らの中へ受け容れる仕方があるのだ。それが、「微動だにせず、放たれて何もない端に対立して位置する」という仕方、方法です。「放たれて何もない端」とは、直線を描くのに、ある点から発して直線を描く様子を想像してみると、その他方の点が無限に続く様子を思い描くことができれば、それは「放たれて何もない端」ということになるでしょう。他の端があるのですが、それは制限を受けていない、無限である。神はその他の端に立って均衡をとることによって、ものごとの全体を現す。均衡あるこの世界を創造する。そうしていながら、神は微動だにしない。微動だにしないとは、相対的なものではないのです。

第3連には、神と死者とわたしたち人間の関係が歌われています。「わたしたちによって

聴かれている源泉」とは、第1部ソネットVIII第1連を思い出すとよいのではないのでしょうか。そこでは、

NUR im Raum der Rühmung darf die Klage
gehn, die Nymphe des geweinten Quells,
wachend über unserm Niederschlage,
daß er klar sei an demselben Fels,
der die Tore trägt und die Altäre.

【散文訳】

賞賛することという空間の中でのみ、悲嘆は行くことがゆるされる。悲嘆とは、涙を流し泣かれた源泉の精、ニンフであり、わたしたちの落下が、門を担い、祭壇を担っている同じ岩のところで、清澄であると思つて（清澄であることを）見張っているのだ。

とあり、わたしたちは源泉から流れ出る水の流れに警えられています。

確かに、わたしたちは源泉の音を聞いているのです。

そうして、死者たちは、わたしたちの生からその（変ないいかたかも知れませんが）命を得ているのだと歌われています。死者が、わたしたちの生の源泉から飲むとは、そのような意味でしょう。神は、死者に、わたしたちの生の源泉から飲むように合図をし、そうして、死者は飲む。

この死者に対して、という意味で、第4連最初の一行最初の一語の原文では、「わたしたちには」が配置されているのでしょう。強意のための倒置です。

わたしたちには、喧騒のみが提供される。

これは、死者の世界は、静かな世界だと対比的に省略的に言っている。第4連最後の、

「そして、羊は、静かな本能から
自分の鈴を懇願して得るのだ。」

とは、一体何を言っているのでしょうか。

もし羊がわたしたち人間を意味しているとしたら、わたしたちの本性はやはり静寂を求めているのであり、喧騒をではなく、その帰属する静かな空間に鳴り響く鈴の音を求め

ているのだと解釈することができます。あるいは、羊を人間としてとるのではなく、文字通りの動物だとして、人間の姿と対比させて、そう歌ったと解釈することもできます。やはり、動物に対するリルケの詩想からいって、後者をとることがよいかも知れません。

【安部公房の読者のためのコメント】

最後の連の最後の二行、

「そして、羊は、静かな本能から
自分の鈴を懇願して得るのだ。」

この二行で私の連想するのはテレビドラマ『羊腸人類』（1962年）と、その元になった短編小説『盲腸』（1955年）と、それから『方舟さくら丸』（1984年）の当初予定の名前『志願囚人』です。

もし安部公房が同様の連想をして最初に短編『盲腸』を書いたとしたら、安部公房は自分の想像力が湧き出るやうにと自分の内部から外部へと言葉を産み出すために、そして現実と虚構を等価交換するために、絶えずリルケを読んでみたといふことになります。安部公房の蔵書目録があれば、読みたいところですよ。

最初の連の、

「何度も何度も、私たちによって、引き裂かれるように引き開けられても、神というものは、治癒する場所であるのだ。」

といふ二行からは、一層『盲腸』の主人公、腹を「引き裂かれるように引き開けられて」羊の盲腸を移植されたKを連想します。果たして、「治癒する場所」に「神というもの」がみたかどうか。

良い機会ですから、参考までに『羊腸人類』をめぐる作品の年譜は、全集によれば、次のやうなになつてゐます。時系列で見ますと、安部公房スタジオの演目である『緑色のストッキング』に最終的には結実してゐる。といふ事は、1955年4月1日の小説『盲腸』に、既に詩的舞臺へと連絡する詩の世界が含まれてゐるといふことになります。

1955年4月1日：小説『盲腸』（全集第5巻、65ページ）

1962年11月10日：テレビドラマ『羊腸人類』（全集第16巻、401ページ）

1974年10月15日：戯曲『緑色のストッキング』（全集第25巻、151ページ）

これらの異なる範疇の作品に共通する主題は、人間に羊の盲腸を移植して人間が草食人

間になることによつて、人類の食糧危機といふ飢餓の問題を解決するための改造人間を作らうといふことです。

この飢餓は、勿論、安部公房の事ですから単なる腹ペコの話ではなく、抽象化された虚構の中の飢餓となつてゐます。即ち、

短編『盲腸』に出て来る飢餓といふ言葉を見ますと、次のやりとりが、羊の盲腸を移植された主人公Kと手術とその後の養生の管理をしてゐる助手の牧との二人の間で交はされます。この会話がバスの停留所といふ存在の方向への道標（みちしるべ）の立つてゐる場所だといふことにも、この会話にとつて意義あることでせう。二人の言葉のやりとりの続いた中のある所で、主人公Kが牧といふ助手に次のやうに言ひます：

「すると、君は、スパイか……」

牧はあわててあたりを見まわし、声を低めた。「そんなふうには言わないで下さい。あなたは事情をまったく誤解しているんです。いいですか、来月の学会は飢餓問題に関する二つの大きな原理の決戦場になるのです【a】。その勝敗の鍵をあなたが握っている。あなたはこの問題を真剣に考えた事がありますか？」

「二つの原理……」Kはおどろいて牧の顔を見返した。

「いったい君はなにを言うつもりなんだ？」

「ぼくにもよく分からないんです。人間は自然をつくりかえてきた。しかし、偏見はいつもその邪魔をしようとした。いま、われわれの原理は、人間の内部の自然をつくりかえようとしている。（略）」

「もう一つの原理は？」

「もう一つの原理は、革命です」

（全集第5巻、73ページ上段）

【a】に云ふ「飢餓問題に関する二つの大きな原理」のうちの一つは、この引用の前に出てくる「エレックス先生」といふ名前の先生の発見した原理で、Kに手術を施した「教授」と呼ばれる博士（である筈の男）は、その「先生」についても「原理」についても説明する事が一切なく、常にこの二つの名前を挙げて此の手術への疑義や反論に答へるだけで、それ以外には何の説明もなしで、ただ強圧的に言論と意見の開陳を封ずるのです。とすれば、この飢餓問題に関する二つの原理とは、このエレックス原理と革命原理の対決といふことになり、これは、そのまま『飢餓同盟』といふ作品で「飢餓同盟」といふ名前の由来と飢餓同盟の目指す所を、この飢餓同盟発表の翌年の此の作品でも尚、指し示してゐることになります。二つの原理とは、勿論『飢餓同盟』に描かれたのと同様に、この短編にあつても依然として超越論と共産主義原理の対立です。この主人公Kの実験結果発表の学会の名前が「飢餓学会」といふのも（全集第5巻、76ページ下段）また依然として、この日本共産党員であつた時代の安部公房の動機（モチーフ）を表してゐます。

もし私の此の推理が正しければ、安部公房は生涯に亘つてリルケを読み返してゐた、それも此の例にあるやうに『オルフェウスへのソネット』を読み返した。さうだとすれば、もう一つ常に参照してゐたのはやはり『マルテの手記』であります。これらの事が、安部公房の其の奇抜な発想の源泉であつた。リルケの存在論の詩をtopologyで換骨奪胎して、自由自在に内部と外部の等価交換と、互ひにある要素の關係の裏返しによる虚構の創造は、安部公房にとっては論理としては実に楽しい遊びであり、お手の物であつたでせう。あとは形象（イメージ）が湧いて来るのを待つ。これが安部公房の問題上昇（デジタル変換：概念化：モデルとしての小説の創造〔註●〕）であり、問題下降（アナログ変換：形象（イメージ）の湧出）であるといふことになります。

〔註●〕

〔モデルとしての小説〕

二十歳の安部公房は、『没落の書』（1944年11月21日）の中で、次のやうに書いてゐます。十八歳の論文『問題下降に依る肯定の批判』と同じで、アンドレ・ブルトンならば『シュールレアリスム宣言』に相当する宣言書といふことのできる『没落の書』といふ安部公房自身の小説に関する小説観についての文章です。

「私は唯一の解決者たる宿命を拒みはしない。私は自分が他愛の義務を、自分の詩魂の内に感ずる事を人々の為に祝福する。私は総てを展開しよう。だが常に注意し給え。解決は言葉の最後のみみ与えられるものではない。君たちは画き出す人でなければならぬ。私は単に暗示者だ。絵具と構図は君たちに任せる。私はモデルを象徴しよう。それは先ず以下書き述べる概念の古塔だ。すぐれた頭脳の所有者である君達は、次の象徴詩で総てを理解するであろうけれども、尚も論理的解決を望む特殊の人々の為に、別に私自身でも一つ絵を書き上げて見よう。〔註〕それも恐らく新世紀の存在論として、重要な思想的価値を有する事になるであろうけれども、今此処では述べたくも無いし、又其の必要も認めない。私はむしろ此の古塔の詩の方を愛する。

〔註〕

存在論的現象批判、並びにその構造」

（全集第1巻、141ページ上段）（傍線筆者）

と言つてから、「概念の古塔」といふ散文詩が書かれてゐます。この詩の御一読をお薦めします。

私が『没落の書』から引用して、その趣旨をまとめると、次の通りです。

（1）安部公房は小説をモデル（模型）として製作したのだといふこと。（これが、普通の作家とは異なる、安部公房の小説の一大特徴）

（2）このモデルは象徴的なモデルであつて、これを読者に提示するので、あとは読者よ、あなたの人生を描く構図と絵の具の選択は、君たちに任せる、自分固有の人生を生きよといふこと。自分の人生は自分の白紙のキャンバス（画布）に自分で描いてくれ。それが生きる事だ。と、安部公房の小説は、さう云つてゐる。それ故に、安部公房はいつも存在への立て札を立てる。

（3）安部公房のどの作品も、安部公房の「詩魂の内に感ずる事を人々の為に祝福する」、そのために書かれてゐること。（安部公房は、この精神をリルケに学んだ）

（4）このモデルは、存在論的現象批判によるものであり、その作品構造もまた、さうであること（これが安部公房の「新象徴主義哲学」、即ち汎神論的存在論）。22歳の論文『詩と詩人（意識と無意識）』に此の事は詳しい

このやうな、安部公房の志を読みますと、安部公房の読者であるといふことは、幸せなことであり、私たちは稀有な読者であることなのだと思います。こんなことを嘗て考へた言語の藝術家はみないし、読者もみない。これが、安部公房の読者がSFの読者と重複してゐることの理由であり、両方の文学に偏見なく自由に往来する私たちだといふことになります。

連載物・単発物次回以降予定一覧

- (1) 安部浅吉のエッセイ
- (2) もぐら感覚23：概念の古塔と問題下降
- (3) 存在の中での師、石川淳
- (4) 安部公房と成城高等学校（連載第8回）：成城高等学校の教授たち
- (5) 存在とは何か～安部公房をより良く理解するために～（連載第5回）：安部公房の汎神論的存在論
- (6) 安部公房文学サーカス論
- (7) リルケの『形象詩集』を読む（連載第15回）：『殉教の女たち』
- (8) 奉天の窓から日本の文化を眺める（6）：折り紙
- (9) 言葉の眼12
- (10) 安部公房の読者のための村上春樹論（下）
- (11) 安部公房と寺山修司を論ずるための素描（4）
- (12) 安部公房の作品論（作品別の論考）
- (13) 安部公房のエッセイを読む（1）
- (14) 安部公房の生け花論
- (15) 奉天の窓から葛飾北斎の絵を眺める
- (16) 安部公房の象徴学：「新象徴主義哲学」（「再帰哲学」）入門
- (17) 安部公房の論理学～冒頭共有と結末共有の論理について～
- (18) バロックとは何か～安部公房をより良くより深く理解するために～
- (19) 詩集『没我の地平』と詩集『無名詩集』～安部公房の定立した問題とは何か～
- (20) 安部公房の詩を読む
- (21) 「問題下降」論と新象徴主義哲学
- (22) 安部公房の書簡を読む
- (23) 安部公房の食卓
- (24) 安部公房の存在の部屋とライプニッツのモナド論：窓のある部屋と窓のない部屋
- (25) 安部公房の女性の読者のための超越論
- (26) 安部公房全集未収録作品
- (27) 安部公房と本居宣長の言語機能論
- (28) 安部公房と源氏物語の物語論：仮説設定の文学
- (29) 安部公房と近松門左衛門：安部公房と浄瑠璃の道行き
- (30) 安部公房と古代の神々：伊弉册伊弉諾の神と大国主命
- (31) 安部公房と世阿弥の演技論：ニュートラルといふ概念と『花鏡』の演技論
- (32) リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む
- (33) 言語の再帰性とは何か～安部公房をよりよく理解するために～
- (34) 安部公房のハイデgger理解はどのやうなものか
- (35) 安部公房のニーチェ理解はどのやうなものか
- (36) 安部公房のマルクス主義理解はどのやうなものか
- (37) 『さまざまな父』論～何故父は「さまざま」なのか～
- (38) 『箱男』論II：『箱男』をtopologyで解説する
- (39) 安部公房の超越論で禅の公案集『無門関』を解く
- (40) 語学が苦手だと自称し公言する安部公房が何故わざわざ翻訳したのか？：『写真屋と哲学者』と『ダム・ウエイター』
- (41) 安部公房がリルケに学んだ「空白の論理」の日本語と日本文化上の意義について：大国主命や源氏物語の雲隠の巻または隠れるといふことについて
- (42) 安部公房の超越論

- (43) 安部公房とバロック哲学
 - ①安部公房とデカルト：cogito ergo sum
 - ②安部公房とライプニッツ：汎神論的存在論
 - ③安部公房とジャック・デリダ：郵便的 (postal) 意思疎通と差異
 - ④安部公房とジル・ドゥルーズ：褻といふ差異
 - ⑤安部公房とハラルド・ヴァインリッヒ：バロックの話法
- (44) 安部公房と高橋虫麻呂：偏奇な二人 (strangers in the night)
- (45) 安部公房とバロック文学
- (46) 安部公房の記号論：《 》 〈 〉 () [] 「 」 『 』 「……」
- (47) 安部公房とパスカル・キニャール：二十世紀のバロック小説 (1)
- (48) 安部公房とロブ＝グリエ：二十世紀のバロック小説 (2)
- (49) 『密会』論
- (50) 安部公房とSF/FSと房公部安：SF文学バロック論
- (51) 『方舟さくら丸』論
- (52) 『カンガルー・ノート』論 (済み)
- (53) 『燃えつきた地図』と『幻想都市のトポロジー』：安部公房とロブ＝グリエ
- (54) 言語とは何か II (済み)
- (55) エピチャム語文法 (初級篇)
- (56) エピチャム語文法 (中級篇)
- (57) エピチャム語文法 (上級篇)
- (58) 二十一世紀のバロック論
- (59) 安部公房全集全30巻読み方ガイドブック
- (60) 安部公房なりきりマニュアル (初級篇)：小説とは何か
- (61) 安部公房なりきりマニュアル (中級篇)：自分の小説を書いてみる
- (62) 安部公房なりきりマニュアル (上級篇)：安部公房級の自分の小説を書く
- (63) 安部公房とグノーシス派：天使・悪魔論～『悪魔ドゥベモウ』から『スプーン曲げの少年』まで
- (64) 詩的な、余りに詩的な：安部公房と芥川龍之介の共有する小説観 (済み)
- (65) 安部公房の/と音楽：奉天の音楽会
- (66) 『方舟さくら丸』の図像学 (イコノロジー)
- (67) 言語貨幣論：汎神論的存在論からみた貨幣の本質：貨幣とは何か？
- (68) 言語経済形態論：汎神論的存在論からみた経済の本質：経済とは何か？
- (69) 言語政治形態論：汎神論的存在論からみた政治の本質：政治とは何か？
- (70) Topologyで神道を読む (1)：祓詞と祝詞と結界のtopology
- (71) Topologyで神道を読む (2)：結び・畳み・包みのtopology

[シャーマン安部公房の神道講座：topologyで読み解く日本人の世界観]

- (71) 超越論と神道 (1)：言語と言霊
- (72) 超越論と神道 (2)：現存在 (ダーザイン) と中今 (なかいま)
- (73) 超越論と神道 (3)：topologyと産霊 (むすひ) または結び
- (74) 超越論と神道 (4)：ニュートラルと御祓ひ (をはらひ)
- (75) 超越論と神道 (5)：呪文と祓ひ・鎮魂
- (76) 超越論と神道 (6)：存在 (ザイン) と御成り
- (77) 超越論と神道 (7)：案内人と審神者 (さには)
- (78) 超越論と神道 (8)：時間の断層と分け御霊 (わけみたま)
- (79) 超越論と神道 (9)：中臣神道の祓詞 (はらひことば) をtopologyで読み解く：
古神道の世界観
- (80) 三島由紀夫の世界観と古神道・神道の世界観の類似と同一
- (81) 安部公房の世界観と古神道・神道の世界観の類似と同一

- (82) 『夢野乃鹿』論：三島由紀夫の「転身」と安部公房の「転身」
- (83) バロック小説としての『S・カルマ氏の犯罪』
- (84) 安部公房とチョムスキー（済み）
- (85) 三島由紀夫のドイツ文学講座
- (86) 安部公房のドイツ文学講座
- (87) 三島由紀夫のドイツ哲学講座
- (88) 安部公房のドイツ哲学講座
- (89) 火星人特派員日本見聞録
- (90) 超越論（汎神論的存在論）で縄文時代を読み解く
- (91) 「『使者』 vs. 『人間そっくり』」論



●荒巻義雄詩集『骸骨半島』を読む(16)：神の三角函数：数学の最高点13点といふ成績の高校生であつたわたくし目としては、函数と云ひ、それも神の三角函数などとなると、段々と苦しい論となるのであるが、まあ、なんとかやつつけました。勿論、やつつけ仕事ではありません。●『周辺飛行』論(11)：ある芸術家の肖像—周辺飛行8：いよいよ、安部公房の小説と戯曲と舞台とニュートラルの存在概念の関係と、それから初期安部公房の悪魔と犬の関係がB系統であることも、これら存在概念とB系統二つの関係も非常によくわかるやうになりました。安部公房は実に時間を掛けて詩想の熟するのを待つ人間です。成城高校時代に感濁するやうにして愛読した『マルテの』手記の言葉、世間は詩は感情だとおもつてゐるが、実はさうではない、詩は経験である、数々の経験をなして人生の最後に生まれる五行の詩、これが詩だ、といふ言葉を終生大切にしたいといふことです。●この論によつて、従来何が書いてあるのかよくわからず、安部公房文学史上位置の不明であつた『飢餓同盟』の位置と価値が明確になりました。私しも嬉しい。この作品を安部公房前衛論で論じるには限界があるといふことがお判りになつた筈です。安部公房は前衛であると言へば何かを言つたことになるといふ当時の時代に制約された、のみならず、積極的に時代の狭さの中に安部公房を押し籠める結果となる前衛論といふ、安部公房をめぐる二十世紀の悪しき風潮を此の証明によつて一掃できてよかつた。風潮に乗らぬ前衛論ならば問題はない。そして伝統(トラディション)抜きに前衛(アヴァンギャルド)はあり得ない以上(『匿名の神話—安部公房試論—』(もぐら通信第31号)をお書きになつた田中美代子さんのいふ通り)、日本語の文藝の伝統との関係の上に立つた前衛論であり且つ近代ヨーロッパ文学の伝統の上の前衛との関係論である安部公房前衛論を哲学の基礎の上に立つて(さうでなければ安部公房の文学を論じることは、実証主義的な論じ方以外には、難しい)きちんとした方法論(methodology)を以つて是非論じてもらひたい。安部公房曰く「けっきょく伝統という観念の形成ということ自身が問題なんであつて、伝統自身が問題では無いということ、非常に感ずるのだ。」(『二十世紀の文学』全集第20巻、77ページ上段)これを行ふには論者が己を知ることに努める以外には無いのです。何故ならあなたの言葉は其処から生まれ出るから。「僕の中の「僕」」といふ安部公房固有の話法の、あなたにとつての価値をよくお考へ下さい。/そして、魂と飢餓が日本共産党員時代の10年間の安部公房の生きるためのキーワードであつたとは。といふことは、やはり詩人として生きたといふことです。それ故に最も苦しかつた1950年代の前半に安部公房は詩人と深く交流をする必要があり(詩誌『列鳥』の編集委員にまで椎名麟三と共になつてゐる)、詩の力を必要としたといふことなのです。そして1950年代の後半から1960年代初まで、日本共産党から離れる方向にゐる安部公房の魂と飢餓は、TVやラジオ向けにシナリオといふ此れも安部公房にとつては一行一行が詩的連想である此のシナリオを書いて『S・カルマ氏の犯罪』に戻つてシュールレアリスティックな子供向けのドラマやミュージカルを生み出すといふ活動が必要であつたといふことなのでせう。魂と飢餓、この二つを1970年以降の小説と戯曲に当て嵌めてみると、どうでせう、皆びつたり来るやうな気がしますが、如何。魂と飢餓の『箱男』、魂と飢餓の『密会』、魂と飢餓の『方舟さくら丸』、魂と飢餓の『カンガルー・ノート』この魂と飢餓の関係にある魂は1987年のクレオール論『クレオールの魂』にも生きゐる。といふことはワープロから発見された遺作『もぐら日記』の中のクレオール語論にも。●リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む(41)：第2部XVI：“何度も何度も、私たちによつて、引き裂かれるように引き開けられても”：思ひもかけぬ「羊腸人類」論を巡る論の展開となりました。安部公房の奇想は、何ら奇想としてではなく、リルケの『オルフェウスへのソネット』と『マルテの手記』に淵源するといふ結論は、今までに論じて来た所に鑑みても、間違ひはなく、ここで判つたことは、やはり世に出てからも安部公房は前者の詩集を読んでゐただらうといふことです。魂の飢餓を癒す『オルフェウスへのソネット』として。また、モデルとしての小説観は、安部公房の小説を理解するためには最も重要です。何故こんな小説になるのかは、その文体も含めて云へば、超越論のモデル小説、もつと云へば、超越論を仮説として設定したモデルとしての「存在論的現象批判」による小説です。

●では、また、次号

差出人：

廣安部公房

〒182-0003東京都調布
市若葉町「閉ざされた無
限」

次号の原稿締切は超越論的にありません。いつでもご寄稿をお待ちしています。

次号の予告

1. 『周辺飛行』論(12)
2. 荒巻義雄詩集『骸骨半島』を読む(17)：表徴の帝国よりあなたへ
3. 安部公房の縄文紀元論(1)：一般論
4. 私の本棚：西尾幹二著『あなたは自由か』を読む～自由と奴隷について～
5. 遺作未完成三作論～『飛ぶ男』『スプーンを曲げる少年』『スプーンを曲げる少年』
5. 哲学の問題101(11)：愛(Liebe：リーベ)
6. 大久保房雄を読む(1)：文壇とは何であつたか
7. リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む(42)
8. Mole Hole Letter(13)：文化とは何か(3)

【本誌の主な献呈送付先】

本誌の趣旨を広く各界にご理解いただくために、安部公房縁りの方、有識者の方などに僭越ながら本誌をお届けしました。ご高覧いただけるとありがたく存じます。（順不同）

近藤一弥様、池田龍雄様、中田耕治様、宮西忠正様（新潮社）、北川幹雄様、富澤祥郎様（新潮社）、加藤弘一様、平野啓一郎様、巽孝之様、鳥羽耕史様、友田義行様、内藤由直様、番場寛様、田中裕之様、中野和典様、坂堅太様、ヤマザキマリ様、小島秀夫様、頭木弘樹様、高旗浩志様、島田雅彦様、赤田康和様（朝日新聞社）、富田武子様（岩波書店）、待田晋哉様（読売新聞社）

【もぐら通信の収蔵機関】

国立国会図書館、「何處にも無い図書館」

【もぐら通信の編集方針】

1. もぐら通信は、安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものです。
2. もぐら通信は、安部公房という人間とその思想及びその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものです。
3. もぐら通信は、安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものです。

4. 編集子自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うものです。

